福岡市埋蔵文化財調査報告書第1102集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

Motooka Kuwabara
元岡・桑原遺跡群16

－第18次調査の報告2－

2010

福岡市教育委員会

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

Motooka Kuwabara

元岡・桑原遺跡群16

－第18次調査の報告2－

2010

福岡市教育委員会

1. 2,4 区全景（北西から）

2. 4 区全景（南から）

1．1区全景（北東から）　　中央山頂は石ヶ原古墳（6世紀中葉、前方後円墳）

2．1区全景（南西から）　　分水嶺を越えると20次地点が見える

1．１区西側（西から）

2．調査風景（東から）

1. SX100 出土馬具（居木）表

2. SX100 出土馬具（居木）裏

3. SX100 出土木簡

序

福岡市は大陸に近く、いにしえより日本列島での社会や文化の形成に窓口としての役割を果たしてきました。こうした条件を生かし「アジアの交流拠点都市」を目指し、アジアの各地を繋ぐ学術・文化交流を進めています。

また、九州大学は「時代の変化に応じて自立的に変革し、活力を維持し続ける開かれた研究大学の構築」をコンセプトに、箱崎地区、六本松地区、原町地区のキャンパスを統合移転し、世界的レベルでの研究・教育拠点を創造するために福岡市西区元岡・桑原地区、糸島市にまたがる新キャンパスへの移転を進められています。

本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うと共に、多核連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域におけるまちづくりなど、長期的、広域的な視点から検討を行っています。移転予定地内の埋蔵文化財発掘調査は平成７年から開始しています。

本書は九州大学統合移転事業に伴い、平成11～14年に実施した元岡・桑原遺跡群第１８次調査の成果を報告するものです。この調査では古代の大規模な倉庫群や製鉄炉が発見され、木簡や馬具の発見、報道を通じて多くの市民の関心が集まりました。特に7世紀代の鞍骨（居木）は保存状態が良く、本邦最古例であり、大陸や半島から伝えられた馬具の変遷を検討できる貴重な資料となりました。本書が文化財保護への理解となり、学術研究の資料として活用頂ければ幸いです。

最後に調査にあたって協力頂いた九州大学と福岡市土地開発公社、同都市整備局、並びに元岡・桑原地区の方々をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成22年３月23日

福岡市教育委員会
教育長　山田裕嗣

調査番号	調査次数	担当者	所在地	地図番号	調査期間	調査面積	遺跡の時代
9946	第18次	吉留	大字桑原字別所	桑原129	H11.10.10 ～ H14.2.15	16,800㎡	旧石器～中世の集落・生産跡

例言

1．本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が1999年から2002年に行った元岡・桑原遺跡群第18次調査の報告書である。本事業に係わる埋蔵文化財調査報告書としては16冊目である。
2．発掘調査並びに調査報告書作成は、九州大学統合移転地造成に伴い実施したものであり、福岡市土地公社からの委託事業として実施した。
3．本書で報告する元岡・桑原遺跡群は旧石器～中世の複合遺跡であり、遺跡略号は「MOT」である。本報告の調査次数は18次であり、調査、整理、保管登録等につついは「MOT-18」と表記される。
4．本書に使用した遺構実測図作成は中園聡、鐘ヶ江賢二、長家伸、松浦一之介、小杉山大輔、西村直人、柴田知二、土井良伸、水崎るい、吉留秀敏が行い、遺物実測図作成は本田浩二郎、本村まゆみ、境聡子、鳥井幸代、山崎賀代子、名取さつき、吉留が行った。トレースは松尾奈緒子、吉留が行った。
5．本書に使用した座標は国土座標第Ⅱ系を基にしている。
6．本書に使用した写真は吉留が撮影した。空中写真については有限会社空中写真企画に撮影を委託した。
7．本書の執筆と編集は吉留秀敏が行った。
8．本報告書に関わる記録と遺物資料等は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに保管される。

目次

1　はじめに
⑴　元岡・桑原遺跡群の調査経過 …… 1
⑵　元岡・桑原遺跡群のこれまでの調査成果 …… 2
⑶　18次調査の概要 …… 5
⑷　調査の組織 …… 6
⑸　調査工程と作業方法 …… 8
⑹　調査の方法 …… 8
2　第18次調査の記録
⑴　概要 …… 9
⑵　基本土層 …… 9
⑶　第３・４面における遺構と遺物 …… 9
3　まとめ
⑴　18次地点の古代大規模造成事業と建物群の様相 …… 149
⑵　遺跡構造にみる６～７世紀の画期と特質 …… 151
⑶　６～７世紀の糸島半島の情勢とその背景 …… 152

挿図目次

Fig. 1　元岡・桑原遺跡群位置図 (1/100000)　1
Fig. 2　元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/15000) …… 2
Fig. 3　18 次のグリット設定と古代大型遺構分割図 (1/1000) …… 7
Fig. 4　18 次掘立柱建物全体配置概念図 (1/1000) …… 11
Fig. 5　18 次掘立柱建物配置図 (東1群) (1/200) …… 13
Fig. 6　掘立柱建物1 (1/60) …… 14
Fig. 7　18 次掘立柱建物配置図 (東2群) (1/200) …… 15
Fig. 8　掘立柱建物2 (1/60) …… 16
Fig. 9　掘立柱建物3 (1/60) …… 17
Fig.10　18 次掘立柱建物配置図 (東3群) (1/200) …… 19
Fig.11　掘立柱建物4 (1/60) …… 21
Fig.12　掘立柱建物5 (1/60) …… 22
Fig.13　掘立柱建物6 (1/60) …… 23
Fig.14　掘立柱建物7 (1/60) …… 24
Fig.15　18 次掘立柱建物配置図 (東4群) (1/200) …… 26
Fig.16　掘立柱建物8 (1/60) …… 27
Fig.17　掘立柱建物9 (1/60) …… 28
Fig.18　掘立柱建物10 (1/60) …… 29
Fig.19　18 次掘立柱建物配置図 (西1群) (1/200) …… 31
Fig.20　掘立柱建物11 (1/60) …… 32
Fig.21　掘立柱建物12 (1/60) …… 34
Fig.22　掘立柱建物13 (1/60) …… 35
Fig.23　掘立柱建物14 (1/60) …… 37
Fig.24　掘立柱建物15 (1/60) …… 38
Fig.25　掘立柱建物16 (1/60) …… 40
Fig.26　掘立柱建物17 (1/60) …… 42
Fig.27　掘立柱建物18 (1/60) …… 43
Fig.28　掘立柱建物19 (1/60) …… 44
Fig.29　掘立柱建物20 (1/60) …… 45
Fig.30　18 次掘立柱建物配置図 (西2群) (1/200) …… 47
Fig.31　掘立柱建物21 (1/60) …… 49
Fig.32　掘立柱建物22 (1/60) …… 50
Fig.33　掘立柱建物23 (1/60) …… 51
Fig.34　掘立柱建物24 (1/60) …… 52
Fig.35　掘立柱建物25 (1/60) …… 54
Fig.36　18 次掘立柱建物配置図 (西3群) (1/200) …… 56
Fig.37　掘立柱建物26 (1/60) …… 58
Fig.38　掘立柱建物27 (1/60) …… 59
Fig.39　掘立柱建物28 (1/60) …… 60
Fig.40　18 次製鉄関連遺構配置図 (1/1000)　62
Fig.41　精錬炉1 (1/60) …… 63
Fig.42　精錬炉2 (1/60) …… 64
Fig.43　精錬炉3 (1/60) …… 66
Fig.44　精錬炉4 (1/30) …… 67
Fig.45　鍛冶炉1 (1/20) …… 69
Fig.46　鍛冶炉2 (1/20) …… 70
Fig.47　鍛冶炉3 (1/20) …… 72
Fig.48　鍛冶炉4 (1/20) …… 73
Fig.49　鍛冶炉5 (1/20) …… 74
Fig.50　鍛冶炉6、焼土壙1 (1/20) …… 75
Fig.51　焼土壙2 (1/20) …… 77
Fig.52　焼土壙3 (1/20) …… 78
Fig.53　18 次大型遺構配置図 (1/1000) …… 82
Fig.54　谷頭石組遺構と井戸南群 (1/60) … 84
Fig.55　井戸1 (1/30) …… 85
Fig.56　谷頭石組遺構と井戸北群 (1/60) …… 87
Fig.57　井戸2 (1/30) …… 89
Fig.58　石組 (集水状) 遺構 (1/50) …… 90
Fig.59　石組 (石垣状) 遺構1 (1/30) …… 91
Fig.60　石組 (石垣状) 遺構2 (1/30) …… 92
Fig.61　石組 (石垣状) 遺構3 (1/30) …… 94
Fig.62　石組 (敷石状) 遺構 (1/100) … 96・97
Fig.63　陸橋遺構 (1/60) …… 98
Fig.64　土壙等 (1/30) …… 99
Fig.65　溝断面図 (1/60) …… 100

Fig.66　壇状遺構 (1/50) …… 102
Fig.67　土器埋納遺構1 (1/20) …… 104
Fig.68　土器埋納遺構2 (1/20) …… 105
Fig.69　掘立柱建物出土遺物1 (1/3) …… 107
Fig.70　掘立柱建物出土遺物2 (1/3) …… 108
Fig.71　掘立柱建物出土遺物3 (1/3) …… 109
Fig.72　掘立柱建物出土遺物4 (1/3) …… 110
Fig.73　製鉄関連遺構出土遺物1 (1/3) …… 111
Fig.74　製鉄関連遺構出土遺物2 (1/3) …… 112
Fig.75　石組遺構出土遺物1 (1/3) …… 113
Fig.76　石組遺構出土遺物2 (1/3) …… 114
Fig.77　土壙・井戸出土遺物 (1/3) …… 115
Fig.78　溝出土遺物1 (1/3) …… 116
Fig.79　溝出土遺物2 (1/3) …… 117
Fig.80　溝出土遺物3 (1/3) …… 118
Fig.81　溝出土遺物4 (1/3) …… 119
Fig.82　溝出土遺物5 (1/3) …… 120
Fig.83　溝出土遺物6 (1/3) …… 121
Fig.84　溝出土遺物7 (1/3) …… 122
Fig.85　溝出土遺物8 (1/3) …… 123
Fig.86　溝出土遺物9 (1/3) …… 124
Fig.87　溝出土遺物 10 (1/3) …… 125
Fig.88　壇状遺構出土遺物1 (1/3) …… 126
Fig.89　壇状遺構出土遺物2 (1/3) …… 127
Fig.90　土器埋納遺構出土遺物1 (1/4) …… 128
Fig.91　土器埋納遺構出土遺物2 (1/3) …… 129
Fig.92　土器埋納遺構出土遺物3 (1/3) …… 130
Fig.93　土器埋納遺構出土遺物4 (1/4) …… 131
Fig.94　包含層出土遺物1 (1/3) …… 132
Fig.95　包含層出土遺物2 (1/3) …… 133
Fig.96　包含層出土遺物3 (1/3) …… 134
Fig.97　包含層出土遺物4 (1/3) …… 135
Fig.98　金属器 (1/2) …… 136
Fig.99　石製品1 (1/2) …… 137
Fig.100　石製品2 (1/2) …… 138
Fig.101　木製品1 (1/2、1/4) …… 139
Fig.102　木製品2 (1/4) …… 140
Fig.103　中世遺物1 (追加資料) (1/3) …… 141
Fig.104　中世遺物2 (追加資料) (1/3) …… 142
Fig.105　18次古代遺構変遷図1 …… 145
Fig.106　18次古代遺構変遷図2 …… 146
Fig.107　18次古代遺構変遷図3 …… 147
Fig.108　18次古代遺構変遷図4 …… 148

図版目次

巻頭図版1　1　2、4区全景 (北西から)
　　2　4区全景 (南から)
巻頭図版2　1　1区全景 (北東から)
　　2　1区全景 (南西から)
巻頭図版3　1　1区西側 (西から)
　　2　調査風景 (東から)
巻頭図版4　1　馬具の一部 (居木) 表
　　2　馬具の一部 (居木) 裏
　　3　SX100 出土木簡
PL. 1　1　1区全景 (北西から) …… 155
　　2　1区全景 (北東から)
PL. 2　1　SR59 検出状況 (南から) …… 156
　　2　SR59 箱形炉断面 (西から)
PL. 3　1　SR86 排滓状況 (西から) …… 157
　　2　SR86 (南から)
PL. 4　1　SR86 炉底断面 (西から) …… 158
　　2　SR223 炉底部 (北から)
PL. 5　1　SR223 炉底断面 (南から) …… 159
　　2　SR227 検出状況 (南から)
PL. 6　1　炉 SR54 検出状況 (西から) …… 160
　　2　SR405 断面 (南から)
PL. 7　1　SR221 (西から) …… 161
　　2　SR221 炉底半裁状況 (西から)
PL. 8　1　炉 SR75 断面 (南から) …… 162
　　2　炉 SR76 断面 (南から)
　　3　炉 SR82 断面 (西から)
　　4　炉 SR221 (西から)
　　5　炉 SR222 (東から)
　　6　SR398 (南から)
　　7　SR442 (西から)
PL. 9　1　G～J－16～18 グリット建物群 (西から) …… 163
　　2　南斜面建物群 (東から)

PL. 10　1　H・I－19・20 グリット柱穴群（北から）……164
　　2　G・H－19・20 グリット柱穴群（北から）
PL. 11　1　I～K－13～15 グリット遺構全景（西から）……165
　　2　4 区全景（北西から）
PL. 12　1　SB167（西から）……166
　　2　SB214（西から）
PL. 13　1　SB215（西から）……167
　　2　SB216A（東から）
PL. 14　1　SB217（東から）……168
　　2　SB218（北から）
PL. 15　1　SB225（北から）……169
　　2　SB225P-1 土層断面（南から）
PL. 16　1　SB231 土層（北から）……170
　　2　SB243－A（南から）
PL. 17　1　SB243－B（南から）……171
　　2　SB248A-B・SD028 全景（北から）
PL. 18　1　SB252（南東から）……172
　　2　SB252（東から）
PL. 19　1　SB272（西から）……173
　　2　SB272（西から）
PL. 20　1　SB278（南から）……174
　　2　SB278・280（南から）
PL. 21　1　SB279（北から）……175
　　2　SB280（南から）
PL. 22　1　SB280P－1（西から）……176
　　2　SB280P－5（西から）
PL. 23　1　SB284（南西から）……177
　　2　SB290（南から）
PL. 24　1　SB285・310（南から）……178
　　2　SB294（南から）
PL. 25　1　SB319（西から）……179
　　2　SB320（西から）
PL. 26　1　SB326（東から）……180
　　2　SB327（南西から）
PL. 27　1　SB328（南から）……181
　　2　SB329・330（南から）
PL. 28　1　SB330（北から）……182
　　2　SB332（東から）
PL. 29　1　SB333（東から）……183
　　2　SB334（東から）
PL. 30　1　SB335（東から）……184
　　2　SB336（東から）
PL. 31　1　SB337（南から）……185
　　2　SB349 半掘状況（東から）
PL. 32　1　SB381（南から）……186
　　2　SB391・419（北から）
PL. 33　1　SB407・408（西から）……187
　　2　SB454（北から）
PL. 34　1　SB514（東から）……188
　　2　SB526（南から）
PL. 35　1　SB527（南東から）……189
　　2　SB527・528（東から）
PL. 36　1　F－24・25 区建物（西から）…190
　　2　SB528（東から）
PL. 37　1　SX100D-1 区下部礫堆（南西から）……191
　　2　SX100 谷頭部（北から）
PL. 38　1　SE286～288（東から）……192
　　2　SE286 近景（西から）
PL. 39　1　SE286（南から）……193
　　2　SE287（東から）
PL. 40　1　SE421・422（北から）……194
　　2　SE422 調査状況（西から）
PL. 41　1　SE453 掘方内石組（北から）…195
　　2　SE429 完掘状況（南から）
PL. 42　1　SD41（北から）……196
　　2　SD41（西から）
PL. 43　1　SD41 南側土層断面（北から）…197
　　2　SD41 1 区北壁土層
PL. 44　1　SR59 排滓壙調査状況（南から）198
　　2　SR59 排滓壙断面（南から）
PL. 45　1　SR86 半裁掘り下げ（西から）…199
　　2　SR86（西から）
PL. 46　1　SX202 縦軸土層（北東から）…200
　　2　SX219 全景（北東から）
PL. 47　1　SR223 全景（東から）……201
　　2　SR227（西から）
PL. 48　1　SR376 完掘状況（東から）……202

2 SX441（南から）
PL. 49 1 SK42 土層断面（西から）……203
2 SX45 土層（南から）
3 SK46 土層断面（北から）
4 SK47 土層断面（西から）
5 SR60・61 検出状況（西から）
6 SR62 完掘状況（南から）
7 SR64 土層断面（北から）
8 炉 SR65 断面（西から）
PL. 50 1 SR66 土層断面（北から）……204
2 炉 SR67 断面（南から）
3 炉 SR68 断面（南から）
4 SR68 土層断面（南から）
5 SR69 検出状況（南から）
6 炉 SR70 断面（南から）
7 炉 SR72 断面（南から）
8 炉 SR73 断面（南から）
PL. 51 1 炉 SR77 断面（東から）……205
2 炉 SR78 断面（南から）
3 炉 SR79 断面（東から）
4 炉 SR80 断面（西から）
5 炉 SR85 断面（西から）
6 炉 SR87 断面（西から）
7 SR206 断面（西から）
8 SX224 断面土層（南から）
PL. 52 1 SR273 断面（北から）……206
2 SR274 掘り下げ（西から）
3 SR318 断面（東から）
4 SR394（南から）
5 SR44 完掘状況（西から）
6 焼土壙 SR45 完掘状況（南から）
7 焼土壙 SR84 完掘状況（南から）
8 焼土壙 SR84 断面（南から）
PL. 53 1 SD296 周辺建物群（南から）…207
2 SD296 周辺建物群（東から）
PL. 54 1 SX100（SB161）F 区西壁（東から）
……208
2 SX518 断面土層（東から）
PL. 55 1 陸橋 SX100（北から）……209
2 陸橋 SX100 内石組遺構（東から）
PL. 56 1 陸橋 SX224（北から）……210
2 1 区第 3 面南側（北から）
PL. 57 1 SX100F-2 区礫堆検出状況（西から）
……211
2 SX100F1・2 区礫堆検出状況
（北から）
PL. 58 1 SX93 破砕大甕（東から）……212
2 SX529（西から）
PL. 59 1 SX107（西から）……213
2 SX529 検出状況（東から）
PL. 60 1 埋甕 SX229（西から）……214
2 埋甕 SX68 断面（南から）
3 SX100C －1 区木簡出土状況
4 SX111 居木出土状況（南から）
5 SX100 出土タタキあて具（表）
SX100 出土タタキあて具（側）
6 SX100 出土ハケ工具（裏）
7 SX100 出土ハケ工具 2

1　はじめに

（1）元岡・桑原遺跡群の調査経過

平成6年度から開始した九州大学統合移転地内の元岡・桑原遺跡群の発掘調査は2009年度までに54次調査に達し、調査開始後16年目となった。もちろん発掘調査以前から埋蔵文化財の保存業務は始められており、これまでに実施した九州大学移転に関係し、実施した埋蔵文化財に係る業務は、事前協議、踏査、試掘、発掘調査などがある。このうち試掘以前に重要地区として敷地内の緑地として保存された地区は古墳、中世山城（表1参照）などがある。また試掘調査を受けて保存協議を行い、設計変更などで保存したのは瓜尾貝塚地区（28次）などがある。さらに発掘調査の結果、重要性が把握され協議のうえ、全面あるいは一部が保存された調査地区としては、金くそ古墳や7、13、15、20、27、36次などがある。これ以外に開発行為で破壊される埋蔵文化財の範囲については発掘調査による記録保存として対応している。なお、本移転地内における福岡市土地開発公社による文化財保護法第92条による発掘調査は、平成20年度に終了した。その後、2009年度以降は九州大学からの委託による文化財保護法第93条による発掘調査を進めているが、こうした経緯により九州大学統合移転地内に常駐する福岡市埋蔵文化財第2課職員は1名減員となり、発掘調査をはじめとする埋蔵文化財保護業務は担当職員1名で対応することとなる。

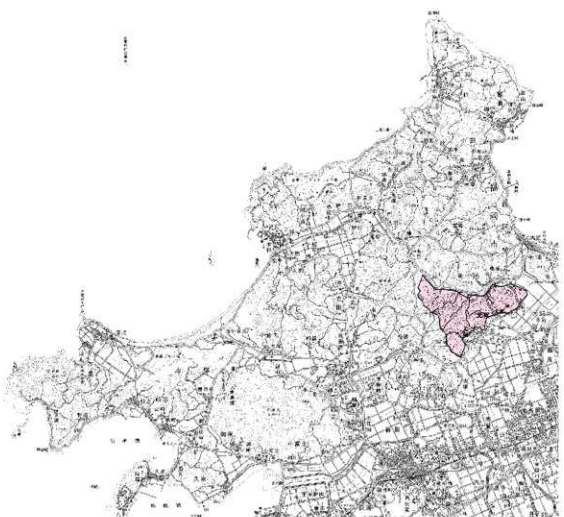


Fig.1　元岡・桑原遺跡群位置図（1/100000）

（2）元岡・桑原遺跡群のこれまでの調査成果

元岡・桑原遺跡群は玄界灘に突出した糸島半島の基部に位置し、福岡市西区大字元岡と同大字桑原にまたがる丘陵地帯に分布する遺跡群の総称である。遺跡の立地する丘陵は第三紀後葉に形成された花崗岩を基盤とし、高さは標高 100m 前後を頂部として樹枝状の浸食谷が地形を複雑にしている。遺跡群の東～南側は現在広い水田耕地となっているが、古代から中世までは今津湾が深く入り込み、遺跡近くまで迫っていた。これが古墳時代以降の埋積と近世以降の干拓事業により陸化したものである。本地域では縄文時代の瓜尾貝塚（県指定史跡）と少数の古墳が知られているのみであったが、平成７年以降に開始した九州大学統合移転用地の事前確認調査の結果、新たに各時代に及ぶ多数の遺跡が発見された。

糸島半島を中心とした歴史的景観を概観すると、北部九州の中での特異な様相を見ることができる。

まず旧石器時代から縄文時代前半期の遺跡は、主に山際の段丘面～斜面上に分布し、周辺地域と同様に狩猟採集活動の痕跡を見せる。本遺跡群では 2、3、7、10、15、18、20、22、24、27、28、42、49、52、53、54 次地点で同時期の遺構や遺物が出土している。

縄文時代後半期になると、旧今津湾と関わる瓜尾、飛櫛貝塚等が現れる。貝塚は北部九州では稀な存在であるが、この今津湾と旧遠賀湾地域に多く分布している。なお本遺跡群の北側に位置する大原遺跡では縄文時代後～晩期の焼畑遺構が報告され、この段階には初期畑作農耕の普及が進んでいたと考えられる。また、大原遺跡や瓜尾貝塚はそれぞれ黒曜石等の北部九州の石材供給起点となっており、

Fig.2　元岡・桑原遺跡群調査地点位置図（1/15000）　　赤アミ部が 18 次調査地点

九州大学統合移転地内（元岡・桑原遺跡群）発掘調査一覧（H21.7 現在）															
	遺跡名		原因	担当者	所在地	調査開始日	調査終了日	古墳基数	調査面積	時期	検出遺構	調査後の処置	出土遺物	報告書	
	次数	別称												発行年度	集
9602	第1次	元岡・桑原遺跡群	確認調査	池崎・小林	大字元岡字	H9.12.1	H10.10.31			平安時代	試掘のみ			報告書不要	
9656	第1次	桑原石ヶ元古墳群	確認調査	松浦	大字桑原字石ヶ元	H8.11.11	H10.10.31	30	8,154	古墳時代	群集墳、5～6世紀、陶質土器、鍛冶具、環頭太刀	保存	104	報告書H14	744
9657	第1次	桑原金屎古墳	確認調査	久住	大字桑原字金屎	H8.8.20	H8.11.29	1	500	古墳時代	前方後円墳、割竹形木棺、鏡	保存	1	報告書H17	909
9658	第1次	元岡石ヶ原古墳	確認調査	松浦・菅波	大字元岡字石ヶ原	H8.8.27	H8.11.29	1	1,280	古墳時代	[illegible]	調査後造成	3	報告書H17	909
9659	第2次		公社	久住	大字桑原字時分元	H8.11.11	H9.3.25		3,007	奈良時代	古墳時代～古代溝、土坑、水田	調査後造成	35	報告書H13	722
9763	第3次	元岡古墳群M群	公社	菅波	大字元岡字瓜尾	H9.11.19	H11.2.22	1	3,500	縄文時代	縄文時代石組炉、弥生時代住居址、円墳	調査後造成	144	報告書H15	829
9764	第4次		公社	池崎	大字元岡字石ヶ元	H9.12.1	H10.3.31		1,219	室町時代	古代～中世掘立柱建物・溝	調査後造成	5	報告書H15	829
9771	確認調査	元岡古墳群Z次	公社	松浦	大字元岡字下の畑	H9.11.10	H9.11.28		60	古墳時代	試掘のみ		3		
9811	第5次		公社	松村	大字元岡字石ヶ元	H10.4.27	H10.6.23		2,500	古墳時代	古代土坑・包含層	調査後造成	1	概報H12	693
9812	第6次		公社	松村	大字元岡字石ヶ元	H10.6.30	H10.8.28		2,800	古墳時代	古墳時代包含層	調査後造成	1	概報H12	693
9813	第7次		公社	吉留	大字元岡字池ノ浦	H10.5.6	H11.6.11		7,500	古墳時代	古墳時代～古代住居址・建物、池、製鉄炉、木簡	保存	530	報告書H18	1012
9829	第8次	元岡古墳群M群	公社	松村	大字元岡字大坂	H10.9.16	H10.12.25	1	300	古墳時代	円墳	調査後造成	2	報告書H15	829
9851	第9次		公社	松浦	大字元岡字池ノ浦	H10.11.2	H10.12.10		190	弥生時代	弥生時代住居址	調査後造成	12	概報H12	693
9854	第10次		公社	松浦	大字桑原字柳ヶ浦	H11.1.6	H11.2.25		1,336	古代～中世	古代～中世包含層	調査後造成	1	概報H12	693
9855	第11次		公社	松村	大字桑原字柳ヶ浦	H11.1.6	H11.3.20		1,650	古墳時代	古墳時代～古代土壙、包含層	調査後造成	8	報告書H15	829
9902	第12次		公社	菅波	大字桑原字[illegible]	H11.4.6	H12.3.28		5,500	[illegible]時代～明時代	古代製鉄炉	保存	326	報告書H16-19	860-1063
9903	第13次		公社	松浦	大字元岡字小倉	H11.4.12	H12.3.16	3	600	古墳時代	前方後円墳1基、円墳2基、鏡	調査後造成	6	報告書H16	861
9904	第14次		公社	松村	大字桑原字柳ヶ浦	H11.4.22	H11.7.22		1,200	古代	古代包含層	調査後造成	1	概報H12	693
9923	第15次		公社	吉留	大字桑原字[illegible]	H11.6.11	H11.9.28		3,500	縄文～古代	古代包含層、木簡、中世水田	保存	80	報告書H16-19	860
9933	第16次		公社	松村	大字桑原字牛切	H11.8.2	H11.11.10		1,200	縄文時代、古代	古代包含層	調査後造成	1	概報H12	693
9934	第17次	元岡古墳群B群	公社	松浦	大字元岡字池ノ浦	H11.9.10	H11.12.8	2	517	古墳時代後期	円墳	調査後造成	4	報告書H16	861
9946	第18次		公社	吉留	大字桑原字[illegible]		H14.2.15	1	16,800	古代	古墳時代～古代、住居、建物、井戸、池、製鉄炉、木簡、銅[illegible]	調査後造成	1100	報告書H20-21	1063-1102
9947	第19次		公社	松村	大字桑原字牛切		H11.12.15		3,000	古代	古代包含層	調査後造成	1	概報H14	743
0001	第20次		公社	菅波	大字桑原字戸山	H12.4.5	H15.5.23		20,130	古代	古墳時代住居、古代建物、製鉄炉、木簡	15,000㎡保存	2050	報告書H18・19・20	[illegible]
0002	第21次	石ヶ元古墳群・桑原古墳群	埋文課分	松浦	大字桑原字石ヶ元	H12.4.5	H12.9.21	3	3,170	古墳時代	石ヶ元古墳群円墳1基、桑原古墳群A群1基	調査後造成	6	報告書H16	861
0033	第22次		公社	松村	大字桑原字牛切	H12.4.10	H12.10.25		4,750	古代	古代掘立柱建物、製鉄関連遺構	調査後造成	10	報告書H17	909
0019	第23次		公社	二宮	大字元岡・桑原	H12.6.1	H13.3.31		8,110	古代	確認調査	[illegible]	1	報告書H19	1011
0034	第24次		公社	松村・濱石	大字桑原字金屎	H12.8.21	H15.3.20		5,500	古代	古墳時代住居址、古代製鉄炉	調査後造成	800	報告書H16-19	860
0052	第25次	桑原古墳群A群	公社	松浦・星野	大字桑原字石ヶ原		H13.11.30	7	2,200	古墳時代	円墳	調査後造成	16	報告書H16	861
0110	第26次		公社	二宮	大字桑原字戸山	H13.4.5	H13.11.30	1	5,487	古墳時代～古代	古墳時代住居址、円墳、古代掘立柱建物	保存3,442㎡	1	報告H18	963
0153	第27次		公社	二宮	大字桑原字戸山	H13.12.1	H14.6.20		4,495	古墳時代	古墳時代住居址	[illegible]	106	報告書H17	909
0154	第28次		公社	屋山	大字元岡字池ノ浦	H14.2.1	H14.7.4	11	2,200	古代～中世	古代～中世包含層、縄文貝塚は調査除外、保存	調査後造成	30	報告書H17	909
0204	第29次	元岡古墳群N群	公社	星野	大字桑原字石ヶ原	H14.4.5	H15.9.30		4,000	古墳時代	円墳	調査後造成	10	報告書H16	861
0240	第30次		公社	二宮	大字桑原字牛切	H14.8.1	H14.9.30		2,450	古代	古代包含層	調査後造成	0	報告書H19	1011
0242	第31次		九大	二宮・上角	大字元岡字[illegible]	H15.4.1	H18.1.13		10,000	古墳～古代	古代瓦窯・製鉄、古墳時代[illegible]遺物	調査後造成	1200	報告書H21	1103
0257	第32次		[illegible]	二宮	大字元岡字宮前	H15.1.20	H15.3.31		1,700		試掘のみ		0	不要	
0303	第33次	桑原[illegible]古墳群	九大	濱石	大字桑原字平川	H15.4.8	H15.5.19	1	450	古墳時代	石室残骸のみ	調査後造成	2	報告書H20	1064
0310	第34次	元岡古墳群J群	公社	屋山	大字元岡字石ヶ原	H15.4.1	H15.8.12	3	1,200	古墳時代	3基のうち1基は5Gに石室のみ調査、その成果も掲載	調査後造成	3	報告書H17	909
0340	第35次	石ヶ原古墳	公社	濱石・菅波	大字元岡字石ヶ原	H15.5.20	H17.1.12	1	1,853	古墳時代	[illegible]	調査後造成	1	報告書H17	909
0341	第36次	経塚古墳	公社	屋山	大字桑原字深田	H15.9.1	H17.3.31	1	3,500	古墳時代・近世	大型円墳＋中近世墓群	保存	196	報告書H19・20	1011
0365	第37次	元岡古墳群O群	公社	濱石	大字元岡字石ヶ原	H15.10.20	H16.2.26	4	461	古墳時代	極小群集墳、馬具副葬	調査後造成	3	報告書H16	861
0371	第38次	水崎城	公社	菅波・池田	大字元岡字大久保	H16.3.8	H17.1.17		1,000		堀跡	調査後造成	1		
04.04	第39次		埋文課分	埋文課・松浦	大字元岡字中ノ下	H16.4.5	H16.4.16		680	弥生時代中期	包含層	調査後造成	80	元岡幼稚園	
0410	第40次		九大	米倉	大字桑原字深田	H16.4.7	H16.4.30		1,000		遺物少量流れ込み	調査後造成	1	報告書H20	1064
0435	第41次		九大	米倉	大字元岡字[illegible]	H16.5.7	H18.2.17		836	飛鳥～平安	古代製鉄、包含層	調査後造成	30	報告書H20	1064
0451	第42次		九大	[illegible]	大字元岡字二又	H16.10.1	H21.6.30		5,000	[illegible]	弥生生産跡、溝、自然流路、金属器、木器		9063		
0486	第43次	元岡古墳群	埋文課分	池田・埋文課	大字元岡字石ヶ原	H17.2.7	H17.3.8		39	古墳後期	古墳墓道・その後[illegible]	調査後造成・[illegible]	1	[illegible]	
0523	第44次		九大	池田・木下	大字元岡字[illegible]	H17.6.1	H17.10.20		1,189	弥生～中世	古墳～古代集落	調査後造成	60	報告書H20	1064
0535	第45次	桑原古墳群A群	公社	池田	大字桑原字戸山	H17.7.20	H17.11.22	3	1,128	古墳後期	群集墳	調査後造成	30		
0538	第46次		埋文課分	久住	大字元岡地内	H17.8.8	H17.10.11		403	弥生～中世	中世建物、溝、井戸、柱穴ほか	調査後造成	4	報告書H18	965
0562	第47次	紙古墳	九大	上角	大字元岡字[illegible]	H18.1.5	H18.3.10	1	107	確認調査	当初前方後円墳は円墳と推定	古墳部分保存	1	報告書H20	1064
0563	第48次		公社	池田	大字桑原	H18.1.10	H18.2.23		447	弥生～古代	竪穴住居	調査後造成	17		
0611	第49次		公社	池田	大字桑原	H18.4.3	H19.3.22		2,723	古墳～古代	竪穴住居、建物、溝など	調査後造成	55		
0709	第50次		公社	池田	大字桑原字牛切	H19.4.1	H19.8.27		811	近世	墓域、土坑墓等45基ほか	調査後造成	44		
0741	第51次		公社	池田	大字桑原字金屎	H19.8.29	H20.10.3		6,888	弥生～中世	古墳時代集落、古代包含層	調査後造成	275		
0763	第52次		九大	常松・吉留	大字元岡字二又	H20.1.21	調査中		3,000	弥生～古墳時代	[illegible]				
0768	第53次		公社	池田	大字桑原字金屎	H20.2.19	H20.4.9		770	古代	古代建物、井戸、溝など	調査後造成	7		
0844	第54次		公社	池田	大字桑原字戸山	H20.10.6	H21.1.9		1,872	古代	古代建物ほか	調査後造成	53		

表１．元岡・桑原遺跡群調査一覧表

糸島半島を介し玄界灘沿岸を結ぶ海上交易が存在したことが判明している。本遺跡群では28次地点で瓜尾貝塚の延長部貝層や黒曜石原石埋納遺構が確認されたほか、2次で船元式（中期）や広田式（晩期）、7次で坂の下式（後期）、15、18次で阿高式（中期）、42次で黒川式、52次で並木式（中期）土器などが出土している。

弥生時代前期になると本稲農耕が普及し、今津湾に浮かぶ今山に産出する玄武岩を素材とする大型石斧類の集約的生産が開始される。この石斧は開墾や木材確保の主要具として、北部九州から中九州まで広い供給圏を形成する。今津湾岸では縄文時代から継続する剥片石器の交易と併せて、関連する小規模遺跡が多く形成されている。本遺跡群周辺では弥生時代の水稲農耕の導入はやや遅れるが、前期末から中期には多くの集落遺跡の形成が認められる。本遺跡群では3次地点で小規模な集落が確認されているほか、2、7、15、20次地点で遺物や遺構が発見されている。なお現在調査中の42、52次地点では、谷部包含層から多量の土器、木器の他、無文土器や金属器などが出土していて、この段階に朝鮮半島との交流が本格化したことが推定される。

弥生時代後期以降になると今津湾周辺では今宿五郎江遺跡や大塚遺跡を中心に大規模な環濠集落が形成され、農業、漁業関連遺物と共に朝鮮半島や国内各地との交易を示す土器、陶質土器や金属器類、玉類が多く出土する。2、20、27次地点で後期中葉～末葉の遺構、遺物が確認されているほか、42、52次地点ではこの時期の多くの掘立柱建物と共に鏡、小銅鐸や貨泉、五朱銭や半島系土器、また山陰、瀬戸内地域の遺物が出土している。本地域の集団が広範囲な交易にも従事していた事が予測されている。

古墳時代前半期には今山遺跡などで製塩活動も認められる。周辺では引き続き海浜を中心に漁業や交易に関わる集落遺跡が分布する。その中で本遺跡群の丘陵頂部には塩除古墳、池ノ浦古墳、峰古墳などの本地域では大型の前方後円墳が多数築造されている。古墳時代後半期には、石ヶ原古墳など引き続き大型の前方後円墳が築造されるとともに、群集墳の築造や集落の増加が著しい。群集墳の副葬、供献品に鍛冶工具や陶質土器など初期の製鉄関連遺物や朝鮮半島からもたらされた文物がある点は注目される。集落は丘陵の縁辺や狭長な谷部にも展開し、糸島半島の広域に集団の増加が予測される。近年こうした特殊な様相の背景には、大和朝廷による対外政策との関連が指摘されている。『日本書紀』推古10（602）年に、撃新羅将軍に任命された来目皇子が二万五千の兵を嶋郡に駐屯させたが、嶋郡において来目皇子の急逝により遠征は中止されたとの記事がある。こうした軍事的緊張が古墳時代後期から末にかけての本地域での集落の著しい増加をもたらした背景と関連つける見解も示されている。

古代には、糸島半島は嶋（志麻）郡に属し、登志、川辺、韓良、明敷、久米、加夜、志麻、鶏永の八郷に分かれていたが、本遺跡群が該当する郷は現時点では不明である。また、国内最古である大宝二（702）年の嶋郡川辺里戸籍の存在、古代鉄生産の記録などは本地域の重要性を改めて伺うことが出来る。本遺跡群ではこれまで古代の木簡が7、15、20次の3地点で発見されている。今次調査でも1点の木簡と墨書土器などが出土した。こうした状況から個別調査地点の性格と共に、この地域全体の歴史的動向を踏まえての調査、検討が望まれるのである。古代末にはこの地域は安楽寺領桑原庄となる。『安楽寺草創日記』には、康和二(1100)年に桑原の荘園領地三十町を寄進したとの記載がある。

中世になると本地域には、志摩郡を中心に広大な荘園を形成する法金剛院領怡土庄が成立する。今津湾は多くの貿易船が出入りする外港として平安時代末になると著しく栄えている。「今津」の名称も、博多津に対しての、新たな今の「津」と呼ばれたことから生まれた地名とも言われている。今津のおもな港湾施設は湾西側の毘沙門山南麓にあり、現在の今津本町から浜崎町付近の海浜部と考えられる。

今津湾から南宋に二度渡海した著名な禅僧栄西が関わる誓願寺は現在も当地に所在している。また周辺には勝福寺や今津古墓など日宋貿易に関わる寺社や遺跡が多く分布する。平安時代末から中世前期にはこれらの寺社を中心に貿易の富に恵まれ「今津千軒」と呼ばれるほどに港湾都市として発展していた。残念ながら一帯の考古学的調査は進んでいないが、今津B遺跡では山麓斜面に誓願寺の僧坊に関わる遺構群が発見され、隣接する今津C遺跡では、海浜の砂丘上に礎石建物や瓦、輸入陶磁器などが発見されている。

さて、本地域に関係する中世文書のなかで、観応元年（1350）の足利尊氏充行状案（有浦文書『南北朝遺文』二八四五）に、「筑前国本岡城郭・志登社領家・同地頭職を松浦佐志源蔵人披に充行う」とあり、「本岡城郭」の存在が記されている。この点に検討を加えた服部秀雄氏は、この城郭の重要性を示しつつ南北朝期のこの段階に完成された本格的な城郭となっていないのではないかと見ている。「本岡城郭」の比定地は現時点で不明である。考古学的には、現在の元岡集落の西側隣地で行われた46次調査A区で11～15世紀に及ぶ集落跡が確認されており、中世元岡集落の一部と見られた。また、周辺の踏査で字馬場に隣接する八坂神社東側の畑地等で13世紀前後の陶磁器類が採集されている。この八坂神社から東側一帯は丘陵を分断し、低平ではあるが段状造成の痕跡がある。中世元岡集落の前面にあり、旧今津湾に迫り出したこの場所は、字「馬場」の存在からみても「本岡城郭」の候補地の一つと考えられる。

18次地点は元岡集落から桑原集落へ向かう大坂越えの路線沿いにあり、今津港の西方約3.5kmに位置している。本遺跡から今津港は戸山の山陰となり直接には眺望できない。しかし大原川への流路付け替え以前の幸川は今津湾に注いでおり、川沿いに下るならば小舟などで短時間に直接連絡できる位置にあった。こうした点からも周辺の中世集落の形成と展開は、今津港の発展状況と無関係ではないと考えられる。18次調査区における中世集落の成立については前回報告文に詳述したが、急峻な戸山の西斜面に壇状の平坦面を複数造成し、小規模な建物や井戸などが設けられていた。谷部中央には狭く小規模な水田面も造営されていたが、自立経営体とは考え難く、荘園領主である寺院の支配下に成立した「別所」集落と類推した。この「別所」集落の変遷は、近隣に推定される「今津別所」とともに中世今津港の発展と関連しているとも考えられた。

中世後期には大友氏による博多支配とともに志摩郡へも介入が広がる。糸島半島東部で博多湾を見下ろす柑子岳城を中心山城とし、多数の枝城が造られる。本遺跡群には戸山城、水崎城、志摩野城などがある。18次調査区は戸山城の西側裾部にあたり、道路状遺構SX204がこの谷から斜面を経由して戸山城、水崎城に連なる尾根線に達していることから、桑原集落側からの登城ルートとして設けられた可能性がある。

近世に入ると今津は糸島地域の年貢積出港など廻船業を主とする浦分となり、再び漁業を始めるなど衰退の途を辿る。周辺でも貿易に関連する発展は途絶え、漁業、農業への依存を高めていく。寛文5（1665）年からは今津湾の干拓事業が開始される。

（3）18次調査の概要

第18次調査地点は平成7（1995）年度に実施した九州大学統合移転地内の確認調査の結果、B区5地点で新たに確認された遺跡である。福岡市西区大字桑原字別所（別所）に所在する。遺跡は桑原（大原）川の南岸にあり、北西に開口する狭い谷地形の範囲である。遺跡のすぐ東側は柑子岳の支城とされる中世山城の戸山城があり、その南麓斜面を含んでいる。現在の桑原集落の川を挟んで南側に位置する。確認調査では谷部内への数ヶ所のトレンチ調査の結果、2～3mに達する深い埋土下に、

炉、柱穴、鉄滓等が確認されたことから、当初は小規模な製鉄関連遺跡と予測された。しかし、既に第7次、13次発掘調査などで、本地域の谷部に展開する古代製鉄関連遺跡の大規模性が明らかとなり、かつ重要性が認識されていたので、この調査区でも当初から広範囲で、大規模な重層的遺跡の存在も想定されていた。

発掘調査は平成11（1999）年10月10日から開始した。当初は調査面積約14,000㎡を想定し、谷部は近年に放置された田畑と住宅、倉庫撤去後の草類主体の荒れ地であったが、斜面に近づくと雑木林や孟宗竹林が著しく繁茂していた。調査開始にあたってそうした林木の伐開作業が必要となり、人力でその作業を行った後に、重機による掘削作業を開始した。

作業実施にあたっては発掘時の排土処理と、長期に及ぶ調査期間中の遺跡保全、また担当調査員が1名であったための調査限界と安全管理のために、谷部全体を上流域（調査1区）と下流域（調査2区）に大きく二分し、順次発掘を進める事とした。また、調査2区に隣接する一般県道桜井太郎丸線道路拡幅範囲については調査3区とし、調査2区と併行して発掘を進めた（調査3区は第910集掲載済み）。また、調査1区の発掘の結果、遺跡の範囲がさらに未試掘の谷最上流部の小支谷まで広がることが判明したために、その範囲を調査4区として調査2、3区作業終了後に追加調査した。

調査が進むと遺跡は未確認の地下5m以下の谷底や急斜面の上部まで及び、当初の推定より広範囲に広がった。谷底までの包含層からはコンテナケース1,000箱を超える豊富な古代遺物や木簡、多量の木製品、魚骨、貝殻類などの有機質遺物や鉄滓、炉壁等の製鉄関連遺物が出土した。最終的に調査総面積は約16,800㎡となり、谷部中央では弥生時代から中世に及ぶ5面の遺構面を検出し、およそ二年四ヶ月の調査期間を要して平成14（2002）年2月15日に終了した。

なお、調査期間中に戸山城を挟んで東西で同時に調査を進めていた20次調査と同時開催で記者発表を行い、併せて現地説明会を2000年10月28日土曜日に開催した。当日はおよそ300名の見学者が訪れた。

（4）調査の組織

調査委託者　福岡市土地開発公社
調査主体　福岡市教育委員会
　教育長　山田裕嗣　植木とみ子・生田征生・町田英俊・西憲一郎（前任）
　文化財部長　矢野三津夫　山崎純男・堺徹・柳田純孝・平塚克則・後藤直（前任）
調査庶務　文化財整備課長（現管理課長）　榎本芳治　上村忠明・平原義行（前任）
　管理係長　白川国俊　栗須ひろ子・市坪敏郎・井上和光（前任）
　管理係　柿普美香　鳥越由紀子・鈴木由喜・岩屋淳美・中岳圭（前任）
調査担当　大規模事業等担当（現埋蔵文化財第2課）主査　吉留秀敏
　課長　田中嘉夫　力武卓治・二宮忠司・山崎純男（前任）
　主任文化財主事（現調査第2係長）常松幹雄　米倉秀紀・濱石哲也・松村道博・
　池崎譲二（前任）
　主事　池田祐司　上角智希・木下博文・菅波正人・星野恵美・小林義彦・久住猛雄・
　松浦一之介・屋山洋（前任）
　調査補助　小杉山大輔・西村直人・櫛山範一・石橋忠治・濱石正子・水崎るい・
　撫養久美子
調査調整　都市整備局大学移転対策部

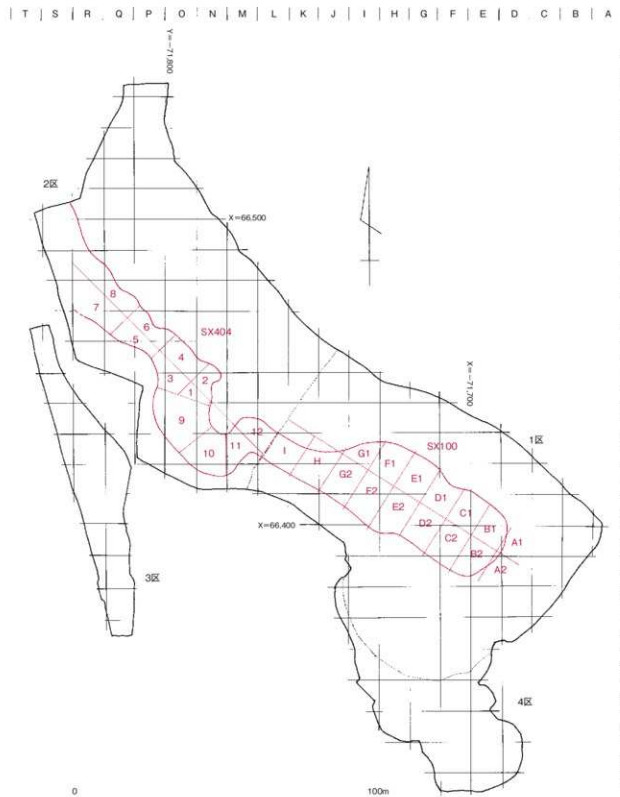


Fig.3　18 次のグリット配置と古代大型遺構分割図（1/1000）

（5）調査工程と作業方法

発掘調査は、確認調査で遺跡の範囲と推定された全域を対象であった。まず谷奥部の約6,000㎡（調査1区）から実施した。重機により表土～上部埋土の除去を行い、排土を調査2区側に仮置きした。除去した谷部中央の堆積物は表土から最厚3ｍに達し、大型重機数台を利用し約1ヶ月を要した。また調査1区では谷部の包含層が厚く、遺構面や遺物量も多く、調査期間は1年8ヶ月に及んだ。調査1区の作業終了後、調査2区に仮置きした残土と表土を合わせて調査1区に反転して仮置きした。この作業は土量が多く、数台の大型重機を用いて1ヶ月以上の長期の時間を要した。調査2区の面積は約8,000㎡となり、発掘調査にはおよそ8ヶ月の調査期間を要した。調査3，4区については作業工程に合わせて随時掘削し、合計約2,800㎡の発掘調査となった。こうして調査総面積は約16,800㎡となり、同様の谷部調査であった7次調査の2倍以上の面積、倍以上の遺物量や遺構面を検出し、調査前の地表から最大深度5ｍ強に達した。

なお、調査中は常に谷部から湧水があり、調査区内に水路を設けて排水処理をしていたが、梅雨期の降雨時に多量の出水が発生し、河川汚濁を生じてしまった。このため以後の対策について都市整備局と協議調整を行った。試行錯誤の結果、調査区と河川（大原川）との間の空地に二段階の集水槽と撹拌槽、枡形の水路を設け、水中ポンプと汚泥凝固作用のあるポリ塩化アルミニウム（PAC）溶剤を利用した汚濁水浄化装置を設けて対応をおこなった（下段写真）。

（6）調査の方法（Fig.3）

発掘調査にあたっては、周辺移転用地内に設置されていた三等測量基準点から調査区内に測量原点を移動した。またこの原点を利用して、調査区内に20ｍ単位で、公共座標点（日本測地系）と共通軸線上となる測量基準点を設けた。調査区内はこの測量基準点を基本に10ｍグリットを設置した。グリットは東から西へA、B、C…、北から南へ1、2、3…とし、交点グリットは例えばK20グリット（区）と呼称した。本次調査ではAからTグリットまでの東西200ｍ、1から26グリットまでの南北260ｍの範囲が対象となった。なお調査1区の中央で確認された造成谷部遺構SX100は規模が大きいために、遺構の主軸に合わせて別に10ｍグリットを設定し、上流側からA、B、C…、上流側から見て右岸側を1区、左岸側を2区として、例えばSX100-A1区と呼称して地層観察や遺物取り上げを行った。同様に調査2区の谷部遺構SX404は、土層ベルトを基準として1区画ごとに1、2、3区と呼称して、例えばSX404-1区と呼び、地層観察や遺物取り上げを行った（Fig.2）。また調査2区の東側斜面に段造成されたテラス状遺構は上段からⅠ、Ⅱ、Ⅲ…、下流側からa、b、c…として、例えばⅡｃテラスと呼称して遺構実測や遺物取り上げ時に用いた。

2　第18次調査の記録

（1）概要

さて調査地点は現在、丘陵を横断し桑原と元岡の両地区を結ぶ幹線道路（県道桜井太郎丸線）沿いにあり、水崎山から北に派生する二つの尾根に挟まれた谷地内にある（Fig.2）。谷地は幅約100m、奥行き約300mを測る。その標高は12～46mであり、上流に従い急斜面となる。この谷地には戦前から昭和40年頃までは谷水田と棚田がつくられていた。その後斜面の棚田は造成工事を経て蜜柑園が開かれている。昭和60年以降に蜜柑園は中止され、小面積の水田と畑地が残り、周囲は竹林と雑木林となっていた。地域住民の話ではこの谷に戦前より遡って民家（農家）が存在したことは聞かないという。なお、現在は西側の県道に沿った水田は埋め立てられ民家と農業用倉庫などが建てられた。移転用地として土地取得後に建物などが撤去され、農地も放置されたために調査開始時には著しい荒れ地となっていた。遺跡はこの谷の地下2～6mに埋没していた。

（2）基本土層と遺構面

調査地点内の土層堆積物の様相は複雑である。細かな堆積状況は谷部内の地形や堆積環境で著しく異なり、また農地造成などの人為的造成により本来の堆積物を失っている範囲もある。ここでは基本的な堆積物を層群としてまとめて示しておきたい。基本的堆積物は上部から、Ⅰ層：腐植土、Ⅱ層：暗褐色砂～シルト質土、Ⅲ層：褐色有機質シルト質土、Ⅳ層：黒色粘質土・上部砂礫、Ⅴ層：黄褐色風化レス、Ⅵ層：下部砂礫、Ⅶ層：岩盤（花崗岩）となる。Ⅰ～Ⅳ層は完新世の堆積、Ⅴ、Ⅵ層は更新世、Ⅶ層は第三紀の形成である。谷部両側の斜面では地表下数十cmとⅠ・Ⅴ層など僅かの被覆土でⅦ層の風化礫乱土となるが、斜面下部にしたがい被覆土が厚くなり、谷部中央ではⅣ層上だけでも3～5mに達する。

なお、調査1区に形成されたSX100付近ではⅣ層は古代に人為的に掘削除去されているために欠落し、Ⅱ層相当の流入土として最深で5mに達する堆積があった。また遺構が集中する調査1区の南北斜面にはⅡ層中に人工的盛土が含まれている。

遺構面は表土直下～Ⅱ層上位で第1，2面、Ⅱ層下位で第3面、Ⅲ層上位で第4面、Ⅳ層上部で第5面のうち弥生時代～縄文時代、Ⅴ層上部で第5面のうち旧石器時代資料を検出、確認した。

（3）第3・4面における遺構と遺物

第3面は1区を中心に中世遺構の直下に検出した。中世水田の水路などにより一部が破壊されているものの保存状況は比較的良好であった。2区の中央流路SX404の東側斜面では中世遺構の直下はⅤ、Ⅶ層であり、同一面で古代遺構を検出した。また、4区では近世以降の造成面の耕作土直下で同じ遺構群を確認し、中世遺構は存在しない。なお1区におけるⅡ～Ⅲ層での遺構の確認は、谷部中央やI・J16・17グリット付近のように両遺構面が厚さ約1m～数十cmの造成盛土を介して明らかにできた部分もあるが、多くの地点では土色が類似し、また谷部特有の水成作用によりグライ化もあり見極め難く、困難を極めた。Ⅱ層面で一部を検出した遺構が、掘り下げを進めてⅢ層中で初めて全体把握できる場合も少なくなかった。したがって、第3面と第4面の区分は存在するものの、遺構群の厳密な分離が成功したとは言い難い。以下での報告でも、一部に明らかに区分できたものもあるが、その区分は遺構覆土の特徴や建物位置、形態、方位などからの類推による場合が多い。以下では遺構は

形態状の区分で第3、4面を一括して報告する。時期の不明なものはその問題点を示し、改めて検討を加えたい。

さて、18次調査区では第3，4面において中央流路とその周辺に多数の大型遺構が検出された。中央流路は、本来自然に形成された浸食谷の底部であるが、谷奥部では人為的造成が加えられている。まず、流路の両側斜面を人為的に造成し平坦面を形成している部分がある。Fig.53では、その範囲と造成面が推定される部分を薄網で示している。造成は斜面上側をL字形に掘削し、下側に盛土を行い、部分的に石垣で補強している。なお、崖面直下に水路を巡らす例が多い。18次調査区で検出された掘立柱建物の多くはこの壇状遺構上に設けられている。これらの壇状遺構は、全体として遺存状況が悪いが、これは江戸期以降の水田造成に加え、戦後のみかん園造成時の工事で壊されたためである。なお、図化した範囲は最小範囲を示している。厳密な全体範囲は不明である。

これらの壇状遺構は谷部の広範囲に広がるが、全体として共通の方位に沿って設けられている。この方位には大きく2群があり、およそN-35° -Wをとる群とN-52～55° -Wをとる群に区分される。前者は1区南西部から4区など谷の西斜面から奥部にあり、一部で2区南東端にも推定される。また後者は1区の谷部に近い範囲にあり、谷部中央の流路に設けられた陸橋なども連続した面として構成される。この両者の切合いは明確ではないが、N-35° -W軸の壇が第4面遺構の主軸と一致し、N-52～55° -W軸の壇が第3面遺構の主軸に共通している。中央流路については、上流部（調査1区範囲）をSX100、下流部（調査2区範囲）をSX404としたが、特にSX100の範囲は人為的造成が大きく認められた。SX100の下部では当初に掘削された溝SD41の下流部を埋め立てて、陸橋SX187、SX224（Fig.63）が造られ、その間に貯水施設SX111が形成されている。SX111の覆土下部からは多くの木製品が出土した。このSX111の両岸斜面から斜面直上には多くの礫が古墳の葺石状に現れた。多くは斜面に崩落していたが、一部には積み石、貼石状をなし石垣状となる部分もあった。礫は造成盛土上面や基盤岩上の黒色土に含まれ、砂礫層をなさない。したがって自然的要因による崖錐堆積物や段丘礫層などとは考え難く、人為的な形成と考えた（Fig.62）。これは「礫堆」と呼び記録作成を行った。SX100の上流部は掘削され、3つの井戸が形成されていた（南群）。2つの石組み井戸と1つの素掘り井戸である。石組み井戸の周囲底面には部分的に石敷きが残される（Fig.54）。また、井戸群の南斜面には幅約4m、高さ0.7mの礫積施設SX107がある。井戸への土砂流入を避け、井戸の周囲を礫面で囲む視覚的効果を目的とすると考えられる。なお、この井戸群の周囲には径や長さが2m前後の巨礫が3個分布する。同様の事例は元岡7次調査の池状遺構SX123にある。ここでも池の湧水点を中心に径2m強の巨礫3個が据え置かれていた。祭祀に関連すると見られることから「大磐」と称したが、本遺跡例と共通点がある。井戸群は下流のSX404でも、枝谷にあり（北群）、やはり上流部の斜面に礫を葺いている（Fig.56）。何れも中世以降の井戸とは立地や周辺造成が異なり特異な様相を示している。

18次調査区の鉄生産関連遺構は、層位を確認できたほとんどが第3面上部にある。遺構としては精錬炉、鍛冶炉、焼土壙などがある。精錬炉は小型であり排滓の量も少ない。これらは本調査区における古代の最終段階の遺構群といえる。

1）掘立柱建物

掘立柱建物は調査区のほぼ全域に分布している。建物は主に壇状遺構面に設けられており、分布上複数箇所に集中している。ここでは中央の流路SX100で東西に分け、さらに東1～4群、西1～3群に小区分して報告する（Fig.4）。

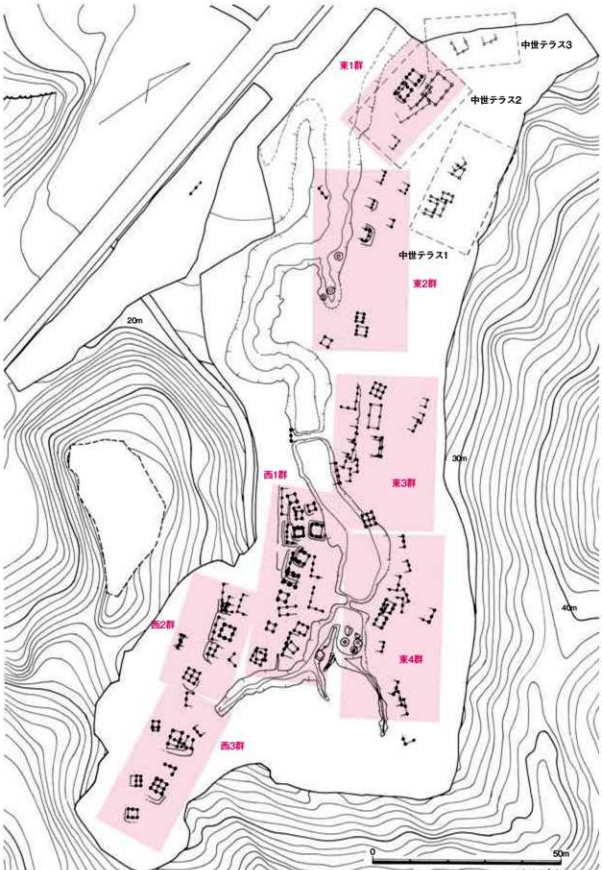


Fig.4　18 次掘立柱建物全体配置概念図（1/1000）　　掘方白ヌキは中世建物

（1）東1群（Fig.5・6）

SB407

Q・R 7・8グリットに検出した南北棟であり、SB408と略南北に縦列配置する。検出面は標高約14.5mであり、二間二間で中央主柱を欠くが総柱建物である。長軸がN-12° -Wをとる。建物規模は桁行3.6m、梁行3.3mである。柱間距離は1.7～1.8mである。柱穴掘方は円形か不整円形であり、径0.8m前後、深さ0.5～1.0mと斜面上方法が深くなるが、床面レベルはほぼ揃っている。柱穴内には径0.15～0.2mの柱痕跡が認められる。本来平坦な壇状造成面上に設けられたとみられる。出土遺物は極めて少なく、少量の土師器片が出土したのみである。

SB408

Q・R 8グリットに検出した南北棟であり、SB407の南側2mに位置する（Fig.6）。検出面は標高約14.5～14.8mであり、二間二間で中央主柱を欠くが総柱建物である。長軸がN-11° -Wをとる。建物規模は桁行2.8m、梁行3.2mである。桁行の柱間距離は1.3～1.5mとばらつきがある。柱穴は円形か不整方形であり、径0.8m前後、深さ0.5～1.0mと斜面上方法が深くなるが、床面レベルはほぼ揃っている。柱穴内には径0.15～0.2mの柱痕跡が認められる。本来平坦な壇状造成面上に設けられたとみられる。出土遺物には極めて少なく、少量の土師器片が出土したのみである。

（2）東2群（Fig.7～9）

SB155

P10グリットに検出した略南北棟であり、現代造成面の崖際に側柱列のみが残る。検出面は標高約16mであり、三間一間以上の側柱建物である。長軸がN-24° -Wをとる。建物規模は桁行3.8m、である。柱間は両端が0.8～1m、中央が1.9mとばらつきがある。柱穴は円形か不整楕円形であり、径0.3m前後、深さ0.2mと比較的浅い。相当の削平が予測される。出土遺物はない。

SB156

O9・10グリットに検出した。検出面は標高約19mであり、二間二間の総柱建物である。SR405との重複があるが、前後関係は不明である。長軸がN-31° -Wをとる。建物規模は桁行2.0m、梁行2.0mである。柱間は両端が1m前後である。柱穴は円形であり、径0.3m前後、深さ0.1～0.2mと浅い。相当の削平が予測される。出土遺物はない。

SB381

O11グリットに検出した。検出面は標高約17mであり、二間一間以上で中央主柱を欠くが総柱建物である。斜面上方の東側に浅い溝を巡らす。柱穴3個は直交軸で配置し、長軸がN-28° -Wをとる。建物規模は桁行3.3m、梁行1.3m以上である。柱間は桁間1.6m、梁間1.3mである。柱穴は円形か不整円形であり、径0.6m前後、深さ0.5mである。柱穴内には径0.15～0.2mの柱痕跡が認められる。出土遺物はない。

SB399

M12・13グリットに検出した。検出面は標高17.3～18.3mであり、二間二間で中央主柱を欠くが総柱建物と見られる。SB400と略南北に縦列配置する。柱穴3個は直交軸で配置し、長軸がN-33° -Wをとる。建物規模は南北2.3m、東西2.9mである。柱間は南北1.1～1.2m、東西1.4～1.5mとばらつきがある。保存の良い東側柱穴は円形か不整円形であり、径0.7m前後、深さ0.8～0.6mと比較的大きく、一部が二段掘りとなっている。

SB400

M12グリットに検出した南北棟である。検出面は標高約17.2～17.8mであり、二間一間の建物で

ある。SB399の北側1.2mに位置する。長軸がN-28°-Wをとる。建物規模は桁行2.4m、梁行2.0mである。柱間は約1.2mである。柱穴は円形か不整円形であり、径0.7～0.9m前後、深さ0.4～0.9mと比較的大きく、二段掘りとなるものもある。柱穴内には径0.15～0.2mの柱痕跡が認められる例がある。

SB434

O10グリットの蜜柑園造成時の崖端で検出した。検出面は標高約18.5mであり、柱穴2個で一間分の建物一部である。周辺に他に柱穴がなく、同様の覆土と柱穴が認められたことから建物と考えた。長軸はN-20°-Wをとる。柱間は約2mである。

SB435

O10グリットに検出した。検出面は標高約16.6mであり、二間一間以上で総柱建物と推定される。長軸はN-23°-Wをとる。斜面上方の東側に浅い溝を巡らす。建物規模は約1.9mである。柱間は0.9～1.0mとばらつきがある。柱穴は円形か不整円形であり、径0.4m前後、深さ0.3～0.5mで、一部は二段掘りとなっていて深い。柱穴内には径約0.2mの柱痕跡が認められる。

SB454

M13・14グリットに検出した建物である。検出面は標高約17.2～17.5mであり、一間一間の総柱建物である。基盤の砂礫層に掘込まれており検出が困難であった。長軸はN-62°-Eをとる。建物規模は桁行2.5m、梁行2.1mである。柱穴は円形であり、径0.5m前後、深さ0.3～0.6mである。底面レベルが共通していることからこの部分にも壇状の平坦面が設けられていたと考えられる。

（3）東3群（Fig.10）

SB157

K・L-13・14グリットに検出した。東側斜面下段に造成された壇状平坦面に沿って設けられている。検出面は標高約20.8mであり、二間三間の側柱建物である。長軸はN-46°-Wをとる。建物規模は桁

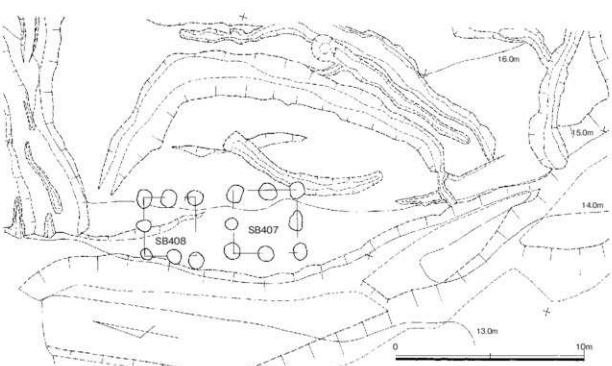


Fig.5　18次掘立柱建物配置図（東1群）（1/200）

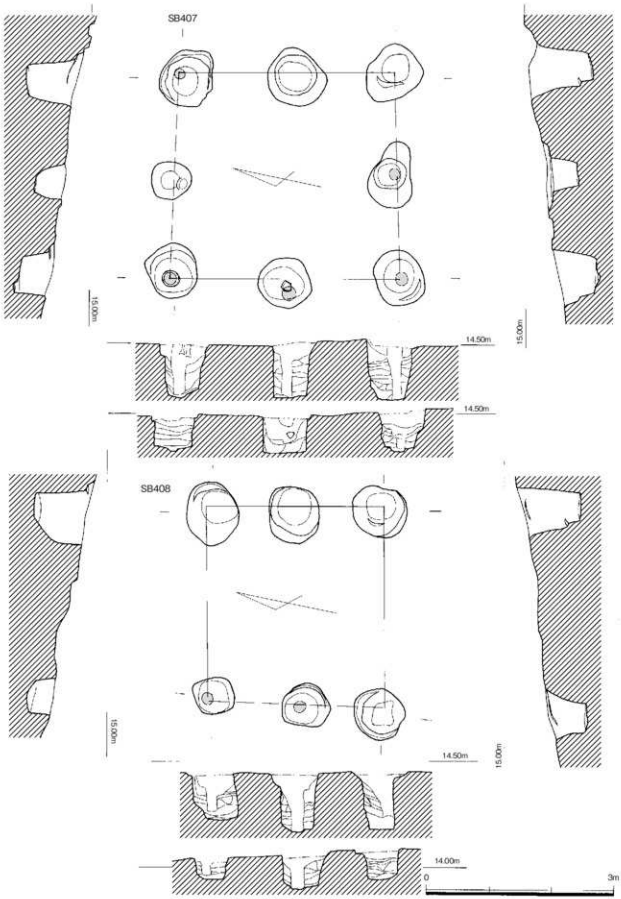


Fig.6　掘立柱建物１（1/60）

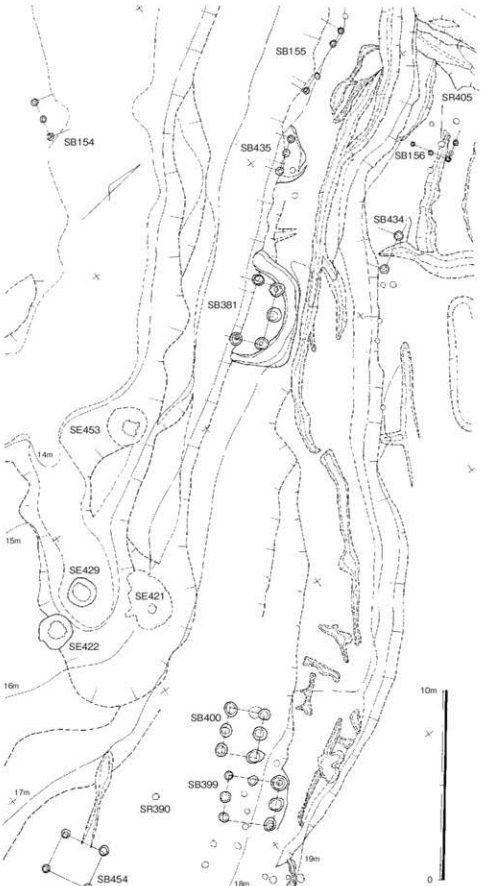


Fig.7　18 次掘立柱建物配置図（東２群）(1/200)

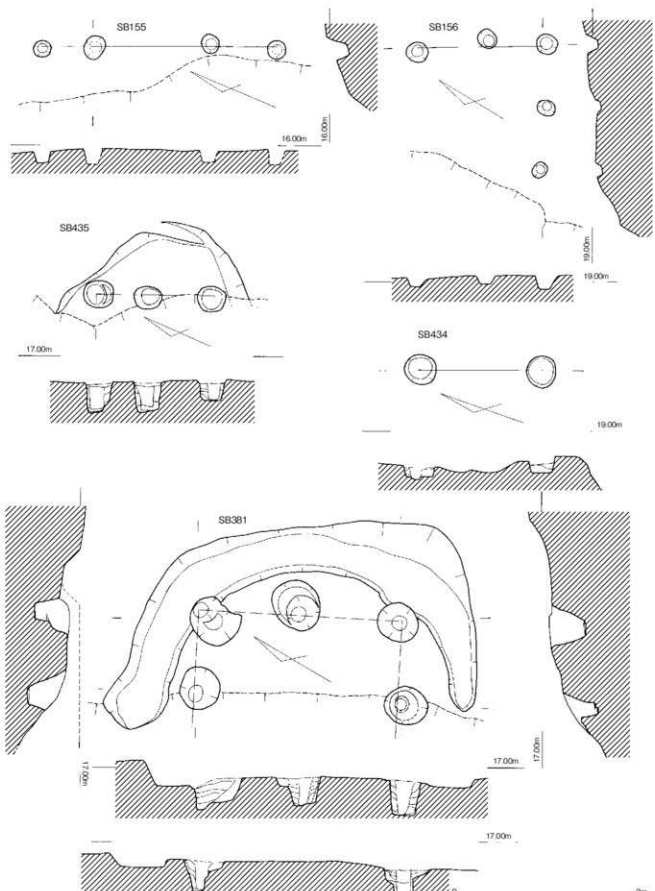


Fig.8　掘立柱建物２（1/60）

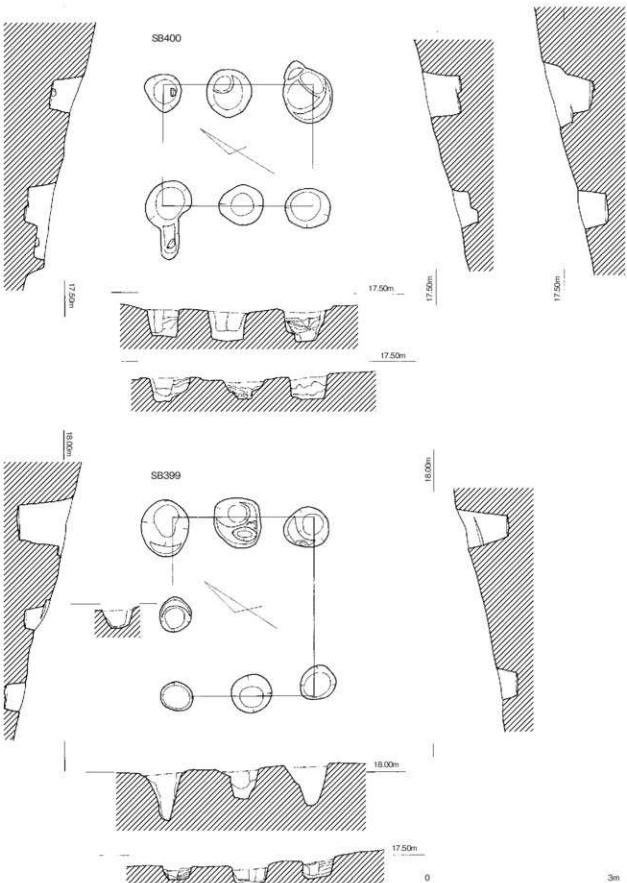


Fig.9　掘立柱建物３（1/60）

行 5.4m、梁行 2.9m である。柱間は桁間 1.7 ～ 2.1m、梁間 1.4 ～ 1.5m とばらつきがある。柱穴は隅丸方形か不整楕円形であり、径または一辺 0.3 ～ 0.6m であるが、側柱穴の一つは一辺 1.3m あり、これが伴うか疑問である。柱穴の深さは 0.1 ～ 0.3m と浅く、一部が二段掘りとなっている。

SB158

J12 グリットに検出した南北棟であり、東側斜面上段に造成された壇状平坦面に伴う溝に沿って設けられている。検出面は標高約 24.2m であり、柱穴 3 個が直線に配置し、他の柱穴がないことから建物と把握した。この柱決列の西側と北側は蜜柑園造成により高さ 1.5m 以上の崖となっている。長軸が N-31° -W をとる。建物規模は桁行 2m である。柱間は 0.6、1.2m とばらつきがある。柱穴は円形であり、径 0.2m 前後、深さ 0.2m と浅く削平を受けている。柱穴内には径約 0.1m の柱痕跡が認められる。

SB159

J14・15 グリットに検出した建物である。東側斜面下段に造成された壇状平坦面に沿って設けられている。検出面は標高約 19.5 ～ 20.0m であり、三間一間以上の側柱建物である。SB160、215 との重複があるが、前後関係は不明である。長軸が N-30° -W をとる。建物規模は桁行 7.0m、梁行 1.7m 以上である。柱間は桁間 2.2 ～ 2.4m、梁間 1.7m とややばらつきがある。保存の良い東側柱穴は円形か不整円形であり、径 0.3 ～ 0.6m 前後、深さ 0.2 ～ 0.3m である。

SB160

J14・15 グリットに検出した建物である。東側斜面下段に造成された壇状平坦面に沿って設けられている。検出面は標高約 20.0m であり、二間一間以上の建物である。SB159、215 との重複があるが、前後関係は不明である。長軸は N-38° -W をとる。建物規模は桁行 4.5m である。柱間は 2.2 ～ 2.3m である。柱穴は隅丸方形か不整楕円形であり、一辺 0.5m 前後、深さ 0.2m 前後と浅い。

SB182

I・J15 グリットに検出した建物である。SD100 底面に近い東斜面下部にある。検出面は標高約 19.3m であり、三間一間以上の側柱建物である。SB295 との重複があるが、前後関係は不明である。長軸は N-63° -W をとる。建物規模は桁行 5.4m である。柱間は 1.8m である。柱穴は円形か不整円形であり、径 0.3 ～ 0.6m 前後、深さ 0.2 ～ 0.3m であり、南側 3 個の柱穴には礫が充填されている。

SB214

J・K14 グリットに検出した。東側斜面下段に造成された壇状平坦面に沿って設けられている。検出面は標高約 20.0m であり、二間一間以上の建物である。長軸が N-38° -W をとる。建物規模は桁行 3.3m である。柱間は 1.6 ～ 1.7m である。柱穴は円形か不整楕円形であり、径 0.6 ～ 1.0m 前後、深さ 0.2m と比較的浅い。

SB215

J14・15 グリットに検出した建物である。東側斜面下段に造成された壇状平坦面に沿って設けられている。検出面は標高約 20.4m であり、二間一間以上の建物である。SB159、160 との重複があるが、前後関係は不明である。長軸は N-45° -W をとる。建物規模は桁行 3.6m である。柱間は 1.8m 前後である。柱穴は円形か不整円形であり、径 0.5m 前後、深さ 0.2m と比較的浅い。

SB216A・B

J14 グリットに検出した南北棟であり、東側斜面中段に造成された壇状平坦面に沿って設けられている。建物西側は蜜柑園造成で削平され、崖となっている。なお他の建物と異なり、柱穴が小さく、覆土色調もやや異なっていることから中世に所属する可能性がある。検出面は標高約 21.5m であり、

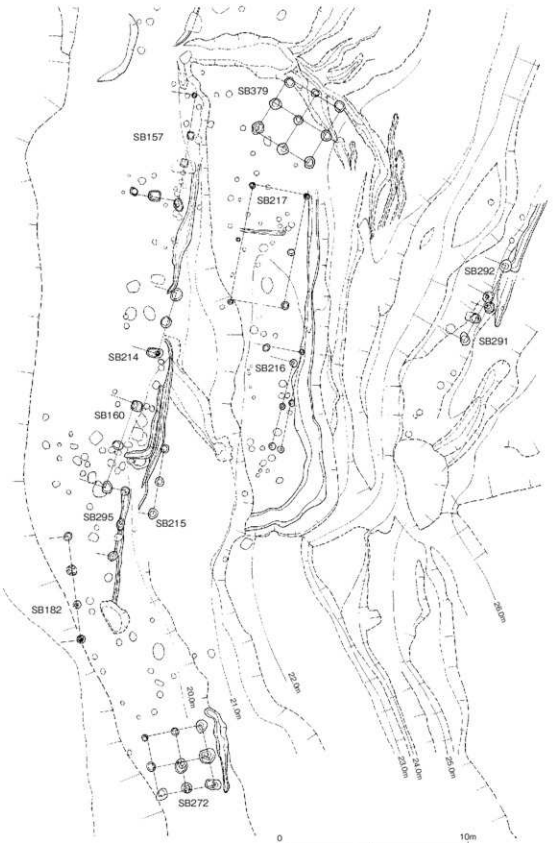


Fig.10　18 次掘立柱建物配置図（東 3 群）（1/200）

二間二間の側柱建物である。軸をややずらして同じ形態の二棟が重複しており、A・B とした。両者の前後関係は不明である。東側に迫り出す A 棟は長軸が N-46° -W をとる。建物規模は桁行 5.3m、梁行 2.0m 以上である。柱間は桁間 2.5 ～ 2.7m 梁間 1.7 ～ 2.0m とばらつきがある。また B 棟は長軸が N-43° -W をとる。建物規模は桁行 4.7m である。柱間は桁間 2.3 ～ 2.4m である。何れも柱穴は円形か不整円形であり、径 0.3m 前後、深さ 0.2 ～ 0.3m である。

SB217

J・K13・14 グリットに検出した南北棟であり、SB216A・B の北側約 2m で同じ壇状遺構面に検出した。同様に中世の可能性がある。検出面は標高約 20.6 ～ 21.2m であり、二間一間の側柱建物である。長軸は N-46° -W をとる。建物規模は桁行 5.2m、梁行 3.0m である。柱間は桁間 3.0 ～ 3.2m、梁間 2.7 ～ 3.0 m とばらつきがある。柱穴はほぼ円形であり、径 0.3m 前後、深さ 0.2m 以下と浅く、相当の削平が予測される。

SB272

H・I15 グリットに検出した建物である。東側斜面下段に造成された小規模な壇状平坦面に設けられたと考えられる。検出面は標高 19.8 ～ 20.8m である。斜面側に壇造成に関わる溝が巡るが、平坦面や盛土は失われ、相当の急斜面となっている。二間二間の総柱建物である。長軸が N-70° -W をとる。建物規模は桁行 3.2m、梁行 3.2m である。柱間は 1.6m と揃っている。柱穴は円形か不整楕円形であり、長辺 0.8m、径 0.3m 前後とばらつく。深さは 0.8 ～ 0.3m と斜面上方ほど深い。一部は二段掘りとなっていて深い。出土遺物には柱穴内から土師器椀（Fig.70 － 23）がある。

SB291

J13 グリットに検出した建物であり、東側斜面上段に造成された壇状平坦面に伴う溝に沿って設けられている。検出面は標高約 24.2m であり、側柱の柱穴 3 個が残存している。この柱穴列の西側は蜜柑園造成により高さ 1.5m 以上の崖となっている。二間一間以上の総柱建物と推定される。SB292 との重複があるが、前後関係は不明である。柱穴列の長軸は N-35° -W をとる。建物規模は桁行 2.6m である。柱間は 1.3m である。柱穴は円形か不整円形であり、径 0.5m 前後、深さ 0.4m である。

SB292

J12・13 グリットに検出した建物であり、東側斜面上段に造成された壇状平坦面に伴う溝に沿って設けられている。検出面は標高約 24.4m であり、側柱の柱穴 2 個が残存している。この柱穴列の西側は蜜柑園造成により高さ 1.5m 以上の崖となっている。一間一間以上の総柱建物と推定される。SB291 との重複があるが、前後関係は不明である。長軸は N-14° -W をとる。建物規模は桁行 2.5m である。柱間は 2.5 m である。柱穴は円形であり、径 0.5m 前後、深さ 0.3 ～ 0.4m と比較的大きい。柱穴内には径約 0.1m の柱痕跡が認められる。

SB295

J15 グリットに検出した南北棟であり、東側斜面下段に造成された壇状平坦面に沿った溝内に設けられている。検出面は標高約 19.9m であり、二間一間以上の総柱建物と見られる。SB160、182、215 との重複があるが、前後関係は不明である。柱穴 3 個は長軸が N-45° -W をとる。建物規模は桁行 3.6m であり、柱間は 1.7 ～ 1.8m である。柱穴は円形か不整楕円形であり、径または長辺が 0.5m ～ 0.7m 前後、深さ 0.2m と浅い。柱穴内には径約 0.1m の柱痕跡が認められる。

SB379

K13 グリットに検出した建物であり、東側斜面中段に造成された小規模な壇状平坦面に設けられたと考えられる。検出面は標高 20.1 ～ 20.9m である。蜜柑園に関わる排水溝が多数切合い破壊が著

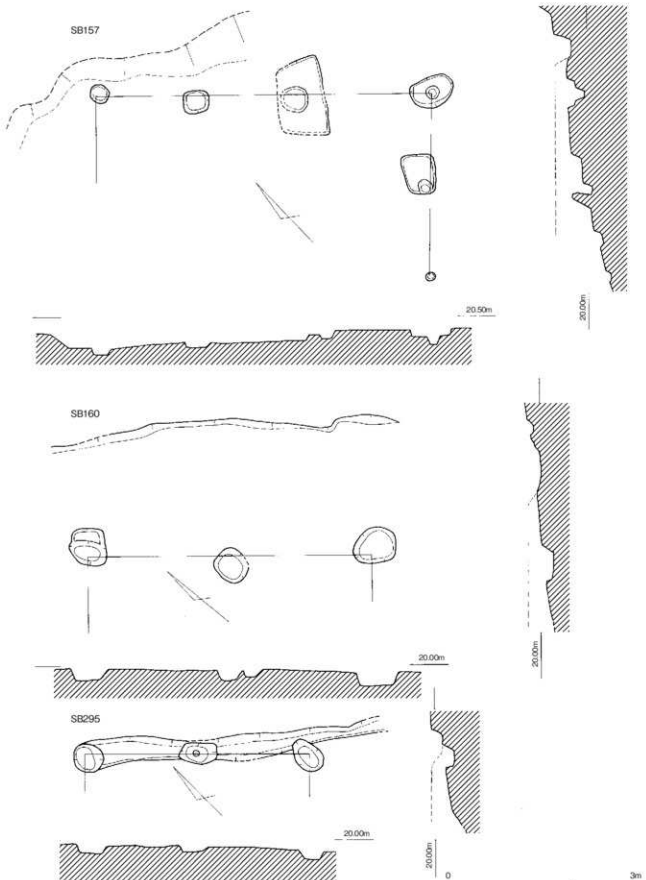


Fig.11　掘立柱建物４（1/60）

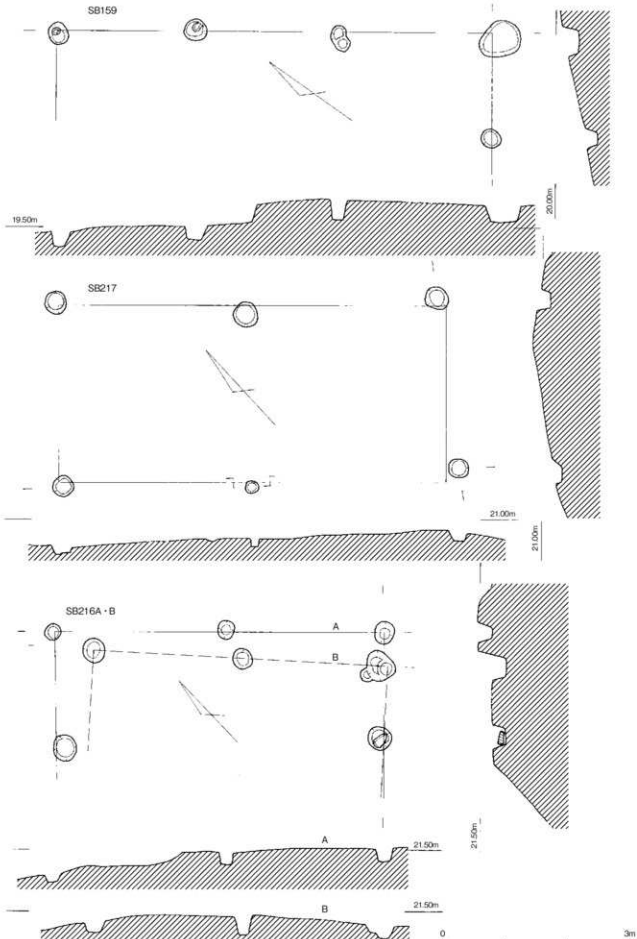


Fig.12　掘立柱建物５（1/60）

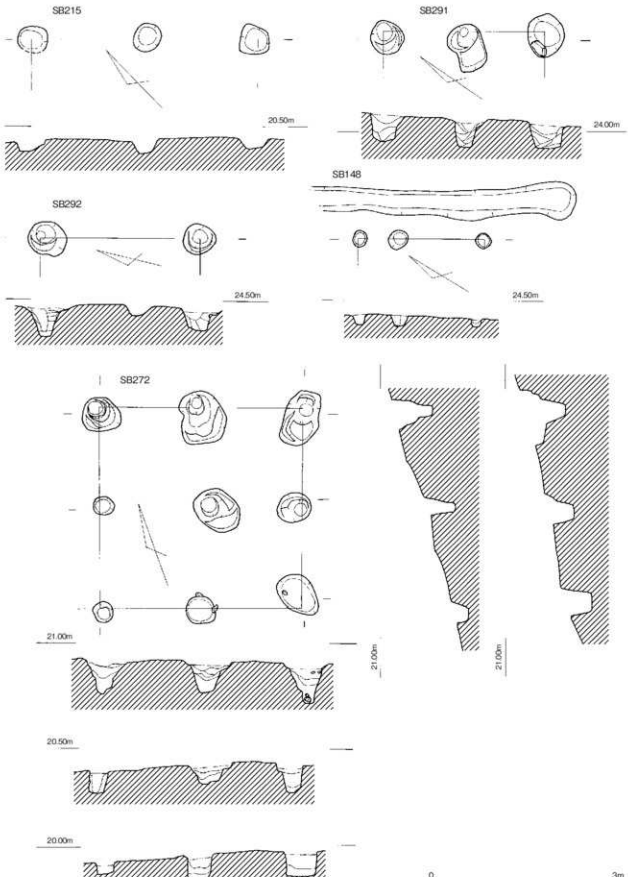


Fig.13　掘立柱建物６（1/60）

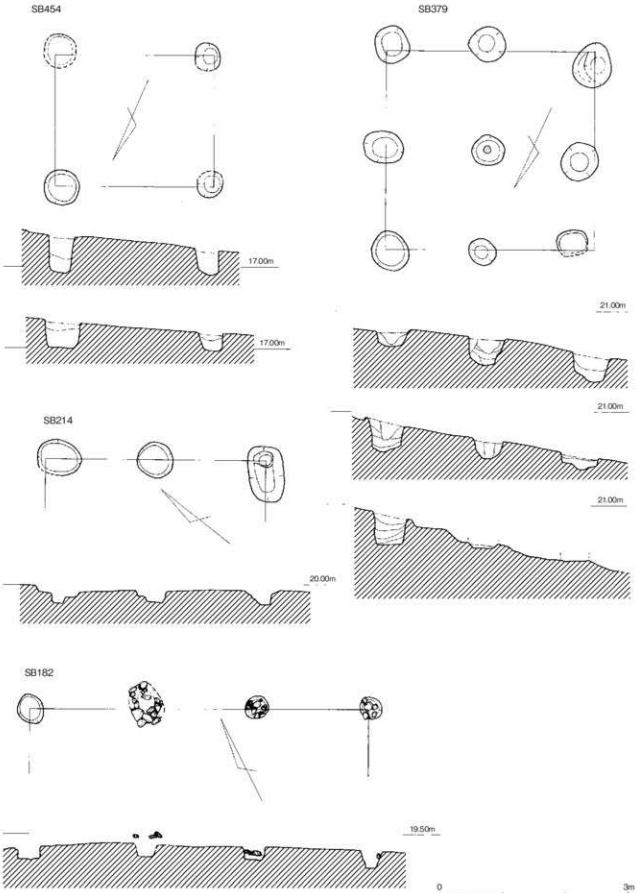


Fig.14　掘立柱建物7（1/60）

しい。二間二間の総柱建物である。長軸が N-23° -W をとる。建物規模は桁行 3.3m、梁行 3.2m である。柱間は 1.6m 前後である。柱穴は円形か不整楕円形であり、長辺 0.6m ～ 0.4m 前後とばらつく。深さは 0.6 ～ 0.1m と斜面上方ほど深い。柱穴内には径約 0.1m の柱痕跡が認められる。出土遺物には柱穴内から須恵器坏身（Fig.72 － 47）がある。

（4）東 4 群（Fig.15）

C ～ H15 ～ 18 グリット付近にあり、谷の東側斜面に三段の壇状造成面と建物 15 棟が検出された。建物は斜面の上段に 5 棟、中段 2 棟と下段 8 棟に分かれる。全て総柱建物と考えられる。このうち SB252A・B の二棟は隣接し直列配置する。

SB161

G・H15 グリットに検出した建物であり、東側斜面下段に造成された壇状平坦面に沿って設けられている。南西側は蜜柑園造成による崖となり、大きく失われている。柱穴に隣接して現れた地山の花崗岩礫の表面には多数の傷があり、壇造成時の掘削痕と考えられた。建物の検出面は標高約 22.8 ～ 23.1m であり、二間一間以上の建物である。長軸は N-58° -W をとる。建物規模は桁行 3.8m である。柱間は 1.8 ～ 2.0m とばらつきがある。柱穴は隅丸長方形であり、長辺 0.6 ～ 1.0m、深さ 0.4 ～ 0.2m である。

SB162

G15 グリットに検出した建物であり、SB161 の南東 3m に位置する。東側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられているが、SB161 との間には 0.3m ほどの段があり下がる。検出面は標高約 22.7 ～ 22.8m であり、二間一間の側柱建物である。長軸は N-57° -W をとる。建物規模は桁行 3.3m、梁行 2.5m である。柱間は桁行 1.6 ～ 1.7m と揃っている。柱穴は不整楕円形であり、径 0.3m 前後、深さ 0.1 ～ 0.2m と浅い。

SB163

F15･16 グリットに検出した建物であり、東側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高約 22.5m であり、二間一間以上の建物である。SB164 との重複があるが、前後関係は不明である。長軸は N-70° -W をとる。建物規模は桁行 3.4m である。柱間は 1.7m と揃っている。柱穴は楕円形であり、径 0.5 ～ 0.7m 前後、深さ 0.1 ～ 0.3m と浅い。

SB164

F16 グリットに検出した略南北棟であり、東側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高約 22.5m であり、二間一間の側柱建物である。SB163 との重複があるが、前後関係は不明である。長軸が N-45° -W をとる。建物規模は桁行 3.9m、梁行 2.4m である。柱間は桁間約 1.9m である。柱穴は不整円形であり、径 0.2 ～ 0.5m、深さ 0.1 ～ 0.3m と比較的小さく、浅い。

SB165

F16･17 グリットに検出した南北棟であり、東側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高約 22.0m であり、二間一間以上の建物である。SB252B との重複があるが、前後関係は不明である。長軸は N-05° -W をとる。建物規模は桁行 2.3m である。柱間は 1.0 ～ 1.3m と推定できる。柱穴は楕円形か隅丸方形であり、長辺 0.6 ～ 0.7m、深さ 0.2 ～ 0.3m である。

SB166

F16 グリットに検出した建物であり、東側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高約 22.5m であり、二間一間以上の建物である。SB252A との重複があるが、前後関係は不明である。長軸が N-22° -W をとる。建物規模は桁行 2.3m、梁行 1.5m である。柱間は桁間約 1.1

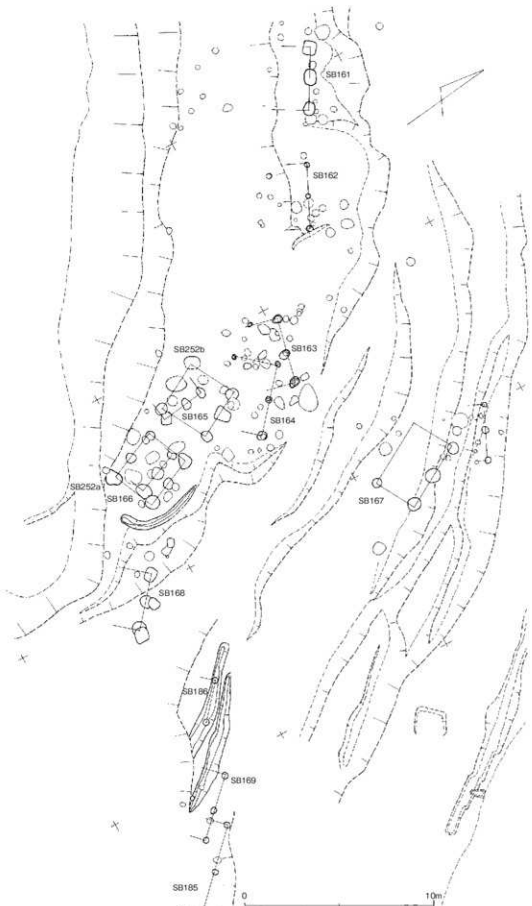


Fig.15　18 次掘立柱建物配置図（東 4 群）（1/200）

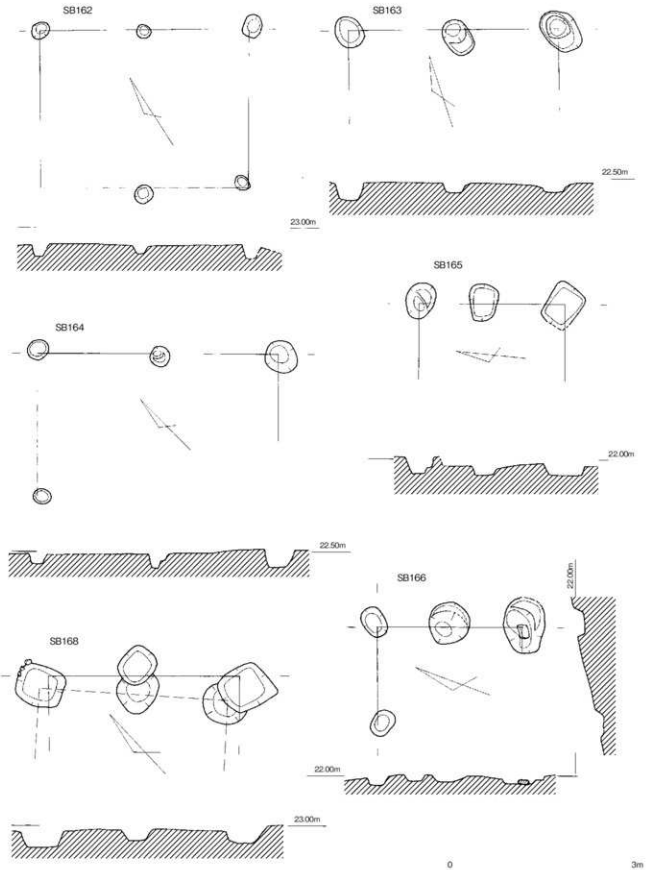


Fig.16　掘立柱建物８（1/60）

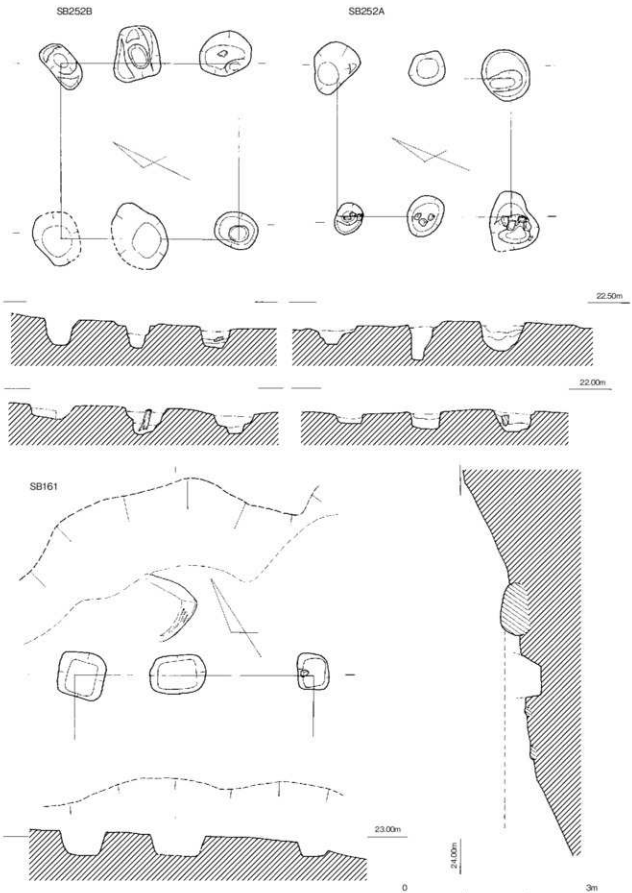


Fig.17　掘立柱建物９（1/60）

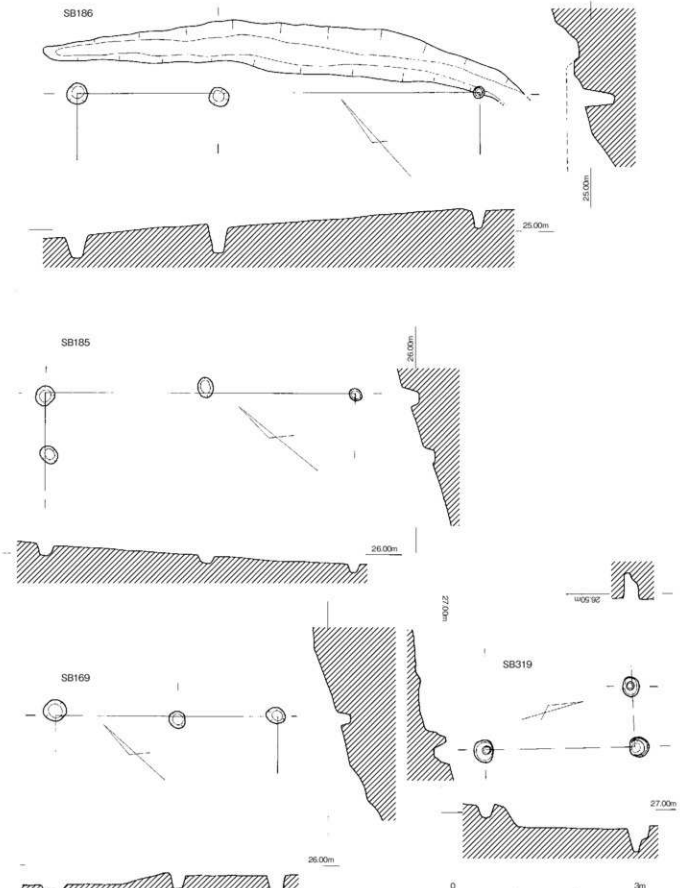


Fig.18　掘立柱建物 10（1/60）

～1.3m、梁間1.5mである。柱穴は不整楕円形であり、長辺0.5～0.9m、深さ0.1～0.2mと浅い。

SB168A・B

E･F17グリットに検出した建物であり、東側斜面中段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高約23mであり、二間一間以上の総柱建物である。軸をややずらして同じ形態の二棟が重複しており、A・Bとした。やや大型化するA棟がB棟を切っており、後出する。A棟の長軸はN-47°-Wをとる。建物規模は桁行3.2～3.4m、柱間は1.5～1.7mと推定される。B棟の長軸はN-42°-Wをとる。建物規模は桁行3.0m、柱間は1.5mである。柱穴はA棟が隅丸方形で長辺0.6～0.8m、B棟は楕円形で長径0.7mあり、深さ0.2～0.3mである。

SB169

D17グリットに検出した南北棟であり、東側斜面中段に造成された壇状平坦面に沿って設けられている。南西側は崖線となる。検出面は標高約24.9～25.3mであり、二間一間以上の側柱建物と推定できる。SB186との重複があるが、前後関係は不明である。長軸はN-41°-Wをとる。建物規模は桁行3.6mであり、柱間は1.6、2.0mとばらつきがある。柱穴は不整円形であり、径0.3m前後、深さ0.2～0.4mである。

SB252A・B

F16･17グリットに検出した南北棟であり、東側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。当初は一連の建物か連結式の並倉かと考えたが、両者に主軸線の差異があり、別建物と判断した。検出面は標高21.6～22.3mであり、何れも二間一間の総柱建物である。SB165、166との重複があり、切合いからA・B棟が後出すると判断した。A棟は長軸がN-23°-Wをとる。建物規模は桁行2.8m、梁行2.1mである。柱間は桁行1.3～1.5mとばらつきがある。柱穴は円形か不整楕円形であり、長径0.9～0.6m、深さ0.2～0.6mと比較的大きく、深い。B棟は長軸がN-26°-Wをとる。建物規模は桁行2.8m、梁行2.8mである。柱間は桁行1.3～1.5mとばらつきがある。柱穴は不整楕円形であり、長径0.7～1.1m、深さ0.2～0.4mと比較的大きく、二段掘りもある。

SB185

D17グリットに検出した南北棟であり、東側斜面中段に造成された壇状平坦面に沿って設けられている。南西側は急斜面で下がる。相当の削平が予測される。検出面は標高約25.9～26.1mであり、二間一間以上の側柱建物である。SB169との重複があるが、前後関係は不明である。長軸はN-40°-Wをとる。建物規模は桁行4.9m、梁行1.0m以上である。柱間は桁間2.4～2.6mである。柱穴は不整楕円形であり、長径0.2m前後、深さ0.1～0.2mと小さく、浅い。

SB186

D･E17グリットに検出した南北棟であり、東側斜面中段に造成された壇状平坦面の後背溝に沿って設けられている。検出面は標高約24.9～25.3mであり、三間一間以上の側柱建物と推定できる。SB169との重複があるが、前後関係は不明である。長軸がN-48°-Wをとる。建物規模は桁行6.4mである。柱間は桁間2.1m前後である。柱穴は円形であり、径0.2～0.3m、深さ0.3～0.5mと小さいが深い。

SB319

C18グリットに検出した建物であり、東側斜面上段に造成された壇状平坦面に設けられている。東側の背後は高さ2m以上の崖となっている。検出面は標高約26.7～27.1mであり、規模は小さいが一間一間以上の建物であろう。柱穴3個は直交軸で配置し、長軸がN-16°-Eをとる。規模は桁行2.4m、梁行1.0m以上である。柱穴は楕円形であり、長径0.3m前後、深さ0.2～0.4mと比較的深い。柱穴

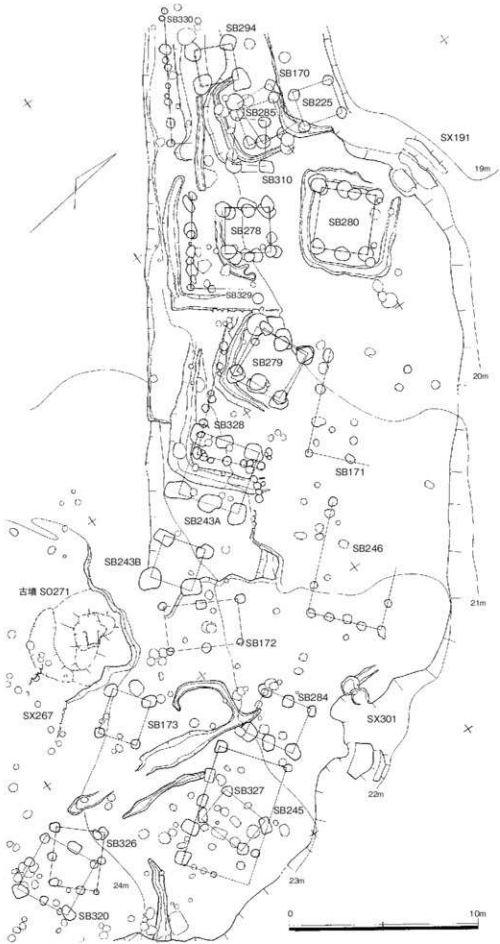
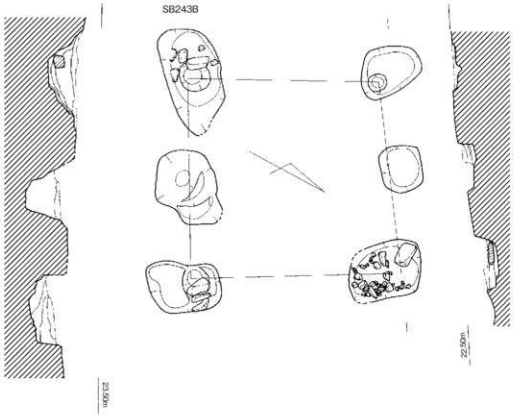


Fig.19　18 次掘立柱建物配置図（西 1 群）（1/200）



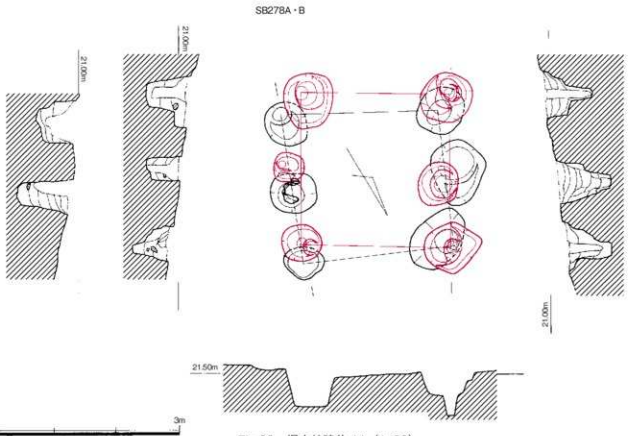


Fig.20　掘立柱建物 11（1/60）

内には径約 0.1 ～ 0.15m の柱痕跡が認められる。柱穴内から土師器甕（Fig72-46）が出土した。

（5）西 1 群（Fig.19）

G ～ K15 ～ 20 グリット付近にあり、谷の西側斜面に二段の壇状造成面と建物 25 棟が検出された。建物は斜面の中段 3 棟と下段 22 棟に分かれる。総柱建物 19 棟と側柱建物 3 棟、大壁建物 3 棟である。このうち SB225 と SB285 並びに SB243A・B と AB173 は柱筋を揃え直列配置する。

SB170

J16・17 グリットの第 4 面に検出した建物である。西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。建物西側の斜面上方には「コ」字形の区画溝 SD250 が巡る。検出面は標高約 20.3 ～ 20.7m であり、一間一間の総柱建物である。SB285、290、310、330 との重複があり、第 3 面の SB330 に先行し、同じ第 4 面の SB285、310 の柱穴を切ることから、より後出すると見られる。長軸は N-05° -E をとる。建物規模は桁行 2.6m、梁行 2.1m である。柱穴は隅丸方形であり、一辺 0.5 ～ 0.9m 前後、深さ 0.3 ～ 0.5m である。

SB171

H17 グリットに検出した建物であり、第 4 面で検出した。西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。旧谷部を埋めた盛土上に検出面があるため、類似した盛土と柱穴内埋土の区別が困難であり、建物全体の柱穴を把握することが出来なかった。検出面は標高約 21.1 ～ 21.6m である。二間三間の側柱建物である。同じ第 4 面の SB281 との重複があるが、先後関係は不明である。東側の柱穴 4 個が明瞭で直線的に配置し、長軸は N-40° -W をとる。建物規模は桁行 5.3m、梁行 4.2m である。柱間は桁間 1.7 ～ 1.8m、梁間 2.1m である。柱穴は円形か不整楕円形であり、径 0.4 ～ 0.7m、深さ 0.2 ～ 0.7m とばらつきがある。

SB172

H18・19 グリットに検出した南北棟であり、西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。本建物の南西側約 2m に古墳 SO271 の墳丘端部があり、これを建物軸に沿うように深さ 0.4m ほど掘り、切り下げて平坦面を確保している。検出面は標高約 23.0 ～ 23.7m であり、二間二間の側柱建物である。他の建物との重複はないが、西側 0.5m に建物主軸の異なる SB243B がある。その配置や異なる埋土から同時期に存在したとは考え難いが、先後関係は不明である。長軸は N-33° -W をとる。建物規模は桁行 4.4m、梁行 2.35m である。柱間は桁間 2.1 ～ 2.3m、梁間 1.1 ～ 1.3m とばらつきがある。柱穴は円形か不整円形、隅丸方形であり、径もしくは長辺が 0.5 ～ 0.6m、深さ 0.1 ～ 0.3m と比較的浅いが、二段掘りとなるものがある。検出面が地山直上でもあり、本来壇状遺構の盛土などがあったものの大きく削平されたと考えられる。

SB173

G・H19 グリットに検出した建物であり、西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。本建物の西側約 0.5m に古墳 SX271 の墳丘端部があり、これを建物軸に沿うように深さ 0.4m ほど掘り、切り下げて平坦面を確保している。検出面は標高約 24.0m であり、一間一間の総柱建物である。建物主軸は N-35° -W をとる。建物規模は桁行 2.4m、梁行 2.1m である。柱穴は不整楕円形であり、長軸 0.5 ～ 0.9m、深さ 0.2 ～ 0.3m である。

SB225

I・J16 グリットの第 4 面で検出した建物であり、西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。西側斜面では中央流路の底に近い最も低い位置に設けられている。建物南側の斜面上方には「C」字形の区画溝 SD220 が巡る。検出面は標高 19.6 ～ 20.0m であり、一間一間の総柱建物である。

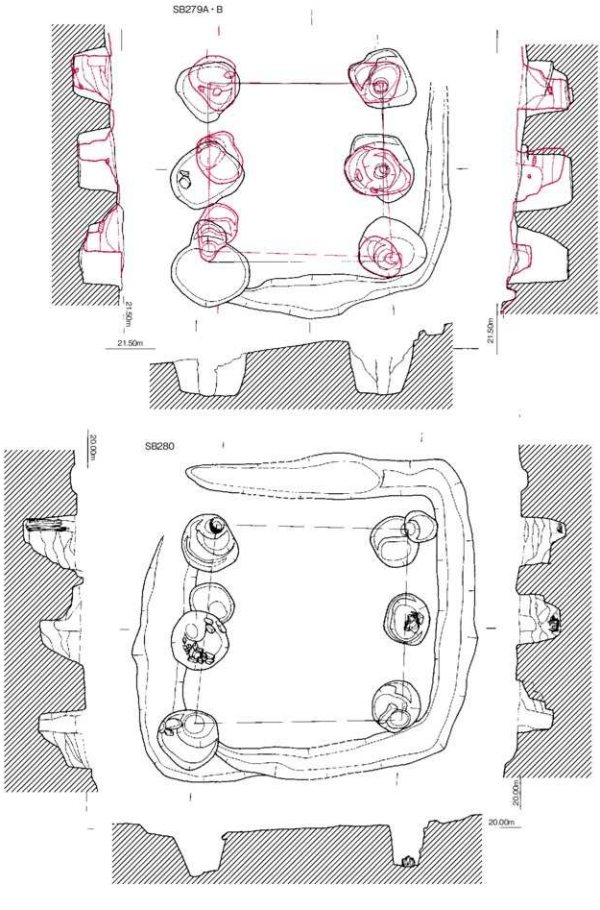


Fig.21　掘立柱建物 12（1/60）

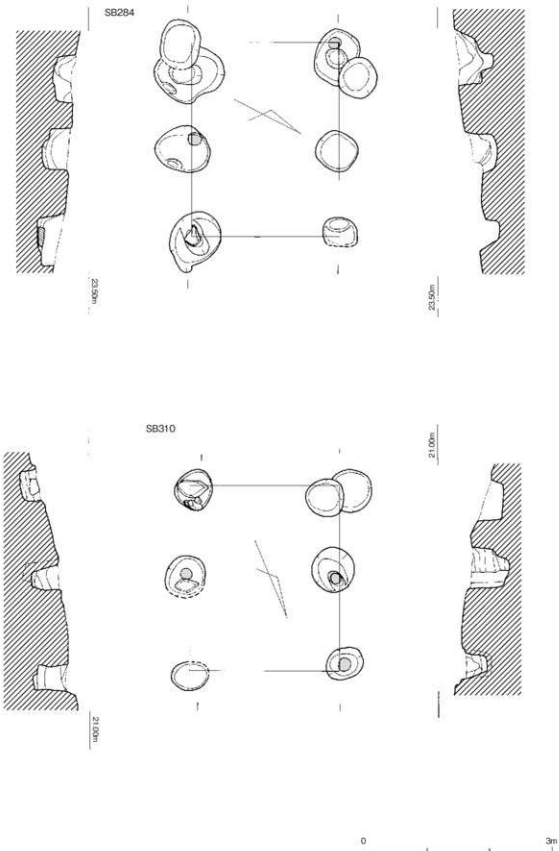


Fig.22　掘立柱建物 13（1/60）

柱穴4個のうち斜面下方の2個には木柱基部が腐敗せず残存していた。建物長軸はN-22° -Eをとる。建物規模は桁行2.2m、梁行2.0mである。柱穴は円形か不整円形であり、径0.5～0.7m、深さ0.5～0.7mと比較的深く、斜面上方の二穴は二段掘りとなっている。柱穴内には径約0.15～0.20mの木柱が認められた。樹皮を粗く剥いだ芯持ちの丸材である。出土遺物には柱穴内などから須恵器、土師器類が出土した（Fig.69、70）。1～5、7、10～12は須恵器であり、1～5は坏、7は椀、10、11は壺、12は甕である。6、8、9、13～15は土師器である。6、8は椀、9は小型壺、13は甕、14、15は甑である。須恵器はⅣa期であり、7世紀第1四半期に位置付けられる。

SB231

K・L15グリットの第4面に検出した建物であり、西側斜面下段に造成された小さな平坦面に設けられている。本建物は溝SD226を切り、また西側斜面上の精錬炉[1]SR223の廃滓に覆われている。検出面は標高約18.5～18.7mであり、中央流路の底面から約1mの高さである。二間一間以上の総柱建物と考えられるが、斜面側の3個の柱穴のみであり、谷側の盛り土部分では柱穴の検出が出来なかった。建物主軸はN-58° -Wをとる。建物規模は桁行3.0mである。柱穴は不整楕円形であり、長軸0.8～1.0m、深さ0.2mである。

SB243A

H・I18グリットに検出した建物である。西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出段階に南側に隣接し同一柱筋に近い建物SB243Bと同一建物とみ誤って同じ遺構番号を附記したが、調査進展により別棟と判断し、A、Bに区分した。SB243Aの検出面は標高約22.9～23.5mであり、二間一間の側柱建物である。建物長軸がN-32° -Wをとる。建物規模は桁行、梁行共に3.0～3.2mである。柱間は桁行1.5～1.6mでる。柱穴は隅丸方形か不整楕円形であり、長径0.8～1.8m前後、深さ0.1～0.8mと比較的大きく、ばらつきがある。二段掘りとなっている柱穴もある。出土遺物には柱穴内などから須恵器、土師器類が出土した（Fig.70）。16は須恵器坏身である。17～22は土師器である。17、18は小型壺、19～22は甕である。須恵器はⅢb～Ⅳa期であり、6世紀第4四半期～7世紀第1四半期の範疇と考えられる。

SB243B

H18グリットに検出した建物であり、西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。建物西側の柱筋が隣接するSB173、243Aと比較的揃っている。検出面は標高約23.2～23.6mであり、一間一間の総柱建物である。長軸がN-38° -Wをとる。建物規模は桁行2.4m、梁行2.2mである。柱穴は隅丸方形か不整楕円形であり、長辺0.9～1.1m前後、深さ0.4～0.7mと比較的大きい。柱穴内には径約0.2mの柱痕跡が認められる。

SB245

G18・19グリットに検出した南北棟であり、西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高約23.4～24.2mである。四間二間の側柱建物である。SB327との重複があるが、先後関係は不明である。長軸はN-31° -Wをとる。建物規模は桁行5.4m、梁行2.9mである。柱間は桁間1.2～1.5m、梁間1.4～1.5mとばらつきがある。保存の良い西側柱穴は隅丸方形であり、長辺0.7～0.8m、短辺0.4～0.7mであり、二段掘りの柱穴も含まれる。深さは0.3～0.5mであり、柱穴底面は地形に沿って下がっている。

SB246

G・H17・18グリットの第4面に検出した南北棟であり、西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。建物北側には約1m離れて造成時の段が残されている。検出面は標高約21.9～

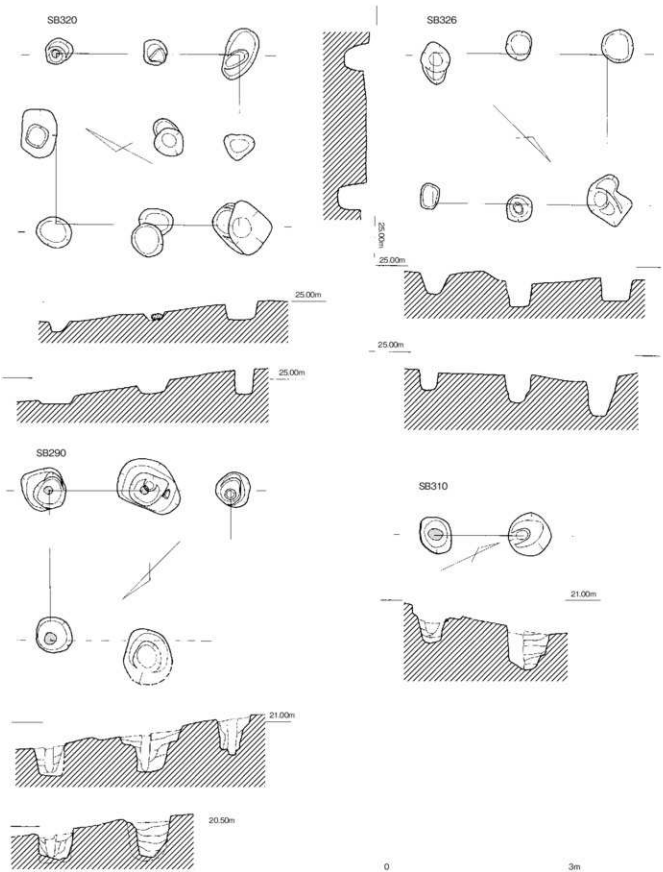


Fig.23　掘立柱建物 14（1/60）

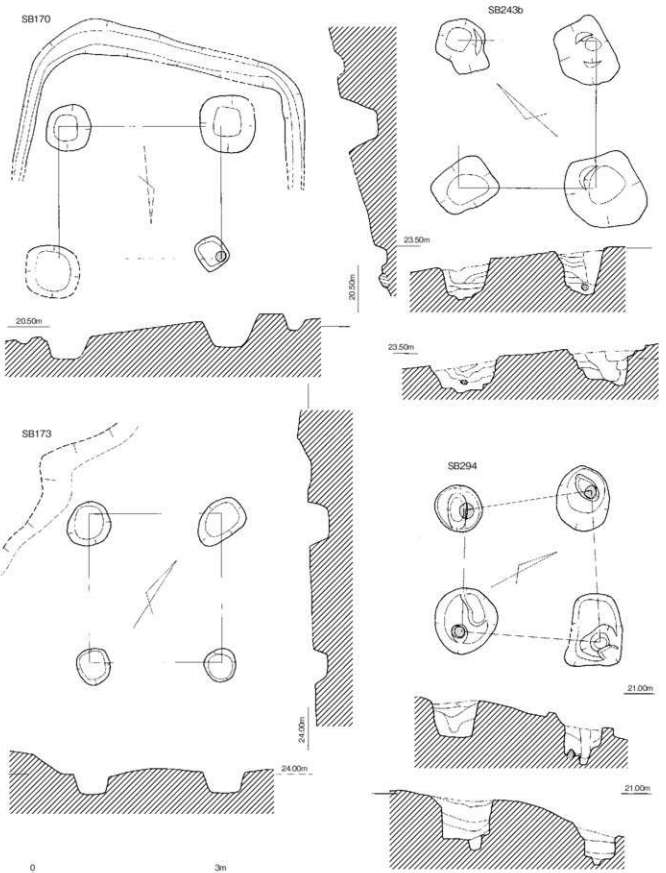


Fig.24　掘立柱建物 15（1/60）

22.7m であり、四間四間の側柱建物と考えたが、不明の柱穴もあり、大壁建物の可能性もある。建物長軸は N-35° -W をとる。建物規模は桁行 6.2m、梁行 4.0m である。柱間は桁間 1.0m 前後、梁間 1.5 ～ 1.7m とばらつきがある。柱穴は不整円形か隅丸方形であり、長辺もしくは径 0.4 ～ 0.5m、深さ 0.2 ～ 0.5m である。斜面下方が浅いことから、本来平坦な造成面があったと考えられる。

SB279A・B

H・I17 グリットの第 4 面で検出した。西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。建物の北側から西側にかけて「L」字形の溝 SD260 が巡る。柱穴には切合いがあり、同じ建物範囲で 1 回の建替えが推定される。新しい方を SB279A、古い方を SB279B とする。検出面は標高約 21.3 ～ 21.8m であり、二間一間の総柱建物である。隣接する建物間の重複はないが、周溝 SD260 は北側で SB329 の周溝 SD58 に切られる。SB279A は、長軸が N-23° -W をとる。建物規模は桁行 2.7 ～ 2.8m、梁行 2.7 ～ 2.9m である。桁間は 1.3 ～ 1.5m とばらつきがある。SB279B は、長軸が同じ N-23° -W をとるが、東側柱列が約 05° 真北よりに振る。建物規模は桁行 2.8 ～ 2.9m、梁行 2.8m である。桁間は 1.4 ～ 1.5m とばらつきがある。柱穴は何れも不整楕円形であり、SB279A は長径 0.7 ～ 1.1m、深さ 0.4 ～ 0.9m であるが、SB279B は長径 1.0 ～ 1.2m、深さ 0.6 ～ 1.0m とやや大きく深い。SB279A の柱穴内には径約 0.2 ～ 0.25m の柱痕跡が認められる。出土遺物は柱穴内から須恵器、土師器類が出土した（Fig.71）。24 ～ 27、36 は須恵器である。24 ～ 27 は坏、36 は壺である。28 ～ 35、37 は土師器である。28 は手づくね、29、30 は壺、31 は甕、32 ～ 35、37 は甕である。須恵器は Ⅲ b ～Ⅳ a 期であり、6 世紀第 4 四半期～ 7 世紀第 1 四半期の範疇と考えられる。また周溝 SD260 からは土師器が出土した（Fig.84）。122 は甕、123 は取手である。

SB280

I16・17 グリットの第 4 面で検出した。西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。西側斜面では中央流路底に近い位置に設けられている。建物の周囲には溝 SD251 が巡る。柱穴には一部に切合いがあり、同じ建物範囲での建替えが推定される。検出面は標高約 20.2 ～ 20.0m であり、二間一間の総柱建物である。建物長軸が N-52° -W をとる。建物規模は桁行 3.0 ～ 3.2m、梁行 3.0 ～ 3.3m である。桁間は 1.5 ～ 2.0m とばらつきがある。柱穴は円形か不整楕円形であり、径 0.8 ～ 1.0m、深さ 0.5 ～ 0.7m と比較的大きく、二段掘りとるものもあり深い。建替え後の柱穴は明確に分離できたものが少ない。同じ柱穴の掘り直しが主で、やや小さくなる。3 本の柱穴内には径約 0.20m の木柱が認められた。樹皮を粗く剥いだ芯持ちの丸材である。出土遺物には柱穴内から須恵器、土師器がある（Fig.71 － 38 ～ 43）。須恵器には 38 の坏蓋がある。土師器には、39 の高坏、40 の壺、41 ～ 43 の甕などがある。また、周溝 SD251 からは土師器が出土した（Fig.84 － 120、121）。120 は甕、121 は甑底部である。須恵器は Ⅲ b 期であり、6 世紀第 4 四半期と考えられる。

SB281

H17 グリットの第 4 面に検出した建物であり、西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。西側斜面では中央流路に近い位置に設けられている。検出面は礫堆上面であり、標高約 20.8 ～ 21.3m である。柱穴 3 個のみの確認であるが、周辺の探索からより大きくなることは考え難く、一間一間の総柱建物と想定される。SB171 との重複も予測されるが、先後関係は不明である。柱穴 3 個は直交軸で配置し、長軸が N-74° -W をとる。建物規模は桁行 3.2m、梁行 2.2m である。柱穴は不整円形であり、径 0.9m 前後、深さ 0.3 ～ 0.6m である。柱穴内の覆土には礫堆起源の円礫が根堅めとして充填されている。

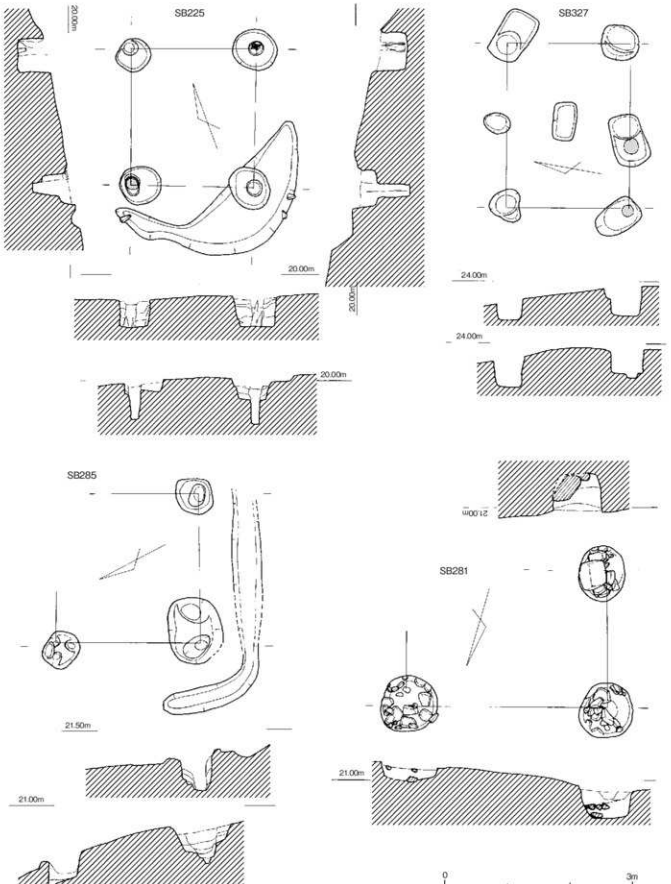


Fig.25　掘立柱建物 16（1/60）

SB284

G18・19グリットの第4面で検出した南北棟であり、西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高約22.9～23.3mであり、二間一間の総柱建物である。柱穴には一部に切合いがあり、同じ建物範囲での建替えが推定される。他の建物との重複はないが、溝SD305並びにトイレ状遺構SD307に切られる。建物の長軸はN-27°-Wをとる。建物規模は桁行3.1m、梁行2.8mである。桁間は約1.5mである。柱穴は円形か不整楕円形であり、径0.6～1.1m、深さ0.3～0.6mで、一部が二段掘りとなっている。柱穴内には径約0.2mの柱痕跡が認められる。

SB285

J16・17グリットの第4面で検出した建物であり、西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。斜面上方に「コ」字形の溝SD250が巡る。検出面は標高20.1～20.7mであり、一間一間の総柱建物である。SB170、290、310、330との重複があり、SB170、330に先行するが、SD290、310との先後関係は不明である。建物長軸はN-53°-Wをとる。建物規模は桁行2.4m、梁行2.3mである。柱穴は隅丸方形か不整楕円形であり、長径0.6～1.1m、深さ0.5～0.7mであり、二段掘りとなっている。柱穴内には径約0.2mの柱痕跡が認められる。

SB290

I・J17グリットの第4面で検出した建物であり、西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。柱穴内に掘り返しがあり、一度の建替えがあったと考えられる。検出面は標高20.4～21.1mであり、二間一間の総柱建物である。SB170、285、310、330との重複があり、SB170、330に先行するが、SD285、310との先後関係は不明である。長軸がN-44°-Eをとる。建物規模は桁行2.9m、梁行2.4mである。桁間は1.4～1.5mとばらつきがある。柱穴は不整楕円形であり、長径0.5～1.0m、深さ0.4～0.6mと比較的大きく、二段掘りとなっていて深い。柱穴内には径約0.1～0.15mの柱痕跡が認められる。

SB294

J16・17グリットの第4面で検出した建物であり、西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高20.3～21.0mであり、一間一間の総柱建物である。第3面のSB330との重複があり、より先行する。柱穴には明瞭な柱痕跡があり、それを繋ぐとそれぞれが直交軸で配置しない。平面的には北側の斜面下方に広がる台形状をなす。北辺の長軸はN-65°-Wをとる。建物規模は桁行2.0～2.4m、梁行2.0～2.2mである。柱穴は円形か不整楕円形であり、長径0.7～1.1m、深さ0.6～0.9mと比較的大きく、二段掘りとなっていて深い。柱穴内には径約0.2mの柱痕跡が認められる。出土遺物には柱穴内から須恵器が出土した（Fig.72－44、45）。須恵器には44の坏蓋と45の坏身がある。これらはⅢb～Ⅳa期であり、6世紀第4四半期～7世紀第1四半期の範疇と考えられる。

SB310

I・J17グリットの第4面で検出した建物であり、西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高20.5～21.0mであり、一間一間の総柱建物と推定される。SB170、285、330との重複があるが、第3面のSB330に先行し、さらに同じ第4面のSB170にも先行するが、SB285との関係は不明である。柱穴は他の建物との切合いで確実には抽出できないが、南側の梁行は柱痕もあり、確実である。この軸線はN-27°-Wをとる。建物規模は梁行1.4mである。柱穴は円形か不整楕円形であり、長径0.6～0.7m、深さ0.6～0.7mと比較的大きく、深い。柱穴内には径約0.15mの柱痕跡が認められる。

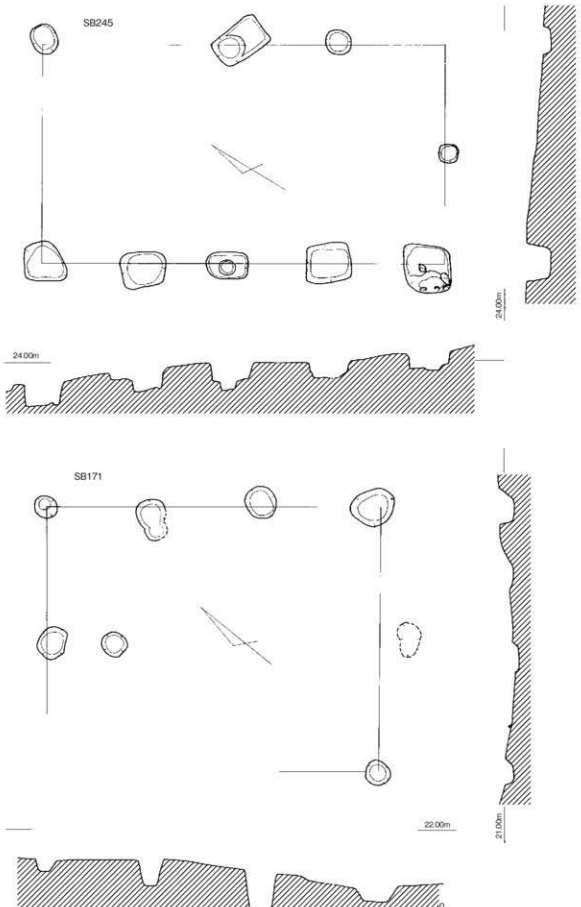


Fig.26　掘立柱建物 17（1/60）

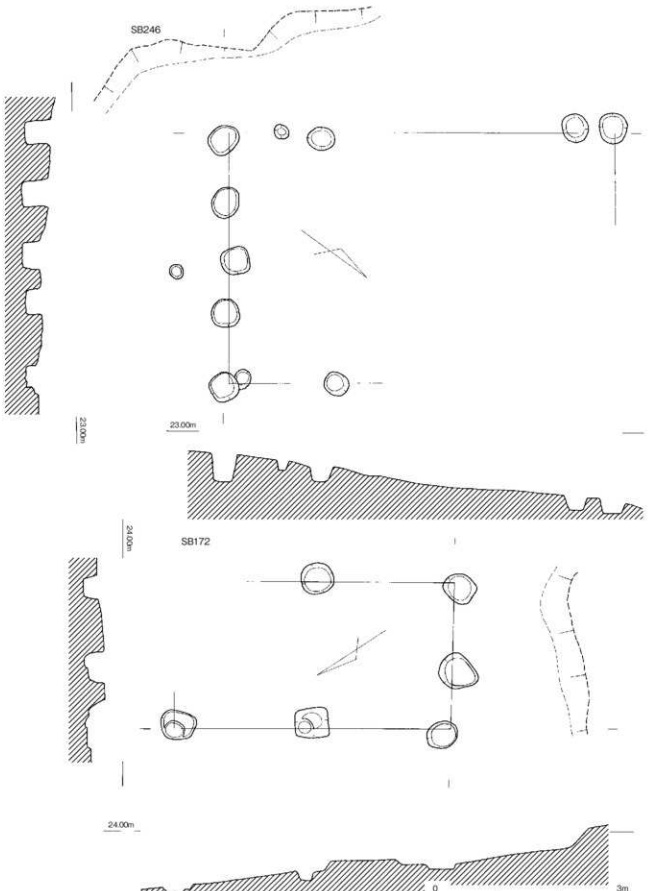


Fig.27　掘立柱建物 18（1/60）

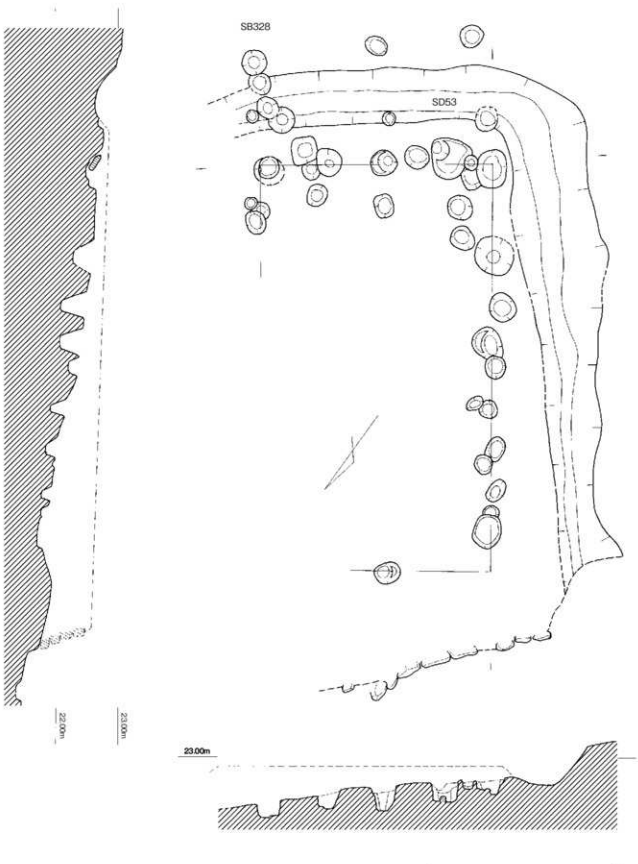


Fig.28　掘立柱建物 19（1/60）

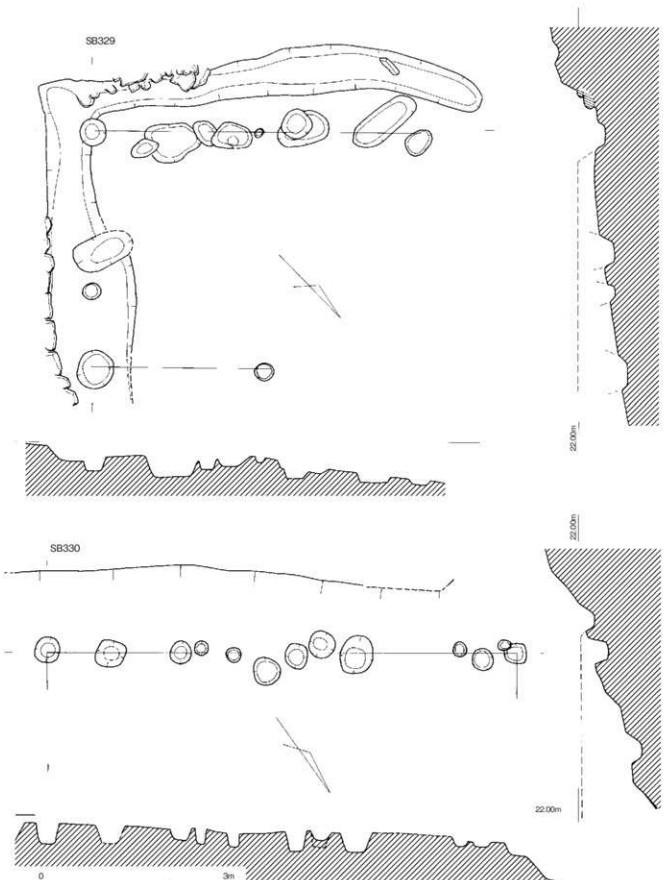


Fig.29　掘立柱建物 20（1/60）

SB320

G20 グリットに検出した建物である。西側斜面中段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高約 24.6 ～ 25.2m であり、二間二間の総柱建物である。柱穴には一部に切合いがあり、同じ建物範囲での建替えが推定される。SB326 との重複があるが、先後関係は不明である。長軸は N-28° -W をとる。建物規模は桁行 2.9m、梁行 2.7m である。桁間は 1.4 ～ 1.5m、梁間 1.3 ～ 1.4m である。柱穴は不整楕円形であり、径 0.4 ～ 0.9m 前後、深さ 0.1 ～ 0.4m である。

SB326

G19･20 グリットに検出した建物である。西側斜面中段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高約 24.7 ～ 24.9m であり、二間一間の総柱建物である。SB320 との重複があるが、先後関係は不明である。長軸は N-43° -W をとる。建物規模は桁行 2.8m、梁行 2.4m である。桁間は 1.4m である。柱穴は不整楕円形であり、長径 0.4 ～ 0.7m、深さ 0.3 ～ 0.7m である。

SB327

G19 グリットに検出した建物である。西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高 23.7 ～ 23.9m であり、二間一間の建物である。SB245 との重複があるが、前後関係は不明である。中央に柱穴 1 個があるが、伴うかは確実でない。長軸は N-80° -E をとる。建物規模は桁行 2.6m、梁行 2.0m である。梁間は 1.0 ～ 1.6m とばらつきがある。柱穴は楕円形か隅丸長方形であり、長辺 0.5 ～ 0.9m、深さ 0.3 ～ 0.5m と建物規模に比べて大きく深い。

SB328

H・I17・18 グリットの第 3 面で検出した南北棟である。西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。北東側は中世の水田開発と近年の農耕地造成のために大きく削平され失われている。建物の西～南辺には「L」字形の溝 SD53 が巡る。北辺は隣接する建物 SB329 の周溝 SD58 があり、その接面に石垣が構築されている。石垣は調査時には 1 ～ 2 段で高さ約 0.3m の残存状況であったが、壇状平坦面の復元から、本来は数段で約 1m の高さがあったと推定できる。建物の検出面は標高 21.9 ～ 22.8m である。下位の第 4 面の SB243a、279 との重複があり、これらより後出する建物である。壁に沿って多数の柱穴があり、この形態から大壁建物と考えられる。ただし、柱穴群の中に桁行方向に約 1.5m、梁行方向に約 1.8m を単位とする柱穴が規則的に配置されていることからみて、それらは屋根構造と関わる主柱の役割をなすと考えられる。建物主軸は N-35° -W をとる。建物規模は桁行 6.0 ～ 6.5m、梁行 3.7m である。また南東側には庇状の柱穴が見られるが、伴うものか明確ではない。柱穴は円形か不整楕円形であり、径 0.2 ～ 0.7m、深さ 0.1 ～ 0.4m とばらつく。出土遺物は周溝 SD53 から須恵器が出土している（Fig.83 － 100 ～ 104）。須恵器は全て坏蓋であり、下限を示す 102、103 は V 期であり、7 世紀第 3 四半期に位置つけられる。

SB329

I・J17 グリットの第 3 面で検出した南北棟である。西側斜面下段に造成された壇状平坦面に設けられている。北東側は中世の水田開発と近年の農耕地造成のために大きく削平され失われている。建物の西～南辺には「L」字形の溝 SD58 が巡る。壁面には石垣状の遺構が見られる。検出面は標高約 21.3 ～ 21.7m であり、SB328 と同様に大壁建物と考えられる。形態的にも類似し、柱穴群の中に桁行方向に約 1.2m、梁行方向に約 1.8m を単位とする柱穴が規則的に配置されている。第 4 面の SB278 との重複があり、より後出する建物である。長軸は N-45° -W をとる。建物規模は桁行約 5.3m、梁行 3.8m である。柱穴は円形か不整楕円形であり、長径 0.2 ～ 1.0m 前後、深さ 0.1 ～ 0.4m とばらつきが大きい。出土遺物は溝 SD58 から須恵器が出土している（Fig.83 － 105・106）。須恵器は、

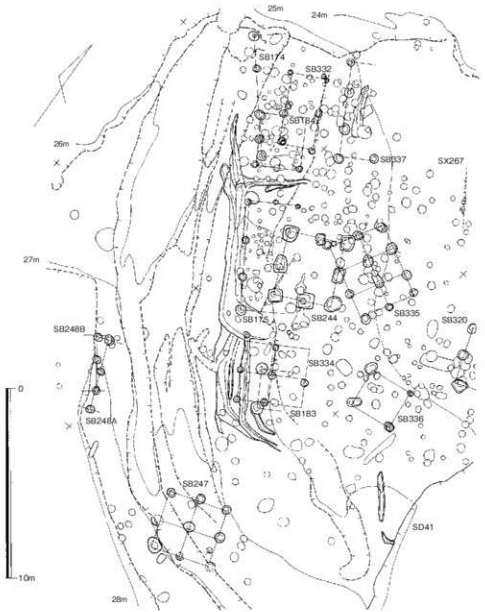


Fig.30　18 次掘立柱建物配置図（西２群）（1/200）

105 が坏蓋、106 が坏身であり、Ⅵ期に含まれ 7 世紀第 4 四半期に位置つけられる。

SB330

J16 グリットの第 3 面に検出した南北棟である。西側斜面下段に造成された墳状平坦面に設けられている。北東側は中世の水田開発と近年の農耕地造成のために大きく削平され失われている。検出面は標高 21.5 ～ 21.9m であり、北東側は本来急斜面であり、造成面は一部を除いて失われている。斜面側の側柱列が残存するのみである。その様相から SB328、329 と同様に大壁建物と考えられる。第 4 面の SB170、285、290、310 との重複があり、より後出する建物である。長軸が N-55° -W をとる。建物規模は桁行 7.5m である。規則的に柱間を配置した柱穴は判断できなかった。柱穴は円形か不整楕円形であり、径 0.2 ～ 0.6m、深さ 0.1 ～ 0.3m と比較的小さく浅い。

（6）西2群（Fig.30）

G～I19～22グリット付近にあり、谷の西側斜面に二段の壇状造成面と建物12棟が検出された。建物は斜面の上段3棟と中段9棟に分かれる。総柱建物9棟と側柱建物3棟である。

SB174

I19・20グリットに検出した建物であり、西側斜面中段に造成された壇状平坦面に並行して設けられている。北東側は近年の農耕地造成のために大きく削平され失われている。南側には壇の後背溝であるSD296が建物と並行している。検出面は標高25.5～26.0mであり、二間三間の側柱建物である。SB184、332との重複があるが、先後関係は不明である。長軸はN-40°-Wをとる。建物規模は桁行6.3m、梁行3.0mである。柱間は桁間1.8～2.4m、梁間1.5mとばらつきがある。柱穴は円形か不整楕円形であり、長径0.4～0.6m、深さ0.3～0.7mである。

SB175

H・I20グリットに検出した建物であり、西側斜面中段に造成された壇状平坦面に並行して設けられている。北東側は近年の農耕地造成のために大きく削平され失われている。建物の外周を溝SD296、268が巡る。検出面は標高25.6～25.9mであり、二間三間の側柱建物である。SB244との重複があるが、先後関係は不明である。長軸はN-33°-Wをとる。建物規模は桁行6.3m、梁行2.6mである。柱間は桁間が2.1m、梁間が1.2～1.4mとばらつきがある。柱穴は円形か不整円形であり、径0.2～0.7m、深さ0.1～0.3mと比較的小さく浅い。柱穴内には径約0.1mの柱痕跡が認められる。出土遺物は溝SD266から須恵器、土師器が出土している（Fig.85－124～127）。須恵器には坏蓋124、椀125があり、土師器には高坏126、椀127がある。須恵器はⅣa期と見られる。

SB183

H21グリットに検出した南北棟であり、西側斜面中段に造成された壇状平坦面（Fig.66中段）に並行して設けられている。なお北東側は近年の農耕地造成のために大きく削平され失われている。建物の南西側は壇後背部に沿って溝SD297が巡る。検出面は標高約26.1～26.3mであり、一間一間以上の総柱建物と推定される。SB334との重複があり、本建物が最下面の検出で先行すると考えられる。建物軸線はN-35°-Wをとる。建物規模は不明だが、柱間は2.2mである。柱穴は円形か不整楕円形であり、長径0.7m前後、深さ0.2～0.4mである。出土遺物は溝SD297から須恵器がある（Fig.85－128～131）。須恵器には坏128～130、坩壺131がある。Ⅲb期で6世紀第3四半期～6世紀第4四半期の範疇と考えられる。

SB184

I20グリットに検出した建物であり、西側斜面中段に造成された壇状平坦面に設けられている。北東側は近年の農耕地造成のために大きく削平され失われている。建物の南西側は溝SD296、268が巡る。検出面は標高約25.8～25.9mであり、二間二間の総柱建物である。SB174、332との重複があるが、先後関係は不明である。長軸はN-30°-Wをとる。建物規模は桁行2.8m、梁行2.4mである。柱間は桁行1.3～1.5m、梁行1.0～1.3mとばらつきがある。柱穴は不整円形か楕円形であり、長径0.3～0.5m、深さ0.1～0.4mである。柱穴内には径0.1m前後の柱痕跡が認められる。

SB244

H20グリットに検出した建物であり、西側斜面中段に造成された壇状平坦面に設けられている。北東側は近年の農耕地造成のために大きく削平され失われている。検出面は標高約25.2～26.1mであり、二間二間の総柱建物である。中央穴は削平で失われたと考えている。SB175、335との重複があり、柱穴の切合いからSB335に後出すると見られる。長軸はN-29°-Wをとる。建物規模は桁行3.5m、

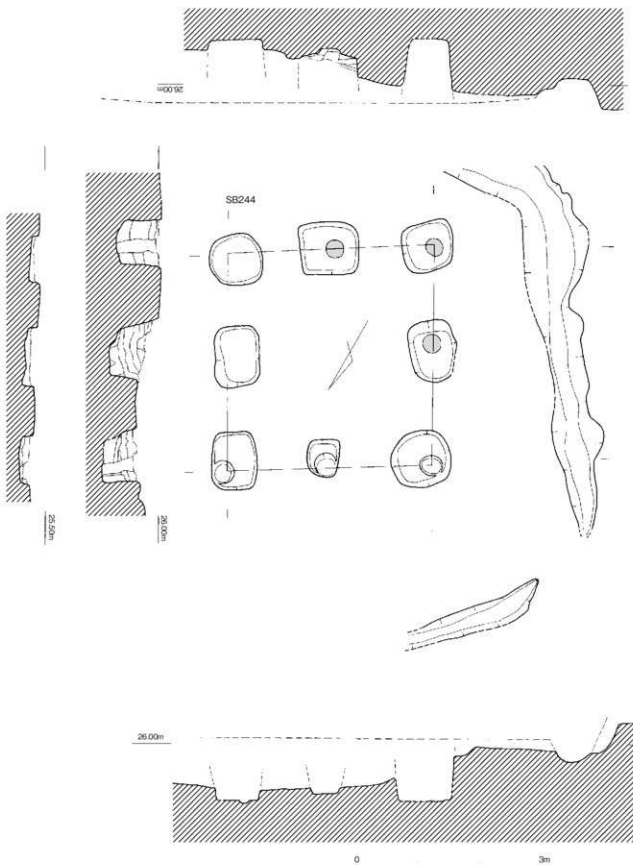


Fig.31　掘立柱建物 21（1/60）

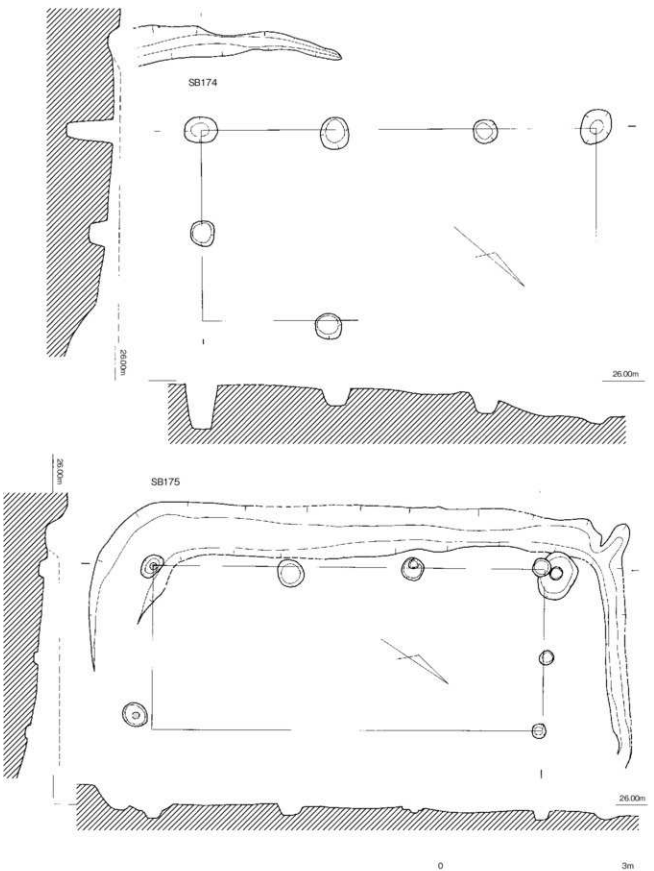


Fig.32　掘立柱建物 22（1/60）

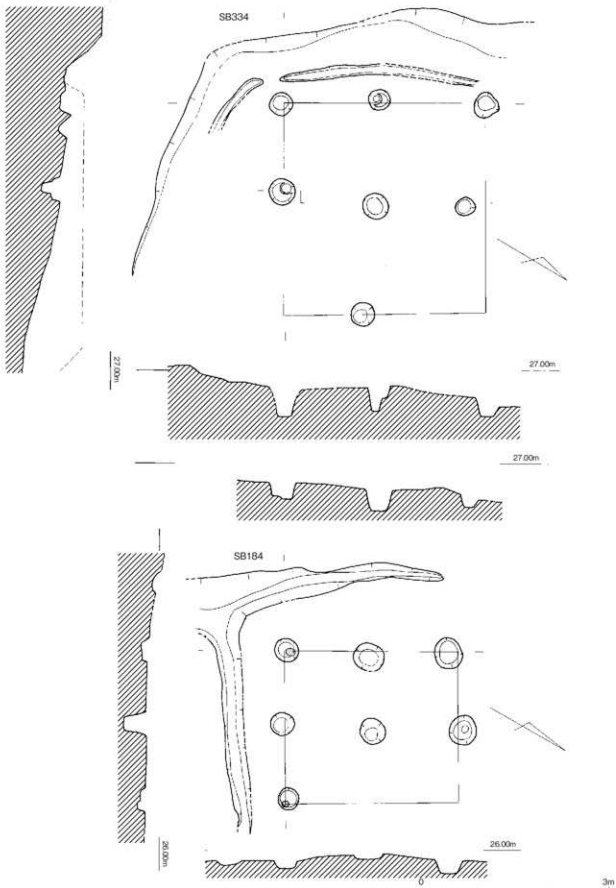


Fig.33　掘立柱建物 23（1/60）

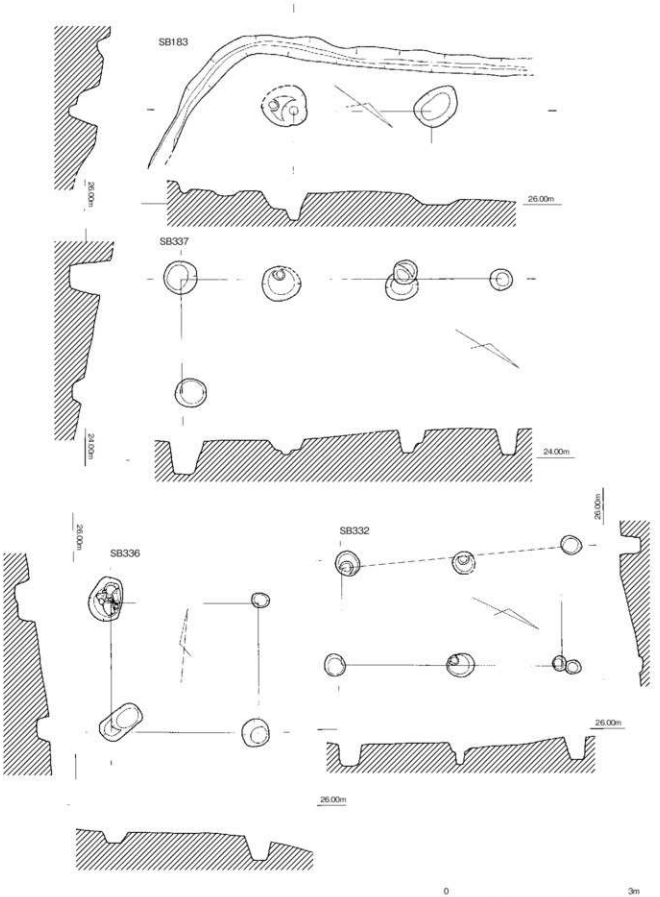


Fig.34　掘立柱建物 24（1/60）

梁行 3.3m である。柱間は桁行 1.5 ～ 2.0m、梁行 1.5 ～ 1.7m とばらつきがある。柱穴は隅丸長方形であり、長辺 0.6 ～ 1.0m、深さ 0.1 ～ 0.8m と大きく、一部は二段掘りとなっている。柱穴内には径約 0.3m の柱痕跡が認められる。

SB247

G・H21・22 グリットに検出した建物であり、西側斜面上段に造成された壇状平坦面に設けられている。建物の東西と南側には区画溝が断続的に巡る。全体に近年の農耕地造成のために大きく削平され、また中央を斜めに掘られた近現代溝 SD20 のために相当破壊されている。検出面は標高 27.0 ～ 28.0m であり、二間二間の総柱建物である。建物軸は N-17° -W をとる。建物規模は桁行 3.1m、梁行 3.0m である。柱間は 1.5m 前後でばらつきは少ない。柱穴は円形か不整楕円形であり、長径 0.5 ～ 0.8m、深さ 0.2 ～ 0.5m である。

SB248A・B

I21 グリットに検出した建物であり、本来は西側斜面上段に造成された壇状平坦面に設けられていたと考えられる。南側の斜面上方には江戸時代に造営された溜井 SX001 があり、また北側には近現代溝 SD020 があるために南北両側は深く掘削され、基底部幅約 2m の土手状に残された土壁の上面で柱穴を検出した。ちなみにこの土手では造成盛土が明瞭に残されていた（Fig.66 下段）。検出面は標高 27.5 ～ 28.1m であり、東西方向に二間分の柱穴二群を確認したものである。建物の南北への展開は不明であるが、形態から見て二間二間の総柱建物 2 棟が重複しているものと考えた。両者は重複するが、柱穴に切合いがなく先後関係は不明である。SB248A は主軸が N-85° -E をとる。建物規模は 3.7 ～ 3.8m、柱間は 1.8 ～ 2.0m とばらつく。柱穴は不整円形であり、両端がやや大きく径 0.5 ～ 0.6m 前後、深さ 0.2 ～ 0.3m である。SB248B は主軸が N-71° -E をとる。建物規模は 2.8m、柱間は 1.2 ～ 1.5m とばらつく。柱穴は不整円形であり、径 0.4 ～ 0.5m、深さ 0.2 ～ 0.3m である。

SB332

I19・20 グリットに検出した南北棟である。西側斜面中段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高約 25.5 ～ 25.9m であり、二間一間の総柱建物である。SB174、184 との重複があるが、先後関係は不明である。長軸は N-31° -W をとる。建物規模は桁行 3.5 ～ 3.7m、梁行 1.6 ～ 1.9m であり、北側にやや広がる。桁間は 1.6 ～ 1.9m とばらつきがある。柱穴は円形か不整円形であり、径 0.3 ～ 0.4m、深さ 0.1 ～ 0.4m であり、半数は二段掘りとなっている。

SB334

H20・21 グリットに検出した建物であり、西側斜面中段に造成された壇状平坦面に設けられている。なお北東側は近年の農耕地造成のために大きく削平され失われている。建物の南西側は壇後背部に沿って溝 SD297 が巡る。検出面は標高 26.4 ～ 26.7m であり、二間二間の総柱建物である。SB183 との重複があり、本建物はより後出する。長軸は N-32° -W をとる。建物規模は桁行 3.4m、梁行 3.2m である。桁間 1.4 ～ 1.7m、梁間 1.5 ～ 1.7m とばらつきがある。柱穴は円形か不整円形であり、径 0.3 ～ 0.4m、深さ 0.2 ～ 0.4m であり、二段掘りとなるものがある。

SB335

H20 グリットに検出した建物であり、西側斜面に設けられている。検出面は標高約 24.9 ～ 25.5m であり、二間三間の総柱建物である。SB244 との重複があり、より先行する。長軸は N-60° -W をとる。建物規模は桁行 4.0 ～ 4.5m、梁行 3.2m である。柱間は桁間 1.1 ～ 1.5m、梁間 1.4 ～ 1.7m とばらつきが大きい。柱穴は不整楕円形であり、径 0.5m 前後、深さ 0.2 ～ 0.4m である。本建物は他の建物より古い様相があり、次回報告にて再度詳述する。

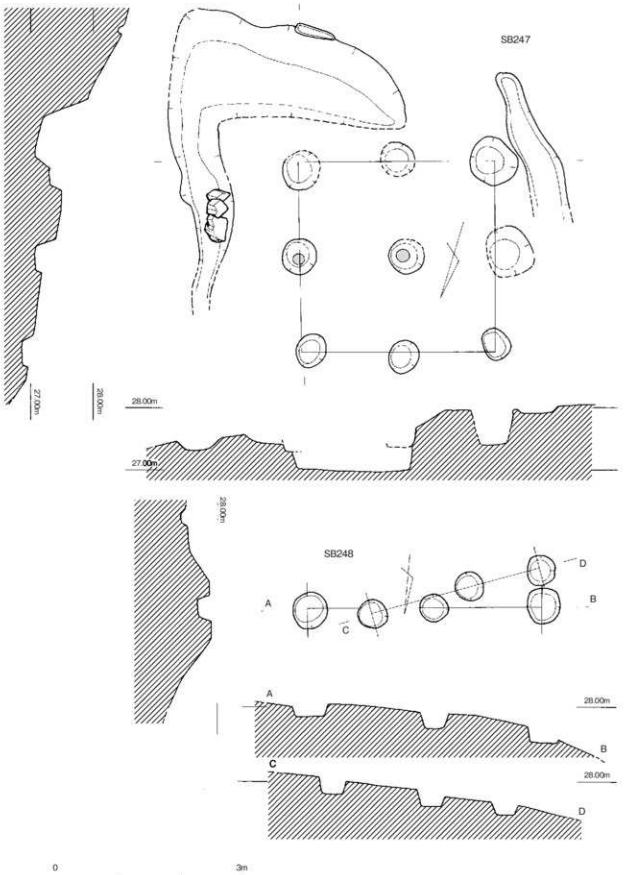


Fig.35　掘立柱建物 25（1/60）

SB336

G・H20 グリットに検出した建物あり、西側斜面中段に造成された壇状平坦面に設けられている。検出面は標高約 25.3 ～ 25.6m であり、一間一間の総柱建物である。主軸は N-05° -W をとる。建物規模は桁行 2.3m、梁行 2.1m である。柱穴は円形か不整楕円形であり、長径 0.3 ～ 0.7m、深さ 0.2 ～ 0.4m である。

SB337

H19 グリットに検出した南北棟であり、西側斜面中段に造成された壇状平坦面に設けられている。東側は近年の農耕地造成のために大きく削平され失われている。検出面は標高約 23.9 ～ 24.4m であり、一間以上三間の側柱建物である。長軸は N-29° -W をとる。建物規模は桁行 5.1m、梁行 1.8m 以上である。桁間は 1.6 ～ 2.0m とばらつきがある。柱穴は円形か不整円形であり、径 0.3 ～ 0.6m、深さ 0.2 ～ 0.5m である。

（7）西 3 群（Fig.36）

E ～ G22 ～ 25 グリット付近にある。調査 4 区内であり南に延びる幅約 20m の狭い枝谷に、五段の壇状造成面を設けている。この造成面は急斜面を雛壇状に造成し、一部を石垣で補強するなど、一見すると棚田のように見られた。この遺構を「棚状造成壇」と呼びたい。建物はこの棚状造成壇上に配置される。なお、最下段の第一段目は西 2 群の上段と一致する。建物 11 棟が検出された。建物は第一段 2 棟、第二段 5 棟、第三段 1 棟、第四段 2 棟、第五段 1 棟に分かれる。全て総柱建物である。

SB176

G22 グリットに検出した建物であり、棚状造成壇一段目に設けられている。この面は東側約 15m にある建物 SB248A・B と同じ面であり西側斜面上段と連続する。ただし本建物付近から北東側は近年の用水路 SD020 をはじめ農耕地造成工事のために大きく削平されているために、保存状況は著しく悪い。検出面は標高約 28.1 ～ 28.7m であり、一間二間の総柱建物である。長軸が N-48° -W をとる。建物規模は桁行 2.6m、梁行 2.0m である。桁間は 1.3m である。柱穴は円形か不整円形であり、両端がやや大きく、径 0.3 ～ 0.5m、深さ 0.2m である。

SB177

F・G22 グリットに検出した建物であり、棚状造成壇の第一段目で西側斜面上段に造成された壇状平坦面に連続する。本建物の北側は近年の農耕地造成工事のために大きく削平されている。検出面は標高 29.1 ～ 29.4m である。二間一間以上の建物である。長軸は N-84° -W をとる。建物規模は桁行 2.9 ～ 3.0m である。柱間は約 1.0m である。柱穴は隅丸方形であり、長辺 0.4 ～ 0.7m、深さ 0.2m と削平のため浅く成っている。

SB178

F・G22・23 グリットに検出した建物であり、棚状造成壇の第二段目にある。壇に並行して配置される。検出面は標高 30.4 ～ 30.7m であり、盛土である黒色～暗褐色土上面のために、遺構の把握が困難を極めた。二間一間の総柱建物である。SB179 ～ 181 と重複するが、先後関係は不明である。長軸が N-55° -E をとる。建物規模は桁行 3.1m、梁行 2.6m である。桁間は約 1.5m である。柱穴は隅丸方形か不整楕円形であり、長辺 0.5 ～ 0.7m、深さ 0.3 ～ 0.4m である。

SB179

F・G23 グリットに検出した建物であり、棚状造成壇の第二段目にある。壇に直交して配置される。検出面は標高 30.4 ～ 30.6m であり、二間一間の総柱建物である。SB178、180 と重複するが、先後関係は不明である。長軸は N-40° -W をとる。建物規模は桁行 4.1m、梁行 2.5m である。桁間は 1.8

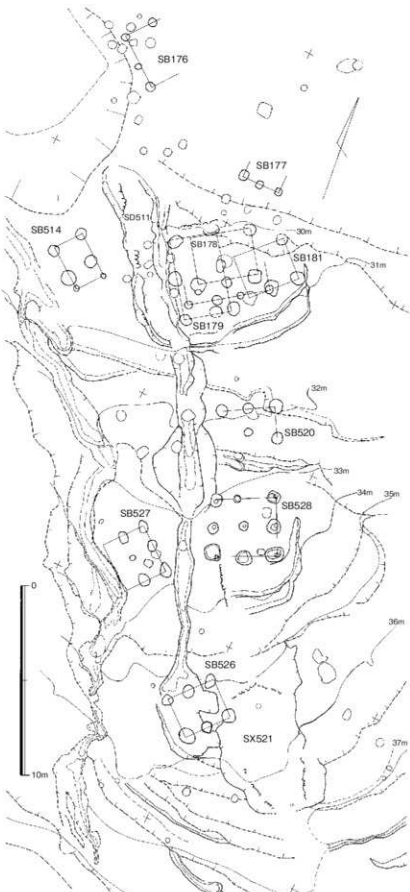


Fig.36　18 次掘立柱建物配置図（西 3 群）（1/200）

～ 2.3m とばらつきがある。柱穴は不整楕円形であり、長径 0.7 ～ 1.2m、深さ 0.2 ～ 0.4m と大きく、浅い。

SB180

F23 グリットに検出した建物であり、棚状造成壇の第二段目にある。壇に並行して配置される。検出面は標高約 30.7m であり、三間一間以上の建物である。対向する側柱は検出できなかった。SB178、179、181 との重複があり、このうち SB181 の柱穴を切っていて後出する。長軸は N-59° -E をとる。建物規模は桁行 4.3m である。柱間は 1.3 ～ 1.5m とばらつきがある。柱穴は円形か不整円形であり、径 0.3 ～ 0.5m、深さ 0.3 ～ 0.4m である。

SB181

F22･23 グリットに検出した建物であり、棚状造成壇の第二段目にある。壇に並行して配置される。検出面は標高 30.7 ～ 30.9m であり、二間一間の総柱建物である。SB178 ～ 180 との重複があり、相互の先後関係は明確でないが、SB180 は本建物より後出する。長軸は N-40° -E をとる。建物規模は桁行 2.7m、梁行 2.4m である。桁間は 1.2 ～ 1.5m とばらつきがある。柱穴は不整楕円形であり、長径 0.7 ～ 0.8m、深さ 0.3m であり、二段掘りの柱穴がある。

SB514

G23 グリットに検出した建物であり、棚状造成壇の第二段目西側にある。壇に直交して配置される。検出面は標高 30.6 ～ 30.8m であり、一間一間の総柱建物である。また南東側の一辺に柱穴があり庇がつくと考えられる。長軸は N-50° -W をとる。建物規模は桁行 1.7m、梁行 1.5m であり、南東側の庇は桁行に 0.7 ～ 0.8m 拡張している。柱穴は円形か不整円形であり、主柱の径 0.6 ～ 0.7m、庇柱は径 0.3m 前後である。深さは主柱が 0.2 ～ 0.4m、庇柱が 0.2m である。本建物は極めて小規模であり、かつ平面的には柱穴の配置や構造が不規則である。しかし、遺構面は V 層造成面での確認のため明瞭であり、かつ周辺には他に柱穴はないことから、この復元がやや修正されるとしても、一間一間庇付のこの形態は明らかである。

SB520

F23・24 グリットに検出した建物であり、棚状造成壇の第三段目にある。壇に並行して配置される。検出面は標高約 31.9 ～ 32.1m であり、二間一間の総柱建物である。北側の柱筋の延長に同じ形態をもつ 2 つの柱穴があり、建物がさらに西側に延長するか同一軸の別建物が存在した可能性がある。長軸は N-64° -W をとる。建物規模は桁行 2.8m、梁行 1.5m である。桁間は 1.4m である。柱穴は不整楕円形であり、長径 0.6 ～ 0.9m、深さ 0.1 ～ 0.5m と比較的大きく、一部は二段掘りとなっている。柱穴内には径約 0.15m の柱痕跡が認められる。

SB526

E・F25 グリットに検出した建物であり、棚状造成壇の第五段目にある。壇に並行して配置される。検出面は標高 35.0 ～ 35.8m であり、二間一間の総柱建物である。北側隅部には「L」字形の溝 SD508 が巡る。長軸は N-46° -E をとる。建物規模は桁行 2.5m、梁行 2.2m である。桁間は 1.1 ～ 1.4m とばらつきがある。柱穴は不整楕円形であり、長径 0.7 ～ 0.9m、深さ 0.2 ～ 0.5m と比較的大きく、深い。柱穴内には径約 0.2m の柱痕跡が認められる。出土遺物には柱穴内から須恵器、土師器が出土した（Fig.72 － 61･62）。須恵器は坏蓋 61 があり、土師器は壺 62 がある。須恵器は Ⅲ b 期であり、6 世紀第 3 四半期～ 6 世紀第 4 四半期の範疇と考えられる。

SB527

F24 グリットに検出した建物であり、棚状造成壇の第四段目西側にある。壇に並行して配置される。

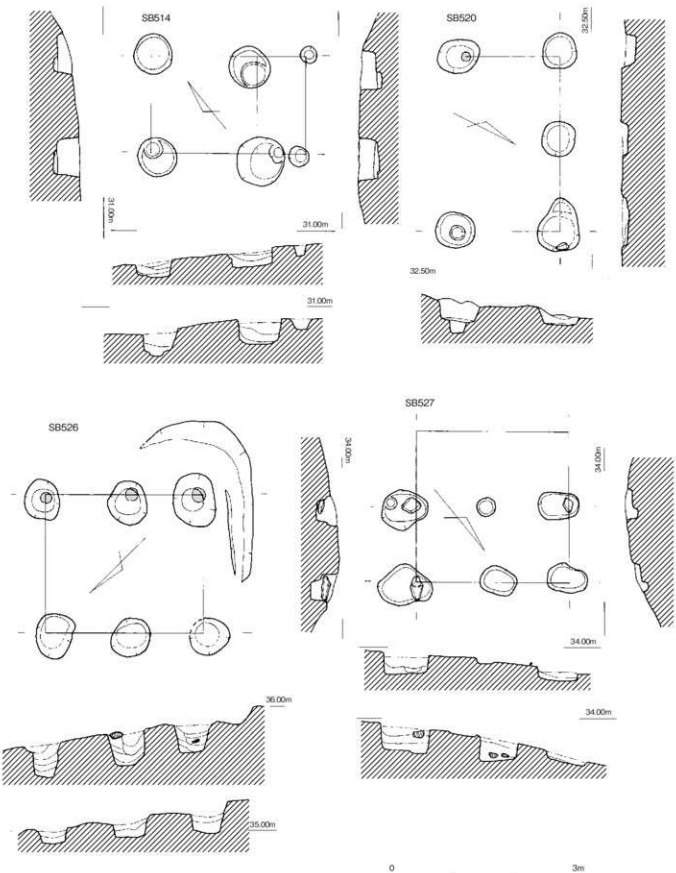


Fig.37　掘立柱建物 26（1/60）

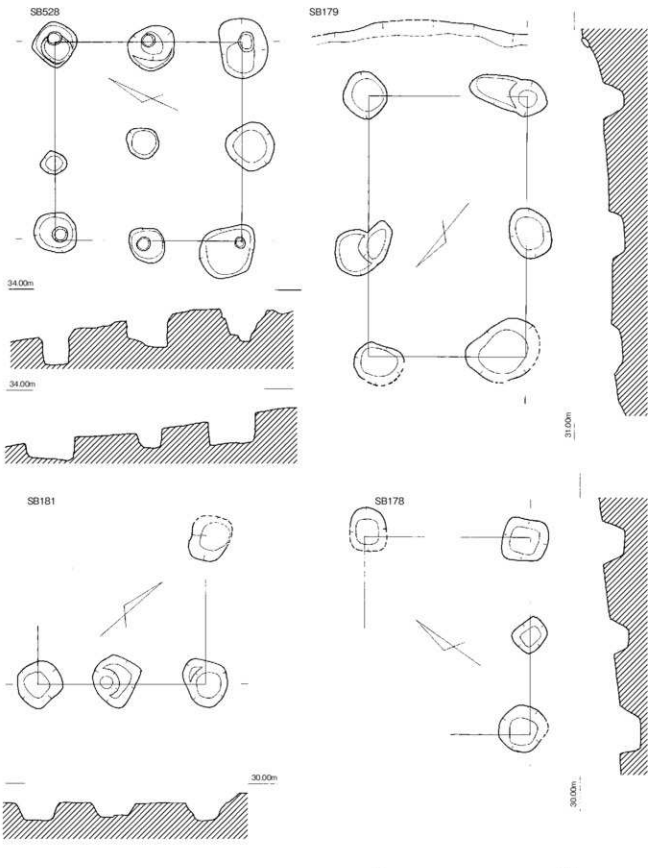


Fig.38　掘立柱建物 27（1/60）

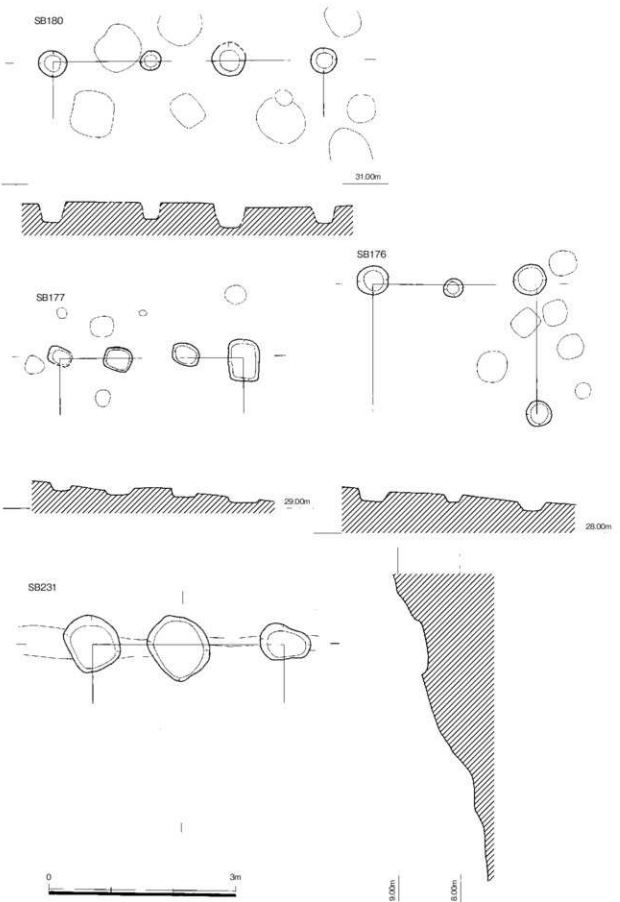


Fig.39　掘立柱建物 28（1/60）

検出面は標高 33.7 ～ 34.0m であり、二間二間の総柱建物である。南側柱列は江戸期以降の溝 SB505 に大きく切られる。長軸は N-51° -W をとる。建物規模は桁行 2.4m、梁行 2.4m と推定できる。柱間は 1.2m に揃っている。柱穴は不整楕円形であり、長径 0.6 ～ 1.0m、深さ 0.3 ～ 0.4m であるが、中央柱穴は円形で径 0.3m、深さ 0.1m と小さく浅い。

SB528

E･F24 グリットに検出した建物であり、棚状造成壇の第四段目西側にある。壇に並行して配置される。検出面は標高約 33.1 ～ 33.7m であり、二間二間の総柱建物である。石組みのある谷部中央流路 SD511 と重複するが、流路が柱穴を切っている。長軸は N-26° -W をとる。建物規模は桁行 3.2m、梁行 3.0m である。柱間は桁間 1.2 ～ 2.0m、梁間 1.4 ～ 1.6m とばらつきがある。柱穴は円形か不整楕円形であり、長径 0.4 ～ 1.0 m、深さ 0.3 ～ 0.5m と比較的大きく、二段掘りとなっていて深い。出土遺物には柱穴内から土師器が出土した（Fig.72 － 63、64）。土師器には壺 63 と甕 64 がある。

2）精錬炉

本遺跡では 7 基の製鉄（精錬）炉を検出した。炉は谷部の中央付近の B ～ L13 ～ 18 グリットに 1 基ごとに離れて分布し、谷の東斜面に 5 基、西斜面に 2 基がある。ただし、SR227 の 1 基を除くとそれぞれが約 30m ごとの等間隔に単独に分布し、その配置に何らかの意味も考えられる。精錬炉は何れも小型の箱形炉であり、両側に排滓壕を有するいわゆる「鉄アレイ」形を呈する。中央付近の 3 基は谷に対し主軸を直交方向に配置し、周囲の 4 基は谷に対し並行方向に配置する。

SR59（Fig.41）

F17 グリットの第 3 面で検出した精錬炉である。東側斜面下部に造成された壇状遺構上で検出した。検出面は標高 21.9 ～ 22.5m である。形態は炉の両側に排滓壕をもつ、いわゆる「鉄アレイ」形の精錬炉である。壇状遺構の同じ位置には、下位の第 4 面において建物 SB166、252A がある。SR59 はその上部で検出したが、その間に 0.2 ～ 0.4m の自然堆積土があった。建物群の解体、埋没後、一定期間を経て、この壇状遺構上面を改めて造成、整地してこの精錬炉を構築したと考えられる。造成は斜面側を 0.8m ほど掘削して造成し、幅（南北）約 8 m、奥行（東西）約 6 m の平坦面を設けたものであり、炉はその中央に主軸を谷に対して並行方向に設定している。残存する遺構の規模は排滓壕を含めた全長が約 5.3 m であり、炉の長軸方向は N-33° -W をとる。炉の掘方は 100 × 80cm を測る。箱形炉と見られる。西側に僅かに炉壁基部が残存し、そこから復元すると炉の内幅は約 50cm と考えられる。炉底には深さ 20cm の掘方があり、下部に炭層、中位に青灰色硬化層が充填している。上部には炉壁片と炉底滓が見られ、炉内部の大きさは基底部で長さ 60cm、幅 50cm ほどに復元される。また羽口に関わる遺構などは検出できていない。両側の排滓壕は鉄滓、炉壁が含まれるが、排滓壕から谷部斜面に向けて掻き出しによる溝状の遺構が形成されている。周囲の平坦面から西側の中央谷部 SX100 にかけての斜面に鉄滓、炉壁片、炭化物などが、南北 10 m、東西 8 m の範囲に点在している。しかしその量は多くない。主に排滓壕から須恵器片が出土した（Fig.73－2･3･6）。須恵器には 2 の坏蓋、3 の高坏、6 の甕がある。須恵器はⅣｂ～Ⅴ期であり、7 世紀第 2 ～ 3 四半期と考えられる。

SR86（Fig.42）

I15 グリットの第 3 面で検出した精錬炉である。東側斜面下部に造成された壇状遺構上で検出した。検出面は標高 19.5 ～ 20.0m である。形態は炉の両側に排滓壕をもつ、いわゆる「鉄アレイ」形の製鉄（精錬）炉である。壇状遺構の同じ位置には、下位の第 4 面において建物 SB182 がある。SR59 はその上部で検出したが、その間に 0.2 ～ 0.3m の自然堆積土があった。建物群の解体、埋没後、一定期間

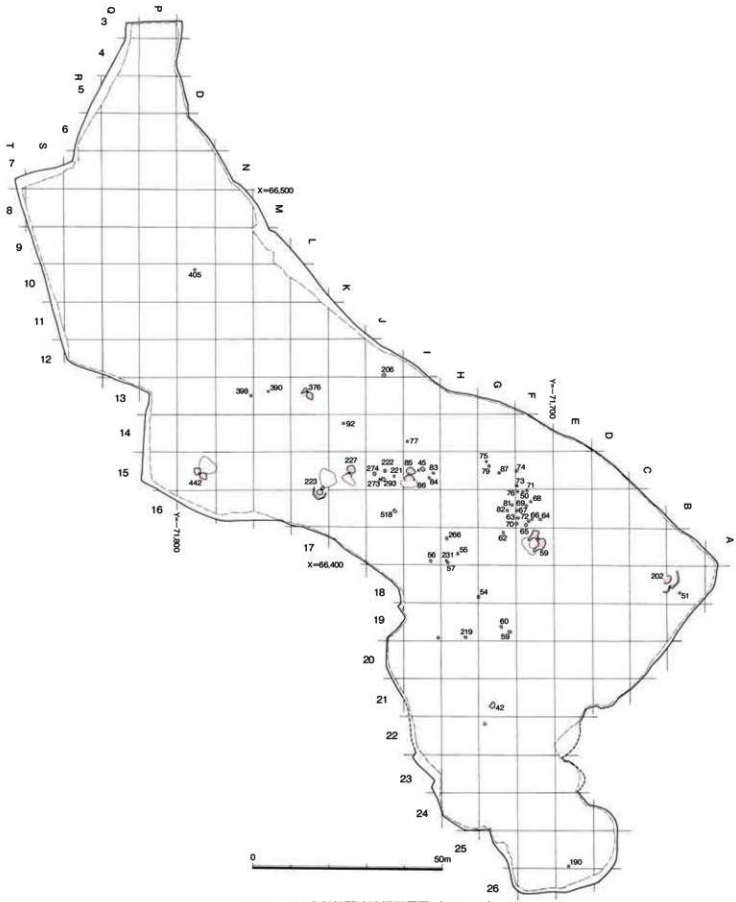


Fig.40　18 次製鉄関連遺構配置図（1/1000）

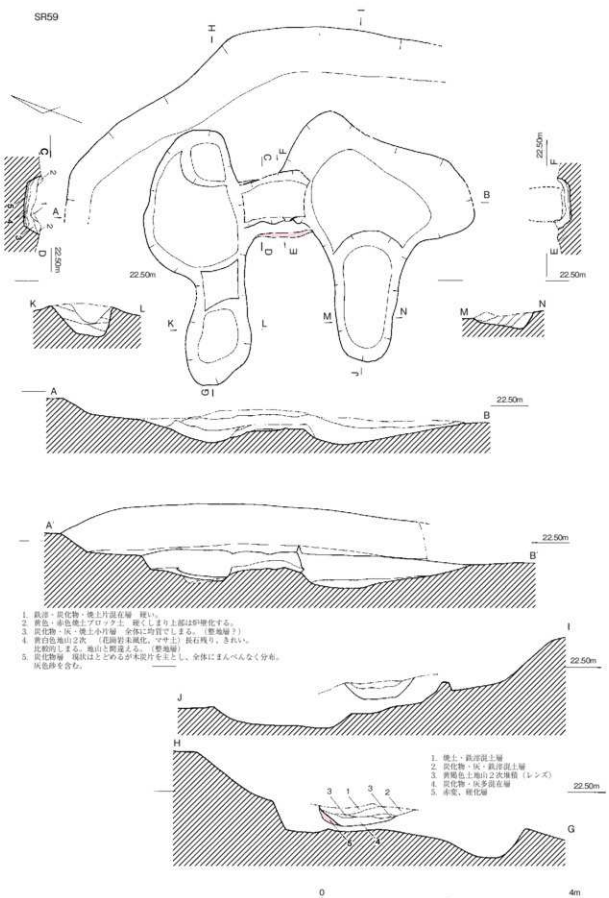
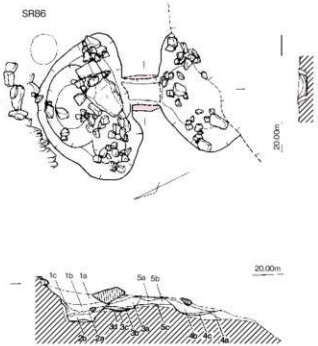
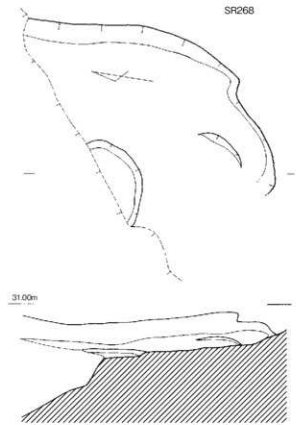
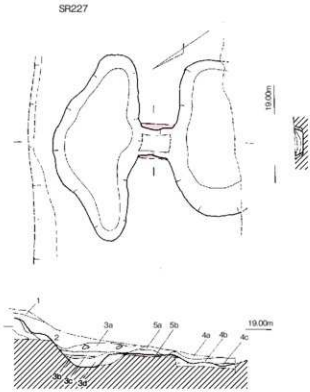


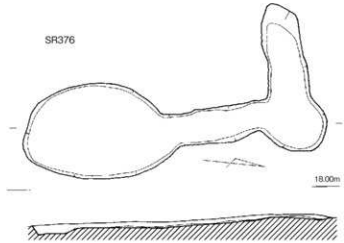
Fig.41　精錬炉1　(1/60)



1a. 暗褐色土　均質φ15cm以上の礫含むが小礫は少ない。やや砂質気味。しまる。
　少量の炭化物・土器片含む。鉄滓はほとんどない。
1b. 暗褐色土　やや赤色気味。（鉄分多いか）性状は土層に類似。炭化物・鉄滓少量含む。
2a. 鉄滓・赤色砂質層　（全体に赤い）
2b. 暗黄褐色土　炭化物多い。硬土。鉄滓少量含む。
3a. 鉄滓・砂質層
3b. 炭化物層
3c. 黄色地山2次（整地層？）
3d. 暗褐色土　炭化物含む。よごれる。







1. 黄褐色土　礫多く含む。地山2次、小礫多く含む。
2. 暗褐色・暗灰褐色土　粘度片少量含む。
　白灯で灰色粗砂含む。土器片含む。
3a.b. 鉄滓集積　土層に大きな鉄滓ブロックを含む
　硬く締まる。
3c. 赤色焼土、砂質片を含む。
3d. 褐色砂質土、硬土、炭化物、鉄滓混じる。
4a. 灰白色砂質土　流埋あり。
4b. 鉄滓集積　黄色土ブロック混じり土　盛土か
4c. 黄褐色斜粘質土
5a. 暗灰色砂質土、鉄滓混じる。
5b. 暗灰・褐色鉄滓　均質、炭化物、硬土含む。

0　4m

Fig.42　精錬炉2（1/60）

を経て、この壇状遺構上面を改めて造成、整地してこの精錬炉を構築したと考えられる。造成は斜面側の礫層を0.5mほど掘削して造成し、幅（東西）約3m、奥行（南北）約3mの平坦面を設けたものであり、炉はその中央に主軸を谷に対して直交方向に設定している。残存する遺構の規模は排滓壙を含めた全長が約3.3mであり、炉の長軸方向はN-27°-Eをとる。炉の掘方は60×40cmと小さい。炉形態は箱形炉と見られる。炉底には深さ15cmの掘方があり、下部に炭層、中位に青灰色硬化層が充填している。上部には炉壁片と炉底滓が見られ、炉内部の大きさは基底部で長さ50cm、幅25cmほどに復元される。また羽口座に関わる遺構などは検出できていない。両側の排滓壙は鉄滓、炉壁が含まれるが、上部には花崗岩角礫が多数含まれていた。角礫には焼けた痕跡はなく、操業停止後、埋没過程で混入したと考えられる。周囲の平坦面から西側の中央谷部SX100にかけての斜面に鉄滓、炉壁片、炭化物などが、南北5m、東西4mの範囲に点在している。しかしその量は多くない。主に排滓壙から土師器片が出土した（Fig.74－25～27）。土師器には25の坏身、26・27の甕片がある。

SR223（Fig.43）

I15グリットで検出した精錬炉である。西側斜面中位に造成された壇状遺構SX219上面で検出した。検出面は標高20.0mである。形態は炉の両側に排滓壙をもつ、いわゆる「鉄アレイ」形の製鉄（精錬）炉である。壇状遺構の斜面側は中世水田面による造成のために削平されている。斜面下位の第4面において建物SB231がある。SR223はその上部で検出したが、その間に0.3～0.5mの自然堆積土と鉄滓層があった。造成は斜面側の地山Ⅴ層を1m以上掘削して造成し、幅（東西）約9m、奥行（南北）約4m以上の平坦面を設けたものであり、炉はその中央に主軸を谷に対して直交方向に設定している。残存する遺構の規模は排滓壙を含めた全長が約3.3mであり、中央の炉の長軸方向はN-27°-Eをとる。炉の掘方は残存している範囲で60×50cmと小さい。炉形態は箱形炉と見られる。炉底には深さ10cmの掘方があり、下部に炭層、中位に青灰色硬化層が充填している。上部には炉壁片と炉底滓が見られ、炉内部の大きさは基底部で長さ50cm、幅30cmほどに復元される。なお羽口座に関わる遺構などは検出できていない。南側の排滓壙は鉄滓、炉壁が少量含まれるが、北側の排滓壙は削平のため一部の残存で、少量の鉄滓が出土したに過ぎない。炉からやや離れるが、中世水田下の旧谷部斜面に鉄滓、炉壁片、炭化物などが、南北3m、東西4mの範囲に分布している。しかしその量は多くない。主に排滓壙から須恵器、土師器が出土した（Fig.74－28～30）。須恵器には29・30の坏身、土師器には28の椀がある。須恵器はⅣb期であり、7世紀第2四半期と考えられる。

SR227（Fig.42）

K15グリットの第3面で検出した精錬炉である。東側斜面下部に造成された壇状遺構上で検出した。検出面は標高19.5～20.0mである。形態は炉の両側に排滓壙をもつ、いわゆる「鉄アレイ」形の製鉄（精錬）炉である。壇状遺構の同じ位置には、下位の第4面において建物SB182がある。SR59はその上部で検出したが、その間に0.2～0.3mの自然堆積土があった。建物群の解体、埋没後、一定期間を経て、この壇状遺構上面を改めて造成、整地してこの精錬炉を構築したと考えられる。造成は斜面側の礫層を0.5mほど掘削して造成し、幅（東西）約3m、奥行（南北）約3mの平坦面を設けたものであり、炉はその中央に主軸を谷に対して直交方向に設定している。残存する遺構の規模は排滓壙を含めた全長が約3.3mであり、炉の長軸方向はN-35°-Eをとる。炉の掘方は60×40cmと小さい。炉形態は箱形炉と見られる。炉底には深さ15cmの掘方があり、下部に炭層、中位に青灰色硬化層が充填している。上部には炉壁片と炉底滓が見られ、炉内部の大きさは基底部で長さ50cm、幅25cmほどに復元される。両側の排滓壙は鉄滓、炉壁が含まれるが、上部には花崗岩角礫が多数含まれていた。角礫には焼けた痕跡はなく、操業停止後、埋没過程で混入したと考えられる。

1a. 黒褐色土　均質で粘性有る。下半にしたがい斜移の変化。下面は凹凸著しい。焼土、土器片少量含む。
1b. 黒褐色土　均質で粘性有る。植物性泥か。
2b. 茶褐色土　均質で粘性有る。炭化物小粒を わずかに含む。やや明るい色調。黄色土ブロック少量含む。
3c. 黄褐色土　地山2次堆積。壁面が崩落堆積したもの。
3d. 茶褐色土混褐に黄色、黄灰が量含む。炭化物もわずかにみる。
3e. 黄褐色土　地山2次堆積。壁面崩落したもの。
3f. 暗褐色土　2b,2d層に類似するがやや粘性強い。黄灰・地土・炉壁・炭化物をまばらに含む。
　赤分多く焼還元べとつく。
2g. 暗褐色黄灰層　黄灰・地土・炭化物を多く含む。しまっている。
　炭化物は本層の上半部と下半部に2ヶ多く集中する。排滓場内間土
2h. 暗褐色粘質土　黄灰・地土・炭化物を多く含む。よくしまっている。排滓場内間土
2i. 暗灰～黒灰色土　炭化物・灰・焼土小片を多量に含む。軟く締まる。排滓場内間土
2j. 茶褐色粘質土　均質で軟くしまる。下半部に焼土・黒褐小片を含む。一部入土か？　排滓場内間土
2k. 暗灰～黒灰色土　炭化物・灰・焼土小片を多量に含む。軟く締まる。3層に類似する。　炉底部内間土
2l. 暗灰～黒灰色土　炭化物・灰・焼土小片を多量に含む。軟く締まる。　炉底部内間土
3m. 淡青灰色礫粘層　カニ石礫混在。軟く、コンクリート状をなす。石質とはっず離れる。2～3cm厚。
　基底面
2n. 黄灰色礫粘層　カニ石礫混在。軟く、コンクリート状をなす。下層とは凝着するが分離はせ。
4a～6d層ともに粒子細かく、細砂～シルト質土を主体とする（赤成熟土か）長石含む。　基底部
3a. 茶褐色土　黄色土ブロック多く含む。やや汚れた感じ。
　粘性あり、上部片含む。
3b. 黄褐色土　粘性強。地山土2次。
3c. 暗褐色土　粘性あり。黄色土ブロック、黒色土含む。
　汚れた感じ。
3d. 茶褐色土　黄色土ブロック含む。粘性有り。
3e. 暗褐色土　黄色土ブロック、黒色土ブロック多く含む。
　やや鹿様気味。
4a. 黒褐色土　粘性あり。上下部は黒色土。過下部は黄褐色土。
　分析に鹿様すむ。下面は明瞭区分。植物生痕あり。
4b. 黄褐色土　粘性あり。地山2次。明瞭区分。
4c. 黒褐色土　黄褐色土。黒色土が薄層状堆積。面目状。
　下面は凹凸著しい。炭化物片多量含む。
4d. 黄褐色土　粘性あり。明瞭区分。地山2次。
4e. 黒褐色土　粘性あり。明瞭区分。層理状をなす。
　とこでいる。
5a. 黄褐色土　黒色土ブロック含む。全体に層理状をみる。
　粉質土をはさむ。
5b. 暗～黒褐色土　粘性あり。茶褐色土と黒褐色の層理状。
　下面フラット明瞭。
5c. 黄褐色土　黒色土のレンズ状堆積をはさむ。粘性あり。
　炭化物行含む。
5d. 暗褐色土　粘性強くべとつく。黒色土含む。
6. 黒色土　炭化物・長石。地土片含む。
7a. 茶褐色粘土　植物遺存部の粘質化。べとつく。
　右成層→比重小。
7b. 黄灰色粉質土　グライ化　赤成作用によるもの。

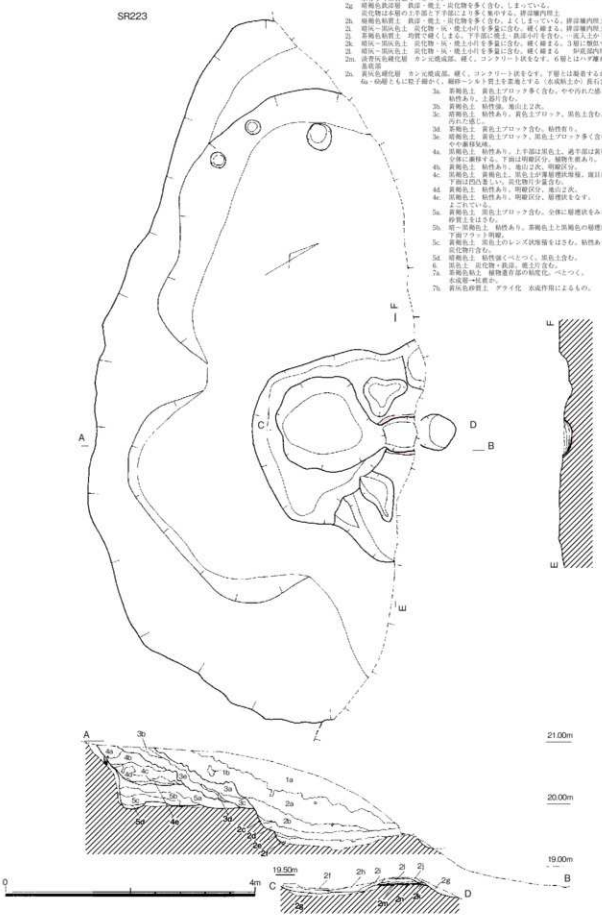


Fig.43　精錬炉3（1/60）

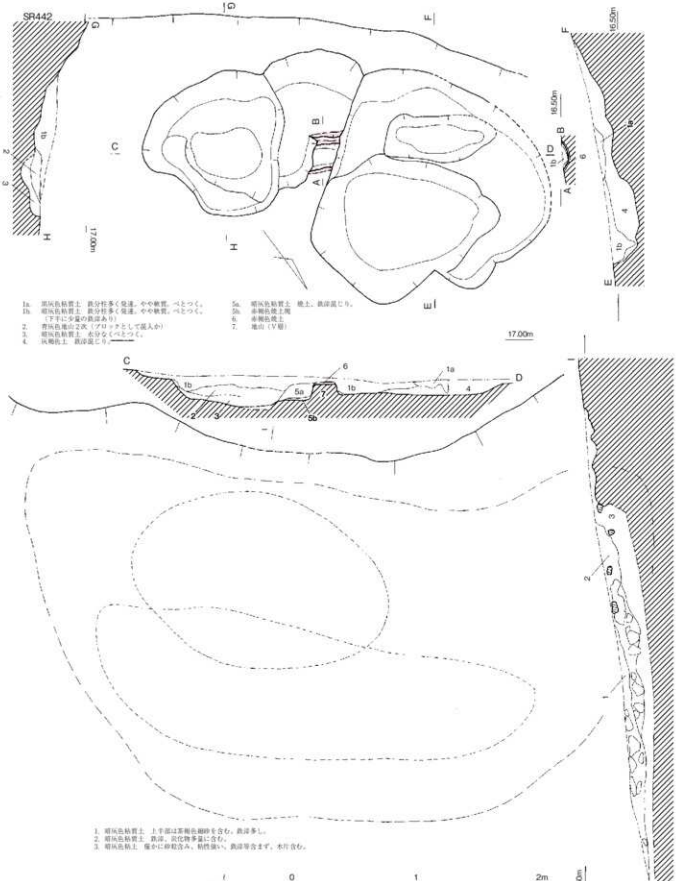


Fig.44 精錬炉4 (1/30)

排滓壙から谷部斜面に向けて掻き出しによる溝状の遺構が形成されている。周囲の平坦面から西側の中央谷部 SX100 にかけての斜面に鉄滓、炉壁片、炭化物などが、南北 5 m、東西 4 m の範囲に点在している。しかしその量は多くない。また輔座に関わる遺構などは検出できていない。主に排滓壙から土師器が出土した（Fig.74 － 37・39）。土師器には 37 の高坏、39 の甕がある。

SR268（Fig.42）

BC18 グリットで検出した精錬炉の一部である。東側斜面上部に造成された壇状遺構上で検出した。検出面は標高 30.3 ～ 30.6m である。北側はみかん園造成に関わる削平で大きく破壊され、2m 以上の崖となっている。炉に伴う排滓壙の一部を検出したものである。「鉄アレイ」形の製鉄（精錬）炉の一部と考えている。造成は斜面側を 0.3m ほど掘削して造成し、幅（東西）約 5m、奥行（南北）2.5m 以上の平坦面を設けている。排滓壙はそのほぼ中央にある。炉体の主軸方向は不明である。残存する排滓壙の規模は長さ 0.6m、幅 1.5m である。排滓壙内には鉄滓と炉壁が含まれる。周囲の平坦面から北側の旧地形を残す斜面に鉄滓、炉壁片、炭化物などが、広範囲に点在している。しかしその量は多くない。

SR376（Fig.42）

L13 グリットで検出した精錬炉である。東側斜面下部に造成された壇状遺構上である。検出面は標高 17.4 ～ 17.6m である。形態は炉の両側に排滓壙をもつ、いわゆる「鉄アレイ」形の製鉄（精錬）炉である。残存する遺構の規模は排滓壙を含めた全長が約 4.9 m であり、炉の長軸方向は N-16° -W をとる。炉の掘方は 110 × 50cm である。炉形態は箱形炉と見られる。全体に削平が著しく、基底部が僅かに残されていた。炉底には深さ 10cm の掘方があり、下部に炭層が充填している。上部には炉壁片と炉底滓が見られ、炉内部の大きさは基底部で長さ 80cm、幅 30cm ほどに復元される。両側の排滓壙は鉄滓、炉壁が含まれるが、北側の排滓壙から谷部斜面に向けて掻き出しによる溝状の遺構が形成されている。周囲の平坦面から西側の中央谷部 SX100 にかけての斜面に鉄滓、炉壁片、炭化物などが僅かに点在している。その量は少ない。

SR442（Fig.42）

O15 グリットの第 3 面で検出した精錬炉である。東側斜面下部に造成された壇状遺構上で検出した。検出面は標高 16.2 ～ 17.2m である。形態は炉の両側に排滓壙をもつ、いわゆる「鉄アレイ」形の製鉄（精錬）炉である。中央流路 SD404 の覆土上面を造成、整地してこの精錬炉を構築したと考えられる。造成は斜面側の地山Ⅴ層を 0.3m ほど掘削して造成し、幅（東西）約 10m、奥行（南北）約 5m の平坦面を設けたものであり、炉はその中央に主軸を谷に対して並行方向に設定している。残存する遺構の規模は排滓壙を含めた全長が約 6.6m であり、炉の長軸方向は N-54° -W をとる。炉の掘方は 50 × 40cm と小さい。炉形態は箱形炉と見られる。炉底には深さ 10cm の掘方があり、下部に炭層、上位に青灰色硬化層が充填している。炉内部の大きさは基底部で長さ 50cm、幅 25cm ほどに復元される。両側の排滓壙は鉄滓、炉壁が含まれる。排滓壙は大きく 2 回のくぼみが形成されている。周囲の平坦面から北東側の中央谷部 SX404 にかけての斜面に鉄滓、炉壁片、炭化物などが、南北 9 m、東西 11 m の範囲に分布している。また周辺にも広範囲に分布する。特に集中する精錬炉北東側の縦方向の断面を見ると大きく 2 枚の鉄滓、炉壁層に区分される。排滓壙の形態と合わせてみるなら少なくとも 2 回の操業があったと考えられる。本遺構の鉄滓、炉壁の量は他の精錬炉に比べてやや多い。

3）鍛冶炉

本遺跡では 3、4 面において 44 基の製鉄（鍛冶）炉もしくはその関連遺構を検出した。炉は調査

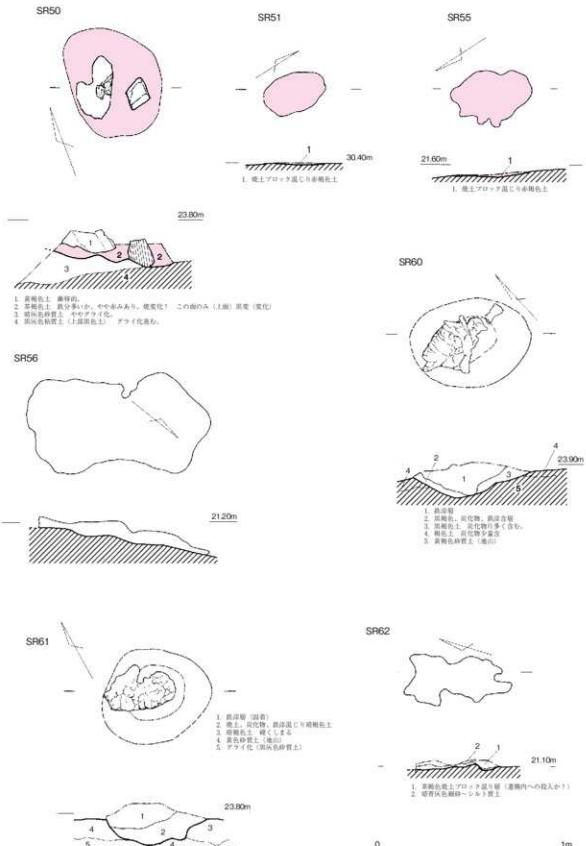


Fig.45　鍛冶炉1（1/20）

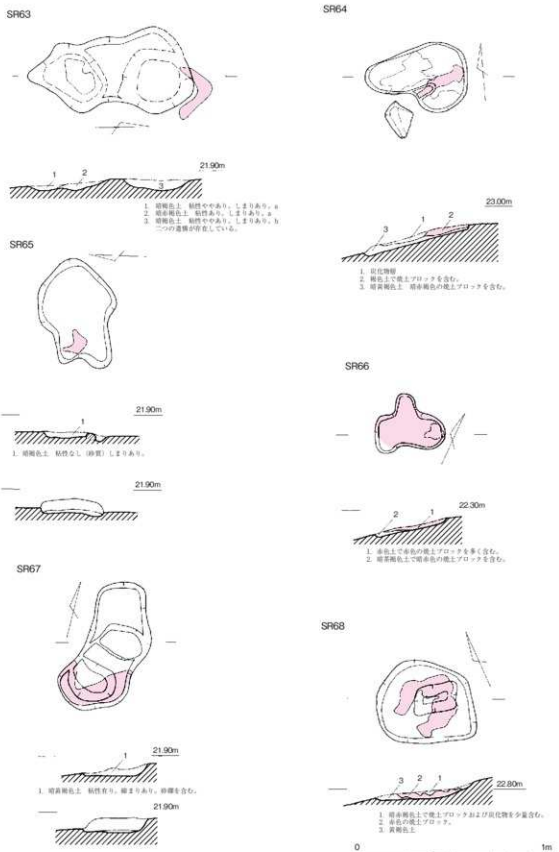


Fig.46　鍛冶炉2（1/20）

区のほぼ全域に分布するが、その中でも谷部の中央付近F・G15～17グリットの東斜面下段の堆造成面第3面に約半数が集中している。この付近は下位の第4面では多数の建物が配置している。しかしこの第3面では建物はなく、精錬炉SR59と共に多数の鍛冶炉など製鉄関連遺構が集中しており、大きく様相を異にしている。なお、この第3面の鍛冶炉は遺構の多くが炉底面まで壊され、土壌内に鉄滓と焼土、炭化物片などが散在し、僅かに被熱を受けた地山などが残る保存が悪い状況であった。これは鍛冶製鉄操業後に炉底部まで破壊する行為があったことを予測させた。第3面検出時において、今回遺構として取り上げたもの以外にも多くの炉底滓や焼土片、炭化物等が広範囲に散在しており、僅かな焼土が分布する部分も多く認められ、より多くの炉底部の存在が予測できたが、調査時点で遺構として把握できたものは僅かに過ぎない。本来はこの部分により多くの（おそらく倍以上の）鍛冶炉が存在していたと考えられた。これ以外にはH・I17グリットやI・J15グリットの第4面に数基の鍛冶炉が集中している。これらは第4面の検出であり、破壊されず炉底塊などもそのまま残されたものが多い。このように第3面と第4面では鍛冶炉の遺存状況に決定的な差異が認められる。鍛冶炉は何れも平面楕円形で小型丸底の椀形を呈し、保存の良い複数の例で見ると長軸の一方向に送風管（羽口）が取り付く形態と考えられる。以下では検出した鍛冶炉のうち形態や形状が比較的明瞭な約8割にあたる36基について報告する。

SR50

F16グリットにある。東斜面下段の第3面の堆造成面上で検出した。検出面は標高23.7 mである。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。底面には凹凸があり、二次的に壊されたと見られる。規模は0.6×0.5 m、深さ0.1 mである。炭化物、焼土塊、角礫が含まれ、鉄分沈着がある。

SR51

B18グリットにある。精錬炉SR268の後背部の東斜面上段の堆造成面SX202上で検出した。検出面は標高30.4 mである。平面は楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は0.32×0.2 m、深さ0.05 mであり、床面は浅い皿状を呈する。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR55

H17グリットにある。西斜面下段の第3面の堆造成面上で検出した。検出面の標高21.5～21.6 mである。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は0.4×0.3 m、深さ0.05 mであり、床面にやや傾斜がある。底面は全体に被熱を受け変色している。炉を中心に径約1mの範囲は焼土、炭化物が多く見られ、やや灰色気味に変色している。覆土中に炭化物、焼土、鉄分沈着がある。

SR56

I17グリットにある。西斜面下段の第3面の堆造成面上で検出した。検出面は標高21.0～21.2mである。平面は中央がやや括れる不整な瓢箪形を呈し、浅い皿状の掘り込みがある。規模は0.45×0.4m、深さ0.1mであり、床面に傾斜がある。覆土中に炭化物、焼土、土師器片がある。土器片にも被熱痕跡がある。掘り込み内からは土師器が出土した（Fig.73－1）。土師器は1の甕がある。

SR60

G19グリットの西斜面下段の堆造成面上で検出した。検出面は標高23.9 mである。平面は不整楕円形であり、皿状の掘り込みがある。規模は東西0.65、南北0.5 m、深さ0.2 mであり、中央に炉底塊が残存している。炉底塊の上面には溶解流動の縞文があり、主に中央から北側に流れている。羽口の装着は炉の南側から行われたと考えられる。覆土中に炭化物、焼土が含まれ、炉の周辺にも炭化物が広がり鉄分沈着による変色部がある。

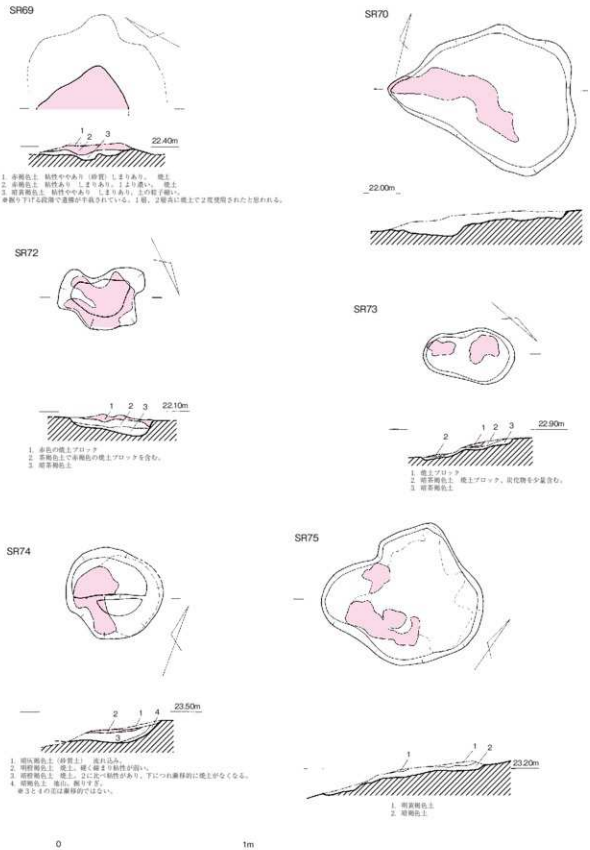


Fig.47　鍛冶炉3（1/20）

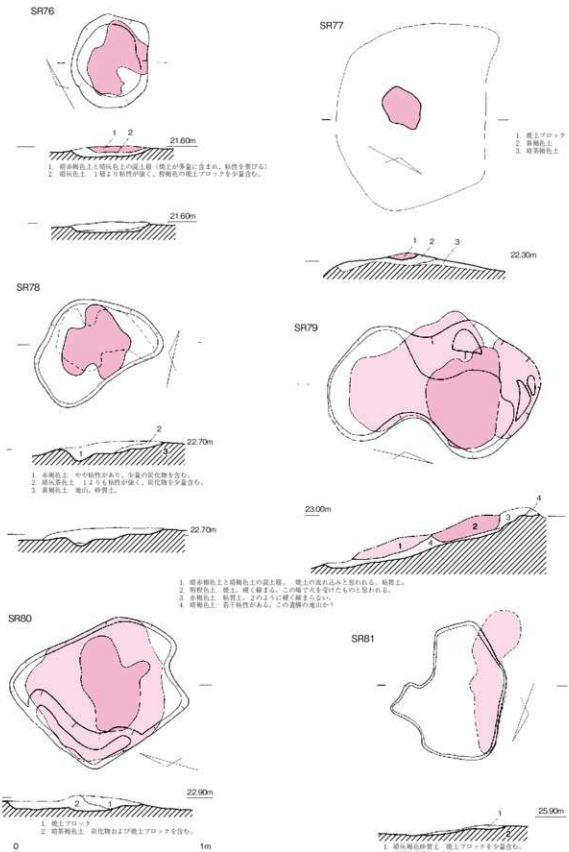


Fig.48　鍛冶炉4（1/20）

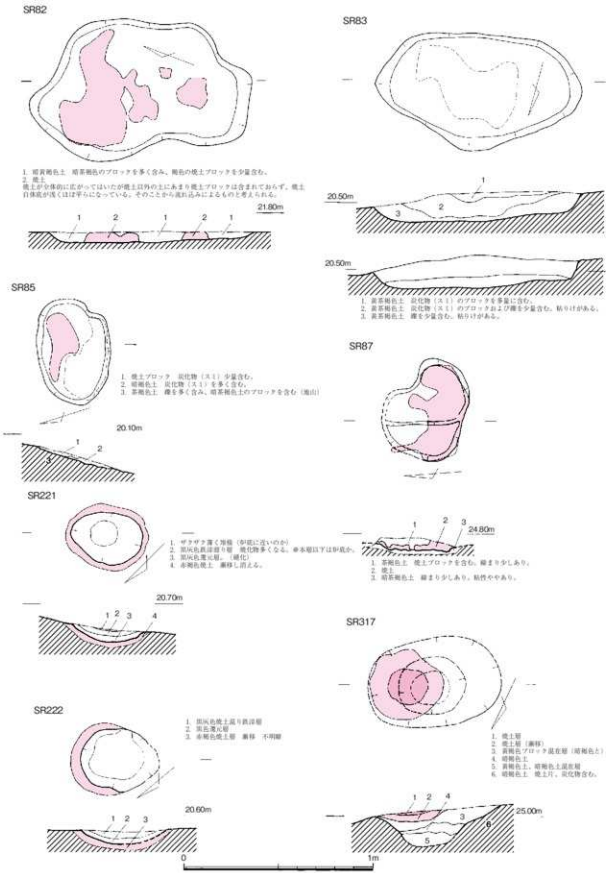


Fig.49　鍛冶炉5（1/20）

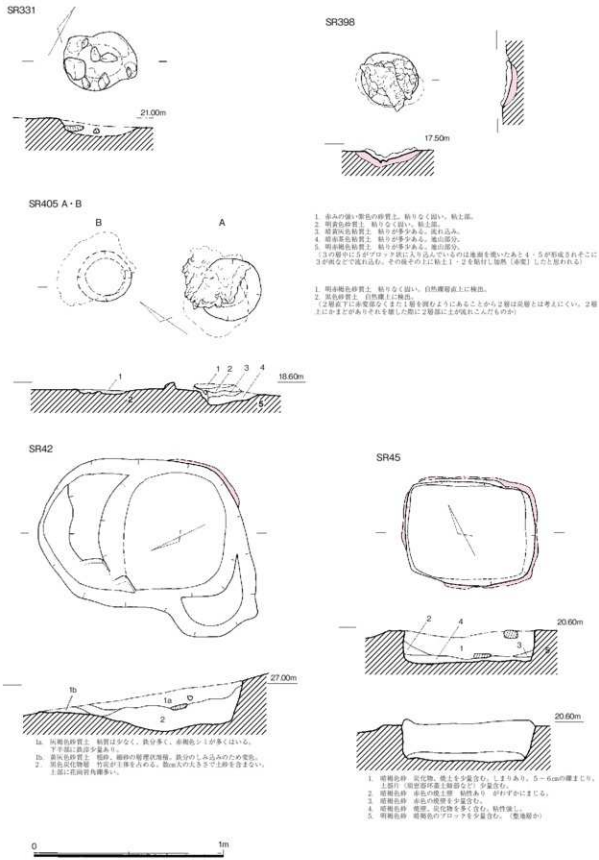


Fig.50　鍛冶炉6、焼土壙1（1/20）

SR61

G19 グリットの西斜面下段の墳造成面上で検出した。検出面は標高 23.8 mである。平面は不整楕円形であり、皿状の掘り込みがある。規模は東西 0.6、南北 0.5 m、深さ 0.25m あり、中央に炉底塊が固く凝着して残る。炉底塊の上面には溶解流動の縞文があり、主に中央から周辺に流れている。ただし数カ所に炉底塊を壊した部分がある。覆土中や周辺に炭化物、焼土が含まれる。

SR62

G17 グリットにある。中央谷部第 3 面に造られた陸橋 SX187 の上面で東斜面側に検出した。検出面は標高 21.1 mである。平面は不整楕円形であり、中央がやや窪む甕箪型を呈する。浅い皿状の掘り込みがある。規模は 0.9 × 0.5 m、深さ 0.1 mである。覆土中に炭化物、焼土、少量の須恵器が出土した（Fig.73 － 4）。4 は坏蓋である。この須恵器はⅦ期であり、8 世紀第 1 四半期か。

SR63

F16 グリットにある。東斜面下段の第 3 面の墳造成面上で検出した。検出面は標高は 21.8 ～ 21.9 mである。平面は不整楕円形であり、中央がやや窪む甕箪型を呈する。浅い皿状の掘り込みがあり床面が傾斜する。規模は 0.55 × 0.4 m、深さ 0.05 mである。炭化物、焼土などがある。

SR64

F16 グリットにある。東斜面下段の第 3 面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 22.8 ～ 22.9 mである。平面は不整楕円形であり、中央がやや窪む甕箪型を呈する。浅い皿状の掘り込みがある。窪みの部位外方に角礫があり、送風管固定に関わるものか。規模は 0.55 × 0.4 m、深さ 0.05 mであり、床面に傾斜がある。覆土中に炭化物、焼土などがある。

SR65

F16 グリットにある。東斜面下段の第 3 面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 21.8 mである。平面は不整楕円形であり、長軸方向に窪みがある。浅い皿状の掘り込みがある。規模は 0.6 × 0.4 m、深さ 0.1 mであり、床面に傾斜がある。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR66

F16 グリットにある。東斜面下段の第 3 面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 22.2 mである。平面は不整楕円形であり、長軸方向の一方に突出部がある。浅い皿状の掘り込みがある。規模は 0.4 × 0.3 m、深さ 0.05 mであり、床面に傾斜がある。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR67

F16 グリットにある。東斜面下段の第 3 面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 21.8 ～ 21.9m である。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがあり、さらに 2 カ所に窪みがある。規模は 0.7 × 0.3m、深さ 0.1m である。覆土中に炭化物、焼土、少量の須恵器が出土した（Fig.73 － 5）。5 は坏身底部である。この須恵器はⅥ期であり、7 世紀第 4 四半期か。

SR68

F16 グリットにある。東斜面下段の第 3 面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 22.8 mである。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。底面に馬蹄形の焼土が形成される。規模は 0.5 × 0.45m、深さ 0.1m である。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR69

F16 グリットにある。東斜面下段の第 3 面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 22.4m である。調査中の不注意で西半分を欠損してしまう。平面は不整円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は径約 0.8m、深さ 0.1m である。覆土中に 2 枚の焼土面が確認される。炭化物、焼土が含まれる。

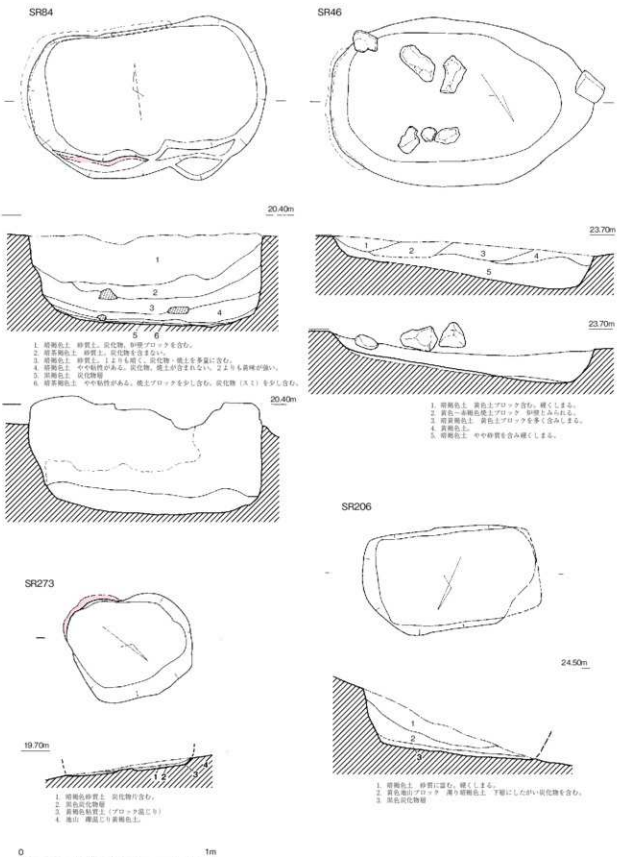
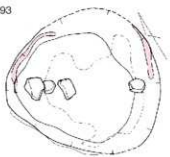


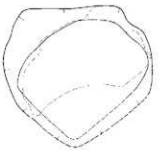
Fig.51　焼土壙2（1/20）

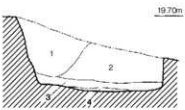
SR293

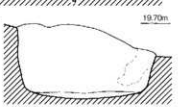


1. 茶褐色粘質土　ややしまりが悪い。黄色ブロックをかなり含み、10cm大の礫岩質礫を含む。
2a. 暗褐色粘質土　1主3の褐種。しまり良し。赤色ブロックが見つかるほか、地山ブロックをわずかに含む。
2b. 黒色粘質土（炭層）　粘質は全体的に強いが炭化物の粘質土のため弱い。地山との境面には赤色のブロックおよび焼土がライン状に存在する。

SR318





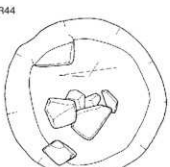


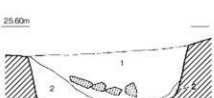
1. 黒色粘質土　青灰色の粘質土を所々に含む。所々に1cm程度の炭化物を含む。下層と比較して粘りはやない。流れ込み土。
2. 黒色粘質土　茶褐色の焼土と思われる土を所々に含む。流れ込み土。
3. 黒色粘質土　炭化物（1～3cm）を多く含み粘りが強い。焼土層に伴う層。
4. 暗茶褐色砂質土　焼土と思われる。焼土層に伴う層。

SR274

1. 茶褐色土　炭化物ほぼなし。
2. 暗～茶褐色土　炭化物多く含む。
3. 炭化物層（1 cm前後）
4. 地山　茶褐色礫混じり土。

SR44





1. 暗褐色土層　締まり、粘性有り、混入物なし。
2. 暗茶褐色土層　締まり、粘性有り、混入物なし。

Fig.52　焼土壙3（1/20）

SR70

F16 グリットにある。東斜面下段の第３面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 21.8 ～ 21.9m である。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。細く延びる西側床面が一段下がる。規模は 1.0 × 0.7m、深さ 0.1m である。覆土中には炭化物、焼土、土器片がある。

SR72

F16 グリットにある。東斜面下段の第３面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 22.1m である。平面は不整楕円形であり、長軸方向に僅かに抉れがある。浅い皿状の掘り込みがある。規模は 0.45 × 0.3m、深さ 0.1m であり、床面に焼土が形成されている。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR73

F15 グリットにある。東斜面下段の第３面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 22.8 ～ 22.9m である。平面は不整楕円形であり、長軸両側が僅かに窪み、瓢箪形を呈する。浅い皿状の掘り込みがある。規模は 0.45 × 0.4m、深さ 0.1m であり、床面２カ所に焼土ブロックがある。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR74

F15 グリットにある。東斜面下段の第３面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 23.4m である。平面は不整円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は径約 0.5m、深さ 0.1m であり、床面上に焼土層が２枚形成される。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR75

G15 グリットにある。東斜面下段の第３面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 23.1 ～ 23.3m である。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。床面は凹凸が著しい。規模は 0.85 × 0.75m、深さ 0.1m である。床面中央部が焼けて西側に大きく固い焼土ブロックを形成する。炉壁状の構造があったか。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR76

F16 グリットにある。東斜面下段の第３面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 21.6m である。平面は不整円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は 0.5 × 0.4m、深さ 0.1m であり、床面は平坦で床面には厚さ 1cm ほどの炭化物層が形成され、その上位に焼土層が形成される。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR77

I14 グリットにある。東斜面下段の墳造成面上で検出した。検出面は標高 22.7 mである。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は 1.0 × 0.8 m、深さ 0.1 mであり、床面全体が変色するが中央に 0.25 × 0.2m の焼土ブロックが形成される。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR78

G15 グリットにある。東斜面下段の墳造成面上で検出した。検出面は標高 22.7m である。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は 0.7 × 0.5m、深さ 0.1m であり、中央に 0.5 × 0.3m の焼土ブロックが形成される。焼土ブロックは長軸方向に中央が凹み、分銅形を呈する。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR79

G15 グリットにある。東斜面下段の第３面の墳造成面上で検出した。検出面は標高 22.7 ～ 23.0m である。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は 1.15 × 0.8m、深さ 0.1m であり、長軸方向の両側が窪み、瓢箪形を呈する。床面に傾斜がある。中央付近に厚さ 10cm の固い焼土層が

形成される。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR80

G15 グリットにある。東斜面下段の壇造成面上で検出した。検出面は標高 22.9m である。平面は不整方形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は 0.8 × 0.7m、深さ 0.1m であり、中央に 0.5 × 0.3m の焼土ブロックが形成される。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR81

G16 グリットにある。東斜面下段の第 3 面の壇造成面上で検出した。検出面は標高 22.0 ～ 22.1m である。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は 0.7 × 0.6m、深さ 0.05m であり、床面に僅かに傾斜がある。覆土中に炭化物、焼土、少量の須恵器が出土した（Fig.73 － 8）。8 は坏蓋である。この須恵器は V 期であり、7 世紀第 3 四半期か。

SR82

G16 グリットにある。東斜面下段の第 3 面の壇造成面上で検出した。検出面は標高 21.7m である。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は 1.15 × 0.7m、深さ 0.1m であり、床面は平坦である。床面上の北側に偏り焼土ブロックが形成される。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR83

I15 グリットにある。東斜面下段の壇造成面上で SR84 と隣接して検出した。検出面は標高 20.5m である。平面は不整楕円形であり、皿状の掘り込みがある。規模は 1.1 × 0.6m、深さ 0.15m であり、床面は平坦である。覆土中に炭化物、焼土、少量の須恵器、土師器が出土した（Fig.73 － 9 ～ 11、13）。9･10 は坏蓋、11 は坏身、13 は甕である。須恵器は Ⅳ b ～ V 期であり、7 世紀第 2 ～ 3 四半期か。なお、本遺構と焼土坑 SR84 にかけてやや多くの須恵器、土師器類が出土している（Fig.74 － 14 ～ 20）。須恵器には 14 ～ 20 の坏類がある。須恵器は V 期主体であり、7 世紀第 3 四半期か。

SR85

I15 グリットにある。東斜面下段の壇造成面上で検出した。検出面は標高 19.9 ～ 20.1m である。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は 0.6 × 0.35m、深さ 0.05m であり、床面に傾斜がある。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR87

G15 グリットにある。東斜面下段の第 3 面の壇造成面上で検出した。検出面は標高 22.8m である。平面は不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。長軸の片側に 2 カ所の抉れがある。規模は 0.55 × 0.3m、深さ 0.1m であり、床面に焼土ブロックが形成される。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR221

J15 グリットにある。東斜面下段の壇造成面上で検出した。基盤である V 層に掘り込まれている。検出面の標高 20.6m である。平面は楕円形であり、皿状の掘り込みがある。規模は 0.4 × 0.3m、深さ 0.1m であり、床面にやや傾斜がある。保存状況は良好で掘方最下部は黒灰色還元層で、硬化著しい。その下の地山上部は焼土化している。また還元層の上には焼土、鉄滓小片、炭化物を含む砂質土であり、炉底部をなすと考えられる。覆土中に炭化物、焼土、鉄滓がある。本遺構は長軸で半裁して取り上げ保存している。

SR222

J15 グリットにある。東斜面下段の壇造成面上で検出した。基盤である V 層に掘り込まれている。検出面の標高 22.5m である。平面は不整楕円形であり、皿状の掘り込みがある。南側は建物柱穴により切られる。規模は 0.45 × 0.35m、深さ 0.1m である。断面構造は SR221 と共通する。覆土中に

炭化物、焼土、鉄滓がある。

SR317

H19 グリットにある。西斜面下段の壇造成面上で検出した。検出面の標高 25.0m である。平面は不整楕円形であり、皿状の掘り込みがある。規模は 0.7 × 0.45m、深さ 0.2m であり、掘方上部東側に径約 0.35m の焼土層が形成される。下位掘方との切り合いの可能性もあり、別遺構となることもありうる。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR331

H17 グリットにある。西斜面下段の第 4 面の壇造成面上の礫堆上面で検出した。検出面の標高 21.0m である。平面は不整楕円形であり、底面は判然としないが皿状の掘り込みが予測される。規模は 0.4 × 0.3m、深さ 0.15m である。上半部には焼土、炭化物があり、被熱している礫堆起源の円礫がある。覆土中に炭化物、焼土がある。

SR398

N13 グリットにある。東斜面下段で検出した。検出面は標高 17.5m である。平面は不整楕円形であり、皿状の掘り込みがある。規模は 0.35 × 0.3m、深さ 0.1m である。地山焼土層の上に炉底塊が残されている。炉底塊の表面には長軸方向に溶解時の流動痕跡があり、送風方向は直交方向と見られる。覆土中に炭化物、焼土、鉄滓がある。

SR405

O10 グリットにある。東斜面下段の壇造成面上で検出した。基盤の礫混じり黄褐色粘土層（Ⅵ層）上面である。略南北に隣接して 2 基の炉跡があり、北側を SR405A、南側を SR405B とした。これらは SB156 の建物範囲内で検出したが、共伴や先後関係は不明である。両者の検出面の標高 18.6m である。SR405A は平面が不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は 0.5 × 0.3m、深さ 0.1m であり、焼土層の上に炉底塊がある。覆土中に炭化物、焼土がある。SR405B は平面が不整楕円形であり、浅い皿状の掘り込みがある。規模は 0.35 × 0.35m、深さ 0.05m であり、基盤の被熱による焼土部分がある。覆土中に炭化物、焼土がある。

4）焼土壙

本遺跡では 10 基の焼土壙を検出した。炭焼き窯の一形態と考えられる。本遺跡例は平面形態が隅丸長方形や楕円形の小型が主であり、古代に出現、増加する大型の隅丸三角形の形態はない。分布状況は、J15 グリットに 3 基が集中するが、ほかは集中する地区もなく、各所に点在している。

SR42

G21 グリットにある。西斜面中段の壇造成面上で検出した。検出面は標高 26.9m にある。平面は楕円形であり、主軸は N-25° -W である。規模は長さ 1.1m、幅 0.8m、深さ 0.2m である。上部は削平を受けている。床面は二段掘りとなり、地形は緩斜面であるが、床面は平坦となる。土壙奥壁面は赤変する。覆土には炭化物、鉄滓が混じる。

SR44

F19 グリットにある。溝 SD41 覆土上部の北斜面に設けられている。検出面は標高 25.5m にある。平面は円形である。径約 0.85m、深さ 0.25m である。上部は削平を受けている。床面は平坦である。覆土には礫、炭化物が多く含まれる。

SR45

I15 グリットにある。東斜面中段の壇造成面上で検出した。検出面は標高 20.6m である。平面は隅

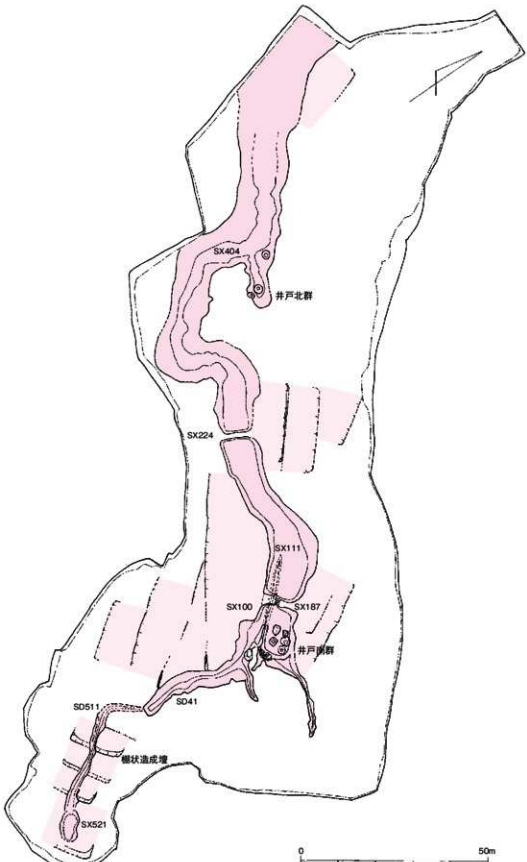


Fig.53　18 次大型遺構配置図（1/1000）

丸長方形である。主軸はN-63° -Wで、長さ0.7m、幅0.55m、深さ0.2mである。上部は削平を受けている。床面はほぼ平坦である。土壙壁面は赤変し、厚さ2～4cmの焼土が形成されている。埋土下部に焼土、炭化物が多く分布する。

SR46

F16グリットにある。鍛冶炉SR50の東側にある。東斜面下段の堆積成面上で検出した。検出面は標高23.6～23.7mである。平面は隅丸長方形に近いが、斜面下方側がやや尖り気味となる。斜面下方を焚き口とする隅丸三角形窯との近似がある。主軸はN-56° -Wで、長さ1.4m、幅0.9mで、深さ0.2mである。上部は削平を受けている。床面は地形に沿って約9°の傾斜がある。土壙奥壁面は赤変し、埋土下部に焼土、炭化物、角礫が多く含まれる。

SR84

I15グリットにある。東斜面下段の堆積成面上で検出した。検出面は標高20.3mである。平面は隅丸長方形を呈する。主軸はN-89° -Eで、長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.5mである。上部は削平を受けるが、比較的保存状況はよい。床面はほぼ平坦である。土壙壁面は赤変しているが、一部に2面の焼土層があり、粘土を貼り再利用していると見られた。床面には炭化物層が形成され、覆土中からは焼土、炭化物、須恵器・土師器片が多く分布する。(Fig.73－12、74－21～24)。須恵器には21の椀、22の壺蓋、23の壺高台があり、土師器には12の高坏、24の甕がある。須恵器はV～VI期か。

SR206

J12グリットにある。東斜面上段の堆積成面上で検出した。検出面は標高24.0～24.4mである。平面は隅丸長方形を呈する。主軸はN-59° -Eで、長さ0.9m、幅0.55m、深さ0.3mである。上部は削平を受けている。床面は地形に沿って約6°で傾斜する。土壙側壁は一部赤変し、床面に薄い炭化物層が形成されている。

SR273

J15グリットにある。東斜面下段の堆積成面上で検出した。検出面は標高19.6～19.7mにある。平面は不整な隅丸長方形を呈する。長さ0.65m、幅0.55m、深さ0.05mである。上部は著しく削平を受けている。床面は地形に沿って約7°で傾斜する。土壙側壁面は一部赤変し、床面に薄い炭化物層が形成されている。

SR274

J15グリットにある。東斜面下段の堆積成面上で検出した。検出面は標高19.5～19.7mである。平面は不整円形を呈する。径約7.5m、深さ0.25mである。床面は平坦である。土壙壁面は一部赤変し、床面に厚さ1cm前後の炭化物層が形成されている。覆土上部に炭化物と礫が多く分布する。

SR293

J15グリットにある。東斜面下段の堆積成面上で検出した。検出面は標高21.7mである。平面は隅丸正三角形（おむすび形）を呈する。2カ所を建物柱穴に切られる。長さ0.85m、幅0.8m、深さ0.2mである。上部は削平を受けている。床面はほぼ平坦である。土壙壁面は赤変し、床面に厚さ5cm以下の炭化物層が形成されている。覆土上部に礫や炭化物が多く分布する。

SR318

J16グリットにある。西斜面下段の堆積成面上で検出した。検出面は標高19.5～19.7mにある。平面は隅丸長方形を呈するが、一部が崩落し上面観が不整形となっている。長さ0.75m、幅0.75m、深さ0.35mである。上部は削平を受けている。床面は地形に沿って約5°で傾斜する。土壙壁面は赤変し、埋土下部に炭化物が多く分布する。

Fig.54　谷頭石組遺構と井戸南群（1/60）

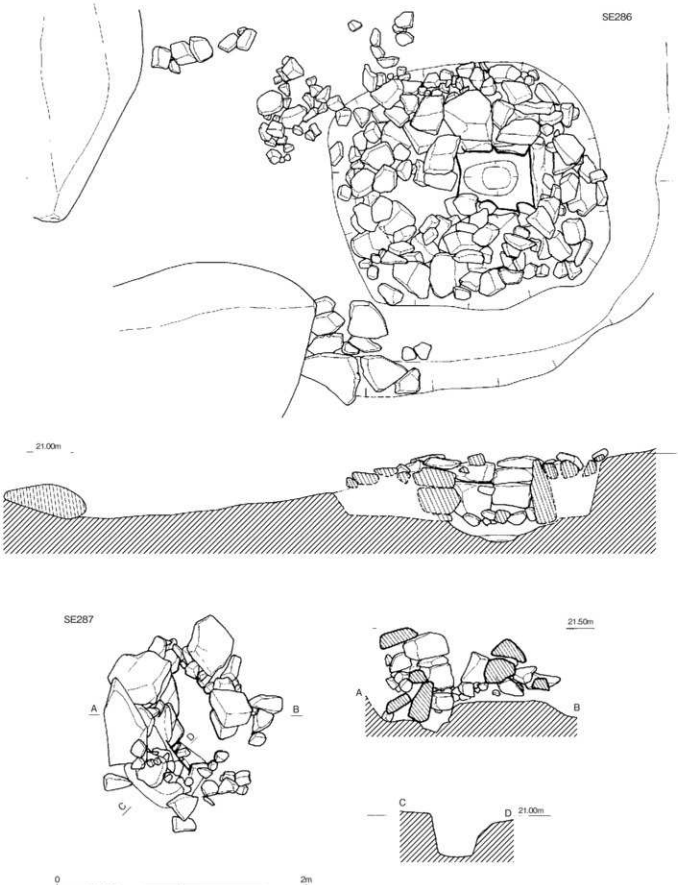


Fig.55 井戸1 (1/30)

5） 井戸

第3、4面において井戸を6基を検出した。これらは3基づつ分かれ、2カ所の谷頭部分に集中して構築されている。まずE18グリットを中心として3基がある。この場所は中央流路SD100の谷頭部分であり、3つの大磐に挟まれ、敷石遺構のある谷頭範囲である。これを井戸南群とする。次にN·O12·13グリットを中心とした3基がある。中央流路SD404から分かれる枝溝に分布し、谷頭を覆い構築される石組遺構SX431、432の直下に構築される。これを井戸北群とする。

（1）井戸南群（Fig.54・55）

SE286

F17·18グリットで検出した石組み井戸である。中心となる流路SX100の谷頭部分にあり、井戸の南側は斜面となり、岩盤となる花崗岩が迫り上がっている。井戸の掘方はこの基盤である花崗岩を刳り貫いて構築されている。検出した標高は20.7～21.0mである。井戸の平面形態は掘方と井筒ともに方形であり、およそ南北方位に沿っている。厳密には掘方の主軸がN-08°-Wで、井筒の主軸がN-03°-Wである。掘方は南北2.3m、東西1.95m、深さ0.5mである。中央部の井筒の直下に0.8m×0.75mの深さ0.1mの掘方と、さらにその中央に南北0.4m、幅0.3m、0.05mの楕円形の掘方がある。この楕円形の掘方は水の汲み上げなどに伴う二次的形成の可能性がある。井筒は全て石組みであり、井戸掘り方内裏込めにも礫を充填している。利用されている礫は角礫、亜角礫であり、基盤岩起源の花崗岩やアプライトなどである。礫間には粗砂が充満しているが、二次的流入も考えられ当初から砂で埋めたかは判断できない。井筒の規模は内法で南北0.6m、幅0.55m、高さ0.5mである。石組みは、谷奥側の南側のみ高さ50cm程度の板石を立て、それを支えるように東西二方面は角礫を積み上げている。最下段は高さ20～30cmの比較的大ぶりの礫が用いられる。それより上部は板状の礫を小口積みしている。水平方向の礫面の目尻は揃っている。西側の壁面はやや迫り出しているが、二次的な崩落によると考えられる。調査段階も井筒内の南側底部から多くの湧水があり、井筒内の湧水を汲み上げて、約30分ほどで満水し、その後は自噴状態となり、北東側の井筒外方へ流出する。井筒内の覆土は黒色砂と灰白色粗砂の互層であり、遺物はほとんど含まれていない。水洗により微細な土師器小片と桃種殻などが出土した。また、井戸上面はさほど破壊されることなく上部に有機質を含む黒色粘質土～泥層が覆い埋没していた。

本井戸の周囲には南側の壁面上部に石垣SX107と大磐1がある。また北側には大磐2、3がある。大磐2、3との間には標高20.5～20.8mの範囲に礫敷きや石組み遺構がある。二次的な移動もあり、井戸上面から礫敷きまではほぼ平坦に連続し、井戸南側標高約21.0mから約8°の傾斜で下がっている。この井戸の北東側に延びる石組み遺構は、先に記した井戸から噴出する水の導水路となっている。このように本井戸は井筒の規模が小さいにも拘わらず、特殊な要素が多く認められる。精査したが、遺構本体に伴う遺物がほとんど無いことから、時期の特定は困難であるが、周辺状況から第4面段階の構築と考えている。

なおこのSE286は、約10m下流に位置する陸橋SX187が構築された、第3面段階には水没し、機能を失ったと考えられる。陸橋SX187中央の礫暗渠SX188は標高約21.7mを基底面としており、この高さが陸橋SX187の構築後、その上流に形成された池状遺構SX111の水面標高に近いと考えられる。この高さで井戸は完全に水面下となる。またこうした水没が井戸SE286の上部被覆土として水成の粘質～泥質土が形成された要因とも考えられる。

SE287

F17·18グリットで検出した石組み井戸である。SE286の東約3mにあり、同様に中心となる流路

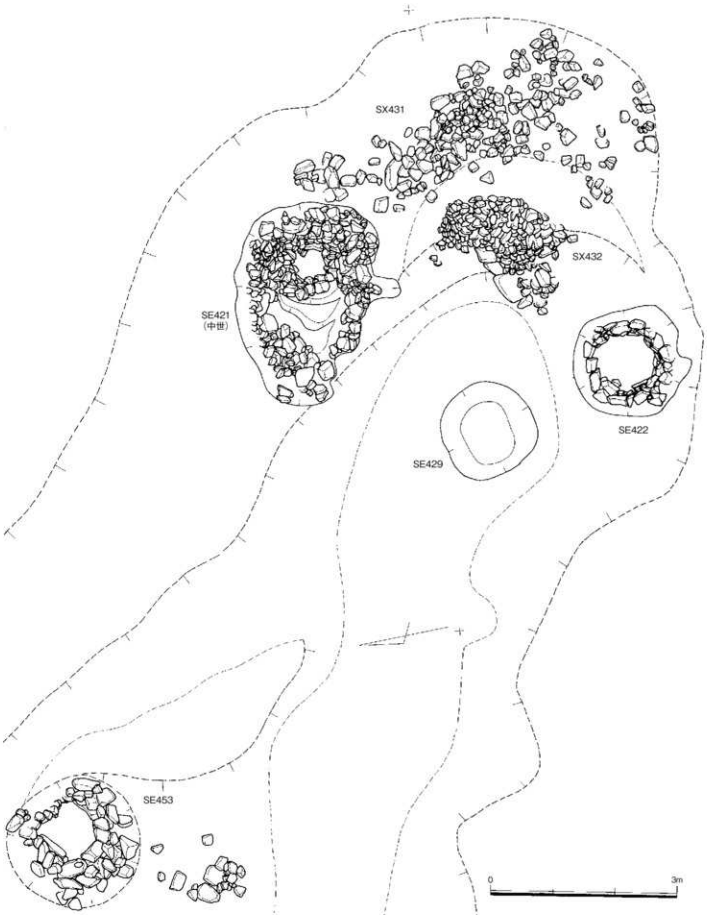


Fig.56　谷頭石組遺構と井戸北群（1/60）

SX100の谷頭部分にあたる。井戸の南～東側は墳状造成面の斜面となり、石敷き状遺構も認められる。検出した標高は21.7～21.5mである。井戸の掘方は有機質を含む黒色粘質土～泥層を掘り抜いているが、土色の類似から掘方の検出は極めて困難であった。井戸の平面形態は掘方と井筒ともに不整楕円形であり、およそ東西方向に沿っている。掘方は南北2m、東西1.5m、深さ0.8mである。中央部の井筒のからやや北側にずれて0.6m×0.5mの深さ0.35mの方形掘方がある。この掘方は基盤の花崗岩を刳り貫いている。井筒は全て石組みであり、掘方内裏込めには礫と周辺堆積物を充填している。利用されている礫は角礫、亜角礫であり、基盤岩起源の花崗岩などである。井筒の規模は内法で南北0.8m、幅0.5m、高さ0.7mである。石組みは、角柱状の礫と板石状の礫を交互に積み上げている。井筒は南北両側から拉げており、また、基底部の掘方ともズレが生じている。これらは本来の井戸の形態が土圧により変形していると考えられた。これは軟弱な堆積土を掘り抜いているためと考えられる。この井戸はSX100内の井戸SE422造営後、それを埋没させた黒褐色有機質の覆土を掘って設けられている。したがって、その構築時期は第4面以降となる。本遺構からは井筒内から須恵器片が出土した(Fig.77－1)。1は坏蓋であり、Ⅳb期とみられるが、本遺構の推定される時期よりもやや古く、混入遺物と考えられる。

SE288

F17グリットで検出した素掘り井戸である。SE286、287の北側にあり、底面は基盤の花崗岩に達している、SX100の谷頭部分の中央平坦面に設けられている。検出した標高は21.5mである。SE287と同様に黒色粘質土を地山としている。井戸の平面形態は隅丸方形であり、規模は東西2.5m、南北2.5m、深さ0.7mである。井筒などは不明である。井戸覆土は灰褐色粘質土であり、SX111下部堆積物と見られる。

（2）井戸北群（Fig.56・57）

SE422

N13グリットで検出した石組み井戸である。中心となる谷SX404から南東に分かれた小支谷の西側斜面に設けられている。検出した標高は14.8～15.5mである。井戸の平面形態は不整円形をなし、基盤の花崗岩を掘り抜いた掘方に石組みの井筒がある。規模は東西1.9m、南北1.8m、深さ0.8mである。井筒部分は直径約1.0mであり、垂直に近い壁面がある。平面は円筒形で、約5段の石組みが残存している。石組みは水平方向の目地が揃っている。井戸の北側は掘方、井筒共に谷部斜面にかかり失われている。上部の約0.3mで大きく漏斗状に広がっている。石組みと掘方の間には一部で砂礫層が認められたが、ほとんどは裏込めを用いずこの壁面に直接積み上げている。遺構内の覆土は下半部が角礫を含む粗砂、シルトの互層である。上半部は暗灰色の砂礫層であり、基盤直上の堆積物と間違えるほど堅く締まっている。覆土中からの遺物は少ないが、土師器甕（Fig.77－2）が出土した。

SE429（Fig.21）

N13グリットで検出した素掘り井戸である。中心となる谷SX404から南東に分かれた小支谷の中央部に設けられている。検出した標高は14.3mである。井戸の平面形態は不整円形をなす。規模は南北1.55m、東西1.5m、深さ0.5mである。底面は基盤の花崗岩に達し、これを刳り抜いている。底面には杭が2本検出されたが、底面から10～15cmしか打ち込まれていない。本井戸に伴うと言うより後の時代により上部から打ち込まれた杭と考えられる。遺構内の覆土は下部に灰色砂層、中～上部は黒色粘質土である。この黒色粘質土はSE422の上部も被覆しており、したがって、この遺構はより後出すると考えられる。

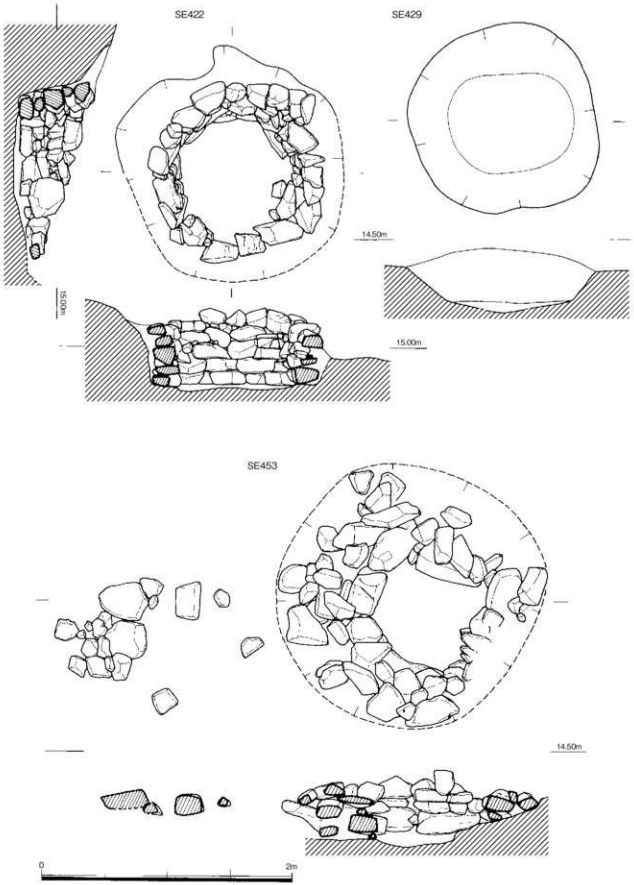


Fig.57 井戸2 (1/30)

Fig.58　石組（集水状）遺構（1/50）

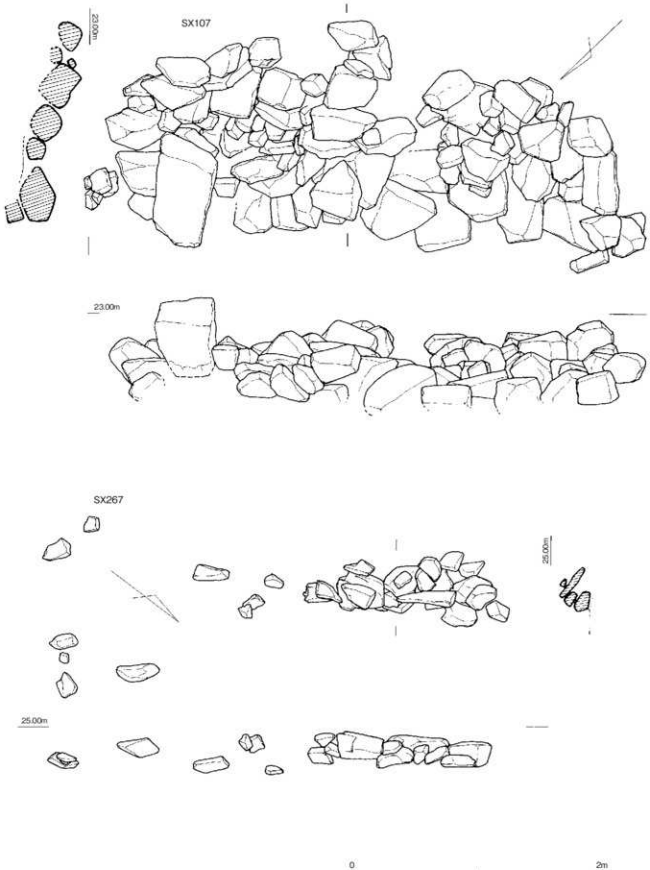


Fig.59　石組（石垣状）遺構1（1/30）

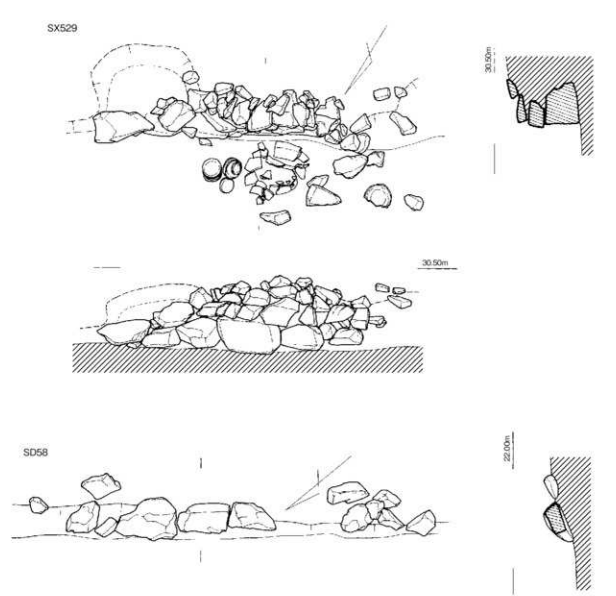


Fig.60　石組（石垣状）遺構２（1/30）

SE453

O12 グリットで検出した石組み井戸である。中心となる谷 SX404 と南東に分かれる小支谷の合流点に設けられている。検出した標高は 14.2 ～ 14.4m である。井戸の平面形態は不整円形を呈し、井戸から南側に向けて石組みの遺構が伴っている。規模は東西 2.1m、南北 2.2m、深さ 0.5m である。中央部に径約 0.6m、深さ 0.1m の掘方をもつ。井筒部分は直径約 0.9m であり、垂直に近い壁面がある。基底部には幅約 0.5m の大きな礫が用いられ、そのため平面形は方形に近い。基底石より上は平たい

石を小口積みしており、水平方向での目地は揃っている。石積みは3～4段残存するが、本来はもう少し高かったと考えられる。掘方はSX404下部覆土の暗褐色砂質土を切っているが、遺構の抽出は困難であった。石組みと掘方の間には礫と砂礫を裏込めとして用いられている。遺構内の覆土は下半部が砂礫層、上部は黒色粘質土である。

6）石組遺構（Fig.58～62）

SX58

I17グリットにある石組み遺構である。区画溝SD58の外周に設けられた石垣状の石組である。溝の掘方に対し、やや滑り落ちた状況であり、本来の位置を動いていると考えられる。基底部にはやや大降りの礫を用いており、本来数段の石垣状を呈していたと考えられる。溝の主軸に沿ってN-40°-Eの方位をもつ。残存する長さは約3mである。

SX107

F18グリットにある石組み遺構である。中央谷部SX100の最奥部斜面に設けられている。石組井戸SE286の上部に位置する。石は花崗岩の角礫もしくは亜角礫であり、長さ1.0m、幅0.4m、厚さ0.3mの大礫を最大とし、主に長辺0.3m以上の礫を利用している。前面の一部に石垣状の面を設けるが他は乱積状に礫を配置している。基盤に沿っておよそ傾斜17°で、規模は幅約4.5m、長さ1.8mである。

SX267

H19グリットにある石組み遺構である。西斜面の堆積成面の下段と中段の境界に設けられている。保存状況は悪いが、花崗岩角礫を用い1～3段の石垣状の石組みが認められる。石組みの方向はN-35°-Wであり、長さ1.5m、高さ0.25mの規模が残されている。調査時点ではこの方位の延長線上にさらに礫の散布があったことから、本来はより長い範囲にこの石組みが存在したと考えられる。

SX511

F・G23・24グリットにある石組み遺構である。調査4区の中央を流下する溝SD511の両岸に設置された護岸の石垣状の石組である。地形の傾斜に沿って約10～12°で下がる。左岸の下流部でN-35°-Wの方位で長さ9.5m、右岸の上流部でN-36°-Wの方位で長さ5mが残されている。何れも基底部に一辺0.3～0.5mの角礫を用い、その上部や裏込めにより小さな礫を用いている。残存する石組みが同軸で直線的であることや、流路の屈曲部分では石組が認められないことから、本来このSD511の両岸に直線的に設けられた石垣状の石組であり、その後の流水の作用で多くが失われたと考えられる。

SX521

E25グリットにある石組みを有する大型土壙である。調査4区の最南端であり、棚状造成壇の五段目からより上流側にかけて拡がる。検出面は標高34.4～36.8mであり、本調査区では最高所に位置する。本遺構が谷部中央の流路SD511の起点となり、僅かながら湧水が認められる。遺構としては谷部中央に掘方を設け、内面に沿って石組み（石垣）を設けているものである。急斜面のため崩落も多く予想され、遺構の残存状況は良好ではない。遺構の平面は略隅丸長方形を呈し、その規模は南北約7m、東西約5m、深さはおよそ0.5mである。床面は地形に沿って傾斜し、北側に向かい約14°で下がる。掘方は長軸の両側が二段掘りとなり、主に一段目の崖際に石組みを設けている。南側は試掘溝で破壊されたが、一段の掘方が予測される。北側は開放しており、長さ0.8mの大礫2個と長さ0.2m以下の礫多数の散乱が認められた。この位置は西側壁が一部直角に折れ曲っている地点に近いことから、本来はこの付近に掘方の北壁、もしくは石組みを有する土手状の施設が存在したと考えられる。

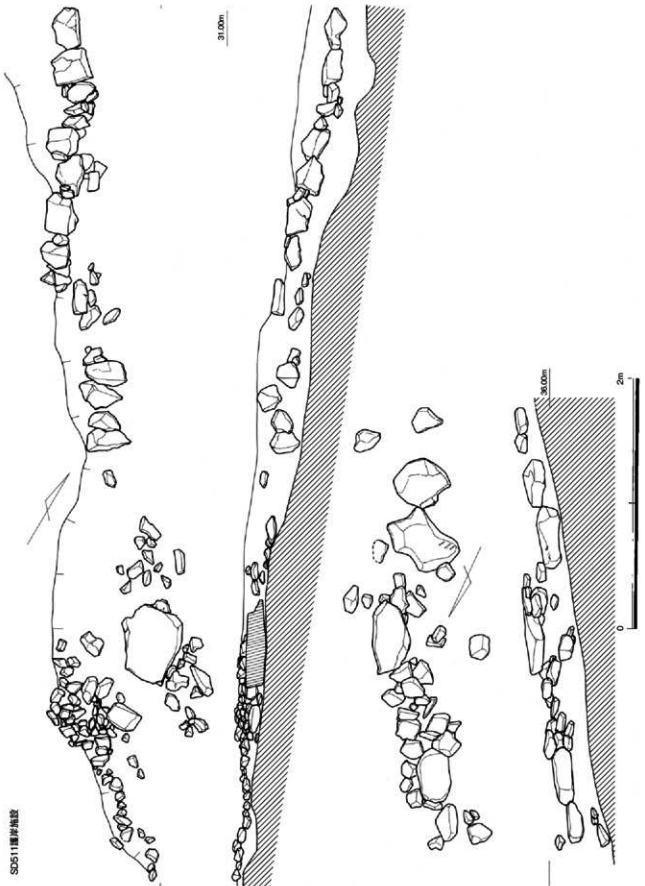


Fig.61　石組（石垣状）遺構3（1/30）

礫はその崩壊により散らばったと考えられる。

本遺構の性格は不明であるが、湧水のある谷部中央に設けられた掘方と護岸の石組み、想定される土手状の施設から見て貯水機能をもつ大型の土壙が想定される。その規模は石組み内部で南北約4.5m、東西約2.5m、深さ0.5～0.8mと考えられる。本遺構内の覆土は黒色の粘質土であり、炭化物、礫、須恵器、土師器などが多数出土した(Fig.75－2～20)。須恵器には2～6の坏蓋、7～14の坏身、15の高坏、16の椀があり、土師器には17～19の椀、20の甕がある。須恵器はⅢb～Ⅳa期であり、6世紀第4四半期～7世紀第1四半期の範疇である。

SX529

G23グリットにある石垣状の石組み遺構である。調査4区の棚状造成壇の1段目と2段目の境界をなしている。石組みは基底部に幅0.3～0.5mの角礫を配置し、その上部により小さな角礫を3～4段積み上げている。基底部から2～3段目まではほぼ垂直である。残存範囲は広くないが、前面基底部の方位はN-59°-Eである。現状規模は幅2.3m、高さ0.6mであるが、本来はさらに高い石垣であったと考えられる。また横方向にはこの石組みの延長戦に地形変換点があり、壇の境界全体に石組みが設けられていたと考えられる。裏込めは造成時の盛土SX518に連続している(Fig.66上段)。この石組みの直下に須恵器、土師器類が一括出土した。石組みに直接伴うものではないが、関連資料としてここに示す。出土状況は石組み基底部の前面0.2m付近にあり、一段目平坦面上に設置されている。須恵器坏類は東側に重ね、土師器甕は西側に据え置かれている。出土した遺物には須恵器、土師器がある(Fig.76)。須恵器には、21～26の蓋坏、27の提瓶、28の坩がある。土師器には、29の甕がある。須恵器はⅢb期であり、6世紀第3～4四半期の範疇である。

礫堆(石敷状遺構)(Fig.62)

E～J15～19グリットの中央谷部SX100の両岸に認められた葺石状、礫敷状、石垣状の礫を利用した遺構を一括している。この遺構は第4面で現れたものであり、第3面で確認されたSX100に設けられた陸橋SX187などを除去した後に現れたものである。SX100の西側では壁面に径0.1～0.2m大の礫が葺石状に構築される。またその壁面上の平坦面に主に拳大以下の礫が敷かれている。その規模は幅約2～3m、長さ約35mの範囲である。また、壁面直下に掘られた溝SD41に沿って数箇所に一辺0.5m前後の角礫を集中配置する場所がある。次にSX100の東側では、延長約30mの範囲で、石組等の痕跡が認められた。まず、壁面上の崖際に一辺0.3m前後の角礫を配置し、石垣状にしている。また、壁面に葺石状に構築する場所もあった。壁面上の平坦面に礫が敷かれる場所は2箇所にあった。この東側壁は全体が盛土で構築されており、各所に崩落や侵食跡、また石組状況のままの地滑り跡等が認められた。こうした状況で当時の地表面の礫による構築物は失われたり、二次的に動いたようである。何れにせよ保存状況は悪い。SX100の底部に流出した礫は東壁下が多い状況であった。このように全体としてSX100の両岸を礫で覆う構築があったと考えられる。その範囲はSX100両側の壇造成が最も顕著な範囲に重なり、旧谷を埋め立て平坦面を広げ、水路として付け替え、中央谷部の壁面を直線的に造成した部位に対応する。

7)陸橋

第3面において、谷部SX100の中央部を横切る陸橋遺構が2つ検出された。谷頭から約15mの位置に最初の陸橋SX187があり、さらに約45m下流に第2の陸橋がある。

SX187

F･G16･17グリットにある礫暗渠SX188を伴う陸橋遺構である。SX100の上流部にあり、谷頭か

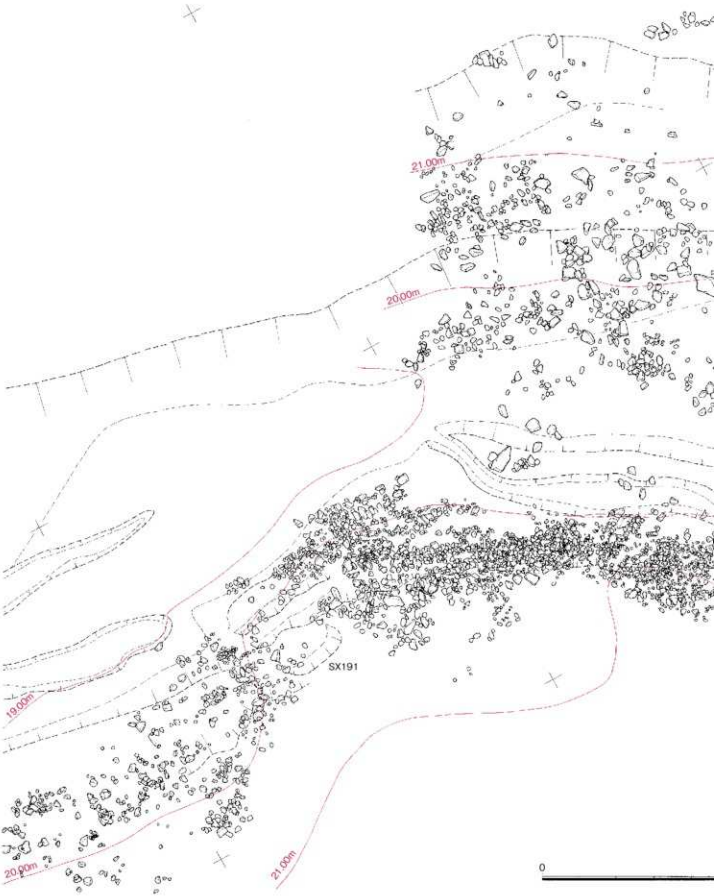


Fig.62　石組（敷石状）遺構（1/100）

Fig.62　石組（敷石状）遺構（1/100）

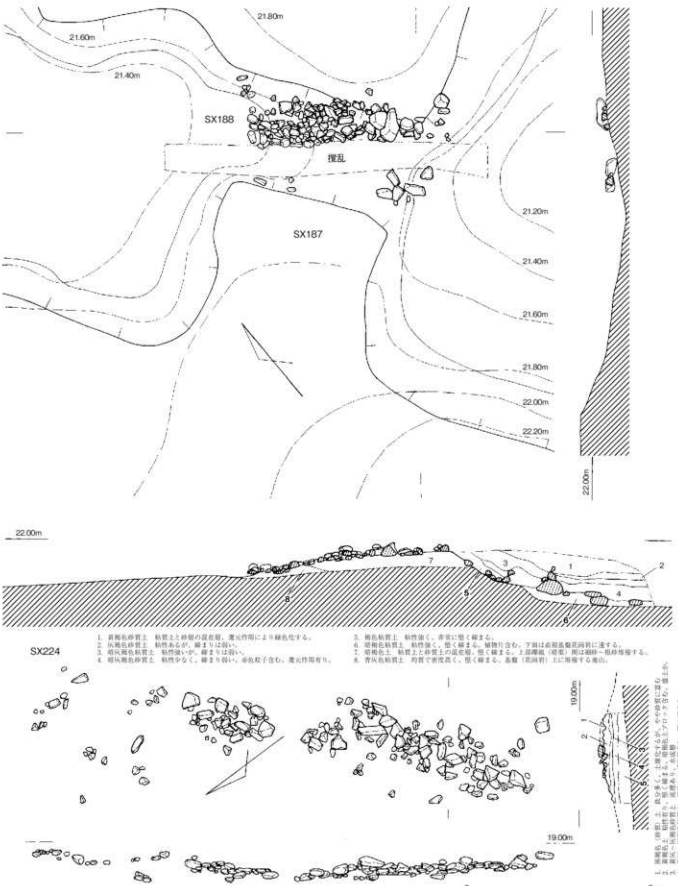


Fig.63　陸橋遺構（1/60）

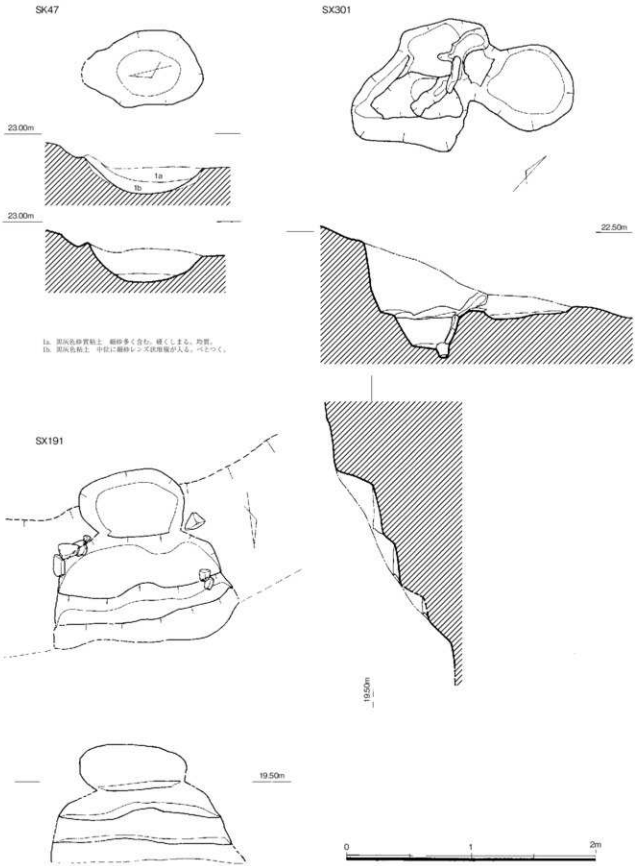
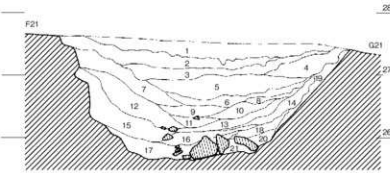


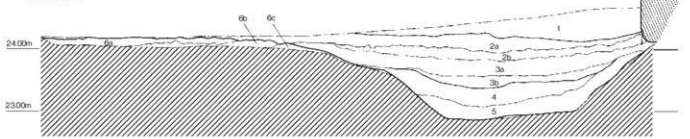
Fig.64　土壙等（1/30）

SD41南壁



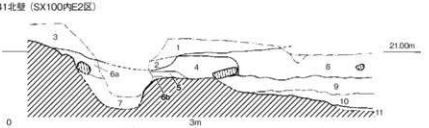
1層　黒褐色土層　締まりあり。有機質褐灰土層。安定面。
2層　暗褐色土層　締まりあり。砂礫、小礫片含む。有機質褐灰土層。
3層　暗褐色土層　締まりあり。砂礫、小礫片、土器（土師器）片等を多く含む。
有機質褐灰土層。黄褐色小ブロック含む。
4層　暗褐色土層　締まりあり。有機質褐灰土層。上層より色調やや明。
層下面に砕礫、粗砂混まる。黄褐色土ブロック（小）含む。
5層　灰褐色土層　締まりあり。砂礫、大礫入雑含。有機質褐灰土層。
6層　暗褐色土層　締まりあり。黄褐色土小ブロック少量含。有機質褐灰土層。
7層　暗褐色土層　締まりあり。5～6層より色調やや明。広範からの流土。
8層　暗黄褐色土層　締まりあり。黄褐色土小ブロック少量含む。西側からの崩落土。
9層　灰褐色土層　締まりあるがやや弱。礫砂と粗砂の互層。水性堆積層。
10層　暗褐色土層　締まりあり。黄褐色土小ブロックごくわずか含む。西側からの流土層。
11層　灰褐色土層　締まりあるがやや弱。細砂と粗砂の互層。水性堆積層。
12層　暗褐色土層　締まりあり。色調他層と比較してやや明。若干有機混土ブロック少量含む。
有機からの流土層。
13層　暗褐色土層　締まりあり。黄褐色土小ブロック、砂礫、多く含む。崩落含。
14層　暗黄褐色土層　締まりあり。黄褐色土小ブロック多く含む。西側からの流土（崩落？）
15層　暗褐色土層　12層に準ず。
16層　明灰褐色土層　締まりあり。粗砂、細砂、粘質土の互層。水性堆積層。
17層　暗褐色土層　締まりあり。砂礫、若干の炭化粒礫、暗黄褐色土ブロック多く含む。
水性堆積層。
18層　黄褐色土層　強礫状に混く締まっている。黄褐色土・黒褐色土小ブロック主成。
流流堆積土か。
19層　黄褐色土層　強礫状に非常に混く締まる。粘性あり。黄褐色粘質土主成。造成時の盛土。
20層　黒褐色土層　締まり非常に強。有機質褐灰土層。西側造成時以前の旧表土層か？
21層　地山　黄褐色花崗岩質風化土。

SD41中央壁



1.　暗茶褐色土。砂質に富み、硬くしまる。根痕土、土器片、礫少量含む。
2a.　暗～黒褐色土。やや粘質あり、硬くしまる。砂粒、礫含むが、上下層に対しやや少ない。
下位にしたがい土色は斑模的に淡くなる。下面凹凸あり。根痕土である。
2b.　茶褐色土。砂質に富んしまる。礫をやや多く含む。上下層に凹凸激で接する。
下位にしたがい土色は斑模的に淡くなる。当層と下位層の漸移層。
3a.　茶褐色砂質土。砂質に富み、水分多い。礫はやや少ない。土器片、炭化物片多く含む。
下面はフラット状態に良分多い。
3b.　黄褐色粘質層。　中央に最も厚い粗砂層をはさみ上下に根跡が層様。暗褐状となる。
石器～はシルト化する。
4.　茶褐色砂質土。砂質に富む。下部にしたがい礫が多くなる。土器に炭化物多量。
5.　茶～黄褐色粘質土。粘性、礫を多く含む。やや硬くしまる。土器片多く含む。
6a.　暗褐色土。砂、礫を多く含み、硬くなる。上下層に斑様する。凹凸で接する。
6b.　黄褐色土。砂、礫を多く含む。ややよごれる。上面凹凸気味。
6c.　黄灰色粘質土。砂、礫を多く含み硬くしまる。地山？

SD41北壁（SX100内E2区）



1.　黄褐色粘質土と灰白色細砂の互層。堅く締まり、
クラックさんる。
2.　灰色シルト、やや堅く締まる。
3.　黄褐色粘質土。土師C期小色調が茶褐色化する。
4.　黄灰色砂～粗砂。層上面には顕色部分が暗着し、
管状に硬化する。
5.　黄灰色細砂
6a.　黒灰色粘質土。下位に暗い灰色シルト化する。
SD41土層層上。
6b.　灰色粘砂
7.　黒褐色粘質土。遺SD41内下層である。基盤岩の
成層には凹凸有り。堅み内には当遺構自体層に含む。
8.　青灰～明灰色砂、灰褐色土の互層（薄層堅、粘性、
締まり弱い。
9.　明灰褐色粘質土、締まり弱い。
10.　暗灰～黒灰色シルト、粘性は弱い。
11.　暗黒褐色粘質土、粘性、締まり弱い。

Fig.65　溝断面図（1/60）

ら約 15m の位置を最短で横切るように設けられている。検出面は 21.8m である。遺構の中央付近を調査時の排水用水路で一部破壊している。陸橋 SX100 は両岸間で約 10m あり、その間を繋いで主に盛り土で構築されている。その規模は基底部で幅約 4m、上面幅約 2.5m、高さ 0.5 ～ 0.7m である。陸橋の中央にはこれを横切るように石組暗渠 SX188 が設置されている。これは陸橋の中央に幅 1.5m、長さ 2.5m、深さ 0.15m の溝を切り、その中央に石組みとして 10 ～ 20cm 大の角礫を 1 ～ 2 段敷いて構築している。石組みは上流側に一辺 0.3 ～ 0.5m のやや大ぶりの角礫があり、下流側では小振りの礫を用いている。暗渠の基底部最下面は標高約 21.7m である。上流側は池状遺構 SX111 となるが、その覆土は水成堆積であり、安定した貯水機能があったと考えられる。また、縦断面土層の観察から、本来の陸橋はより高いレベルまで盛り土が存在したと考えられた。

SX224

L15 グリットにある陸橋遺構である。規模は幅白 0.7 ～ 0.8m、長さ約 8m がある。第 2 面の中世水田の床土除去後に検出した。第 3 面に伴う遺構であり、検出面は 18.7m である。中央を調査時の排水用水路で破壊している。陸橋は一定の盛土後、角礫を幅約 1m、長さ 8m の範囲に帯状に積み上げ、さらに盛土を行っている。石材が築堤の骨材となっている。調査段階に上部の盛土を除去したが、残存する高さは。中央部で約 0.5m である。

8）土壙

SK47

F17 グリットの 3 面にある浅いすり鉢状の掘方をもつ遺構である。柱穴や製鉄の関連遺構とも考え難いので別に示した。平面は不整楕円形であり、主軸は N-11° -E である。長さ 1.0m、幅 0.6m、深さ 0.3m を測る。

SK301

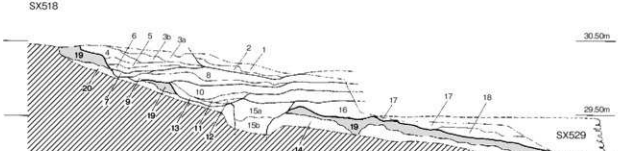
G15 グリットの 4 面にある特殊な形態をもつ土壙である。検出場所は壇状平坦面下段と崖下を北流する SD41 との間の斜面に小規模な段を設け、その上面に設けられている。土壙は大きく 2 つの土壙が連結複合した形態をとり、斜面に直交し大凡東西に主軸をとる。検出面の標高は 22.0 ～ 22.5m である。規模は全長 1.7m、幅 1.7m、全体の深さ 1.0m である。斜面奥側が深く、二段掘りの土壙となる、一段目は長さ 1.0m、幅 1.0m、深さ 0,6m であり、二段目は長さ 0.5m、幅 0.3m、深さ 0.4m である。斜面外側の土壙は長さ 0.7m、幅 0.7m、深さ 0.2m であり、床面は平坦で奥側土壙の一段目と一致する。遺構内の覆土は上部が暗色砂質土の二次的流入土であり、下半部は黒色泥質土である。遺構の機能は不明であるが、トイレ状遺構の可能性を考えている。遺物は少なく、須恵器、土師器片（Fig.77 － 7）がある。須恵器には Ⅲ b 期と Ⅴ 期があり、埋没時期は下限を示す 7 世紀第 3 四半期頃と考えられる。

9）階段状遺構

SX191

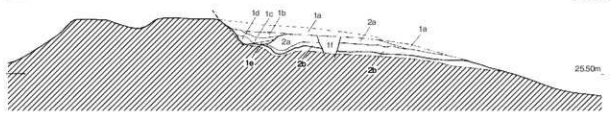
グリットの第 4 面にある。検出場所は壇状平坦面下段と SX100 床面との間の斜面に、素掘りの掘り込みを 3 段設けて構築している。礫堆のなかであるが、この部分は礫の分布がない。段は下から幅 1.5m、高さ 0.1 ～ 0.2m、奥行き 0.2m、二段目が幅 1.3m、高さ 0.1 ～ 0.2m、奥行き 0.3m、三段目が幅 0.8m、高さ 0.1 ～ 0.2m、奥行き 0.4m である。階段全体は各段の傾斜と地形の傾斜もあり、全体で約 1m の高さがある。この階段を登りきると建物 SB280 の北東隅部に達する。この建物の周囲には溝 SD251 が巡っているが、この溝が唯一途切れ、陸橋となる位置はこの北東隅部であり、階段の正面となる。

SX518



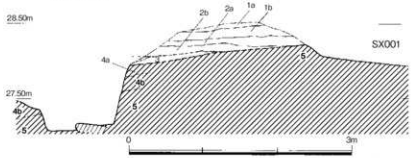
1. 黄褐色土　礫多く含み炭化物少量あり、地山二次堆積であり、堅く締まる。
2. 暗褐色土　黄褐色土ブロック含む、堅く締まり、下面はフラット。
2a. 黄褐色土　小礫含み、地山二次堆積で堅く締まる。
3b. 暗黄褐色土　小礫含み、地山二次堆積で堅く締まる。
4. 暗褐色土　炭化物片、土器片少量含む。
5. 暗黄褐色土　黄褐色土ブロック含む。
　堅く締まり、石敷に敷き、炭化物や小ブロック（炉？）あり。
6. 黒褐色土　やや粘質帯びる、炭化物、土器片含む、堅く締まり、上下面フラット。
7. 暗褐色土　やや砂粘多く含む、小礫を全体的に含む、堅く締まる。
8. 暗黄褐色土　小礫含み、炭化物片、土器片少量含む。
9. 黒褐色土　黄褐色土ブロックを少量含む、上下面フラット。
10. 黄褐色土　礫、地山小ブロック含む、土器片少量あり、堅く締まる。
11. 暗褐色土　均質で粘性あり、ややべとつく。
12. 暗黄褐色土　小礫含み、レンズ状堆積する。
13. 暗褐色土　小礫含み、均質で堅く締まる。
14. 暗褐色土　黄褐色土ブロック少量含む、土器片含み、堅く締まる、下面はフラット。
15a. 黄褐色土混じり暗褐色土　やや質で乱れた礫含み、堅く締まる。（SD179相穴埋土）
15b. 暗褐色土　堅く締まる。（SD179相穴埋土）
16. 黄褐色土　上半混じり地山二次堆積物多く、下半部は黒褐色土混じる、少量に小礫含む。
17. 黄褐色土　地山二次ブロック多く含む、堅く締まる。
18. 暗褐色土　地山二次ブロック多く含む、礫含む、堅く締まる。
19. 黒褐色土～暗褐色土　土位に広く分布し、下位に粘土ブロック、少量に礫様変化する、旧表土（地山）
20. 暗黄褐色土　小礫含み、炭化物片、土器片少量含む、締まり弱い。（地山）
※層位注記は第2図日を形成する整地層群である。さらに以下のa-b段階に区分される。1a層は整地層a、2～6層は整地層b、7～9層は整地層c、10～13層は整地層d、14,15層は整地層e、16～18層は整地層fである。

SD296



1a. 黒褐色土　地土・黄褐色土小ブロック多く含む、炭化物片あり、堅く締まる、上下層明瞭区分。
1b. 黄褐色土　地山二次堆積物　堅く締まる、下部はやや汚れる。
1c. 黒褐色土　地土片多く含む、薄層多く含み、本成形堆積か、層分可能、堅く締まる。
1d. 暗褐色土　地山ブロック含む、堅く締まる。
1e. 黄褐色土　薄い黒色土2～3枚挟む、本成形堆積か、堅く締まる。
2a. 灰褐色土　堅く締まる、杭穴内埋土。
2b. 黄～茶褐色土　堅く締まり、下部はやや汚れる。
2c. 黒褐色土と茶褐色土の混在層　少量ずつで下半部は黒色強く、
　上半部は茶～黄褐色土ブロック多い、堅く締まる。

SB248基底部



1a. 黄褐色土　軟質あり、均質で小礫含み、堅く締まる。
　上面で柱穴検出（第1検出面）。
1b. 暗褐色土　黒色土と黄褐色土のみブロックを多く含み、
　礫少ない、上面フラット、下面凹凸あり。
2a. 暗黄褐色土　黄褐色土ブロック、小礫多く含む。
　下面は明瞭区分、上面で柱穴検出（第2検出面）。
2b. 暗褐色土　小礫含み、堅く締まる、炭化物、上面片多く
　含む。下面は明瞭区分。
3. 黒褐色土　黄色～黄褐色土ブロック多く含む。
　地土、炭化物、土器片は上面にのみ分布。
4a. 黒色土　均質で礫少ない、下位に漸移変化する。
　焼土塊であり、焼土は周辺の旧表土。
4b. 黄褐色土　礫を少量含み、堅く締まる。
　上下層に漸移変化する。
5. 黄褐色砂質　堅く締まり、礫は上部に小さく、
　下位に大型化する。

Fig.66　墳状遺構（1/50）

同様の階段状遺構はこのSX191の上流約30 mの位置にもある（Fig.19）。

10）溝

本調査区では100条以上の溝、溝状遺構を検出した。ここでは全てについてふれることができない。ここでは古代にかぎり、代表的遺構の紹介にとどめたい。また、古代以降と見られる遺構から出土した古代遺物についてもここで示しておきたい。

SD02～03・11

調査1区の南側に検出した近世以降の用水路である。位置などは前報告を参照とされたい。混入遺物として須恵器などが出土した（Fig.78-1～11）。

SD26

I·J17·18グリットの壇状遺構の落ち際の上部に設けられた中世水路であり、覆土内から須恵器が出土した。この須恵器類については、当初は古代の一括遺物と考えていたが、調査の進展で中世水路掘削以後に混入した遺物と判断した。須恵器類には坏類があり（Fig.78-14～18）、V～VI期に相当する。

SD41

第4面段階に旧自然流路を埋め立てて、その東側に開削された溝状遺構であり、第3面段階にも継続している。ただし、当初下流部はSX100と並行して流走していた。しかし、第3面段階にはSD41の下流部は埋め立てられて陸橋SX187が構築された。その結果、SX41は上流部から直接池状遺構SX111に注ぐようになっている。SD41はほとんどの部位で基盤の花崗岩岩盤を掘って構築されており、数カ所で岩盤内の堅いアプライト貫入岩などをも切り抜いている。

さてSD41は第4面においてF·G22グリットに端を発し、北東方向へ向い、中央谷部SX100に接する直前に北側に角度を変え、SX100と並行して礫堆のある西斜面の直下を流れる。I16グリット付近でSX100と合流する。つまり当初、SD41からの流水はSX100谷頭部分にある井戸群に流れ込まないように設定されていたと見られる。SD41の規模は、屈曲前までは長さ約35m、幅約4.7mで、深さは上流部で約1.9m、中流で約1.1 mである。また、SX100と並行する部位では、長さ約23m、幅約1.2 m、深さ約0.7mである。

溝内からは須恵器、土師器が多く出土している（Fig.79～83－19～92）。須恵器には19～47の坏類、48のⅢ、51の椀、49·50～57の壺、54·55の甕があり、土師器には58～60の坏類、61～64の椀、65～67の高坏、68～73の壺類、74～92の甕・甑類がある。時期幅が大きく、須恵器ではⅢa期からⅦ期に及ぶ。ただし、Ⅲa期とⅦ期の遺物は僅かであり、特に前者は本遺跡内での遺構がないことから、周辺古墳群などからの混入遺物とみられる。主体をなすのはⅣa～VI期であり、本遺構の埋没開始の上限を示していると考えられる。

SD42～44

I·J17·18グリットの中世水田に伴う溝であり、覆土内から須恵器類が出土した。下位の古代遺構からの混入遺物と見られる須恵器類がある（Fig.83-94～97）。

SD52

G·H18グリットの中世水田に伴う溝であり、覆土内から須恵器、土師器類が出土した（Fig.83·84-98·99·107·108）。

SD53

I·J17グリットの第3面にあり、大壁建物SB328の外周溝である。覆土中から須恵器、土師器な

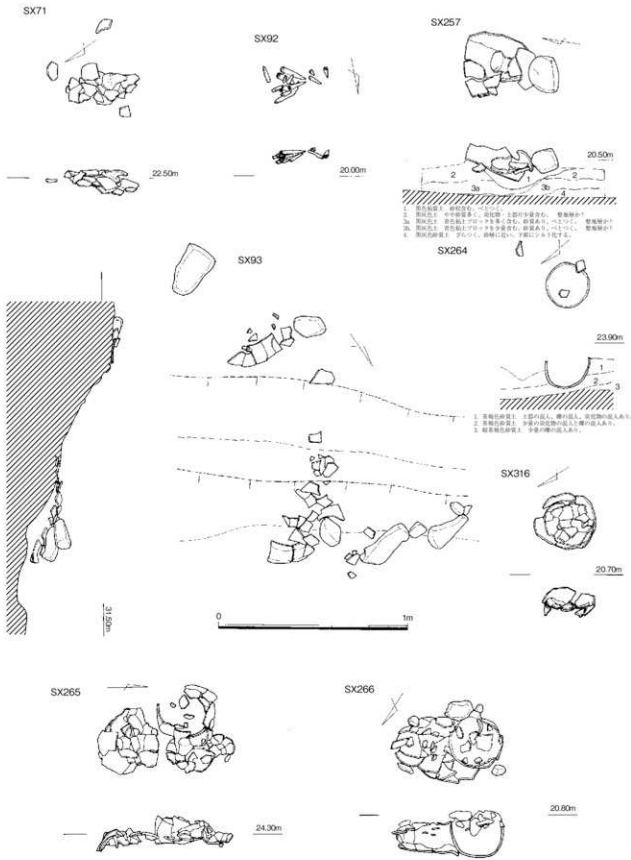


Fig.67　土器埋納遺構１（1/20）

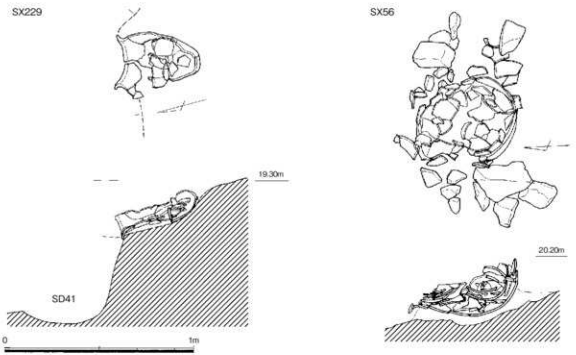


Fig.68　土器埋納遺構２（1/20）

どが出土した（Fig.83･84-100 ～ 104・109･110）。坏類はⅣｂ～Ⅴ期に該当する。

SD58

I･J17 グリットの第３面にあり、大壁建物 SB329 の外周溝である。覆土中から須恵器、土師器などが出土した（Fig.83･84-105･106・111）。坏類はⅥ期に該当する。

SD95･96

G22･23 グリットにあり、SD511 の延長部と考えられる。覆土中から須恵器などが出土した（Fig.84-112･113）。何れもⅣａ期に相当する。

SD102

G15 グリットで当初溝として調査を進めたが、溝ではなく、第３面を被覆する包含層と判明した。少量の須恵器、土師器類が出土した（Fig.84-114 ～ 116）。

SD226

J16 グリットから L16 グリット間の東斜面に並行して掘られた小規模の溝状遺構である。第４面に検出した。建物 SB231 に切られる。幅約 0.3m、長さ 18m を確認した。南側は SD220 北端の方向を向くが、関係は不明である。覆土は灰色砂であり、水流があったと見られる。覆土中から須恵器類が出土した（Fig.84-117･118）。須恵器はⅣｂ期である。

SD249 ～ 255・260 ～ 263

H ～ J16 ～ 18 グリットの建物群にある外周溝である。それぞれの建物の項で説明している。覆土中から須恵器、土師器類が出土している（Fig.84-119 ～ 123）。

SD296 ～ 298

H･I20･21 グリットの建物群にある外周溝である。それぞれの建物の項で説明している。覆土中から須恵器、土師器類が出土している（Fig.85-124 ～ 131）

SD305・306

G18・19グリットにある溝状遺構である。建物SBB284に切られる。ほぼ真北に流れる流路(SD305)とそこから派生し、3×3mの区画を囲んで再び同じ流れに戻る周溝状遺構（SD306）がある。SD305は幅約1.7m、深さ0.2m、SD306は幅約0.3m、深さ約0.1mである。何れも流理がある粗砂で埋没している。上流のSD511からの枝溝として設けられたと考えられる。SD306は「トイレ状遺構」の可能性があるが、覆土の分析などを行っていないために確証はない。覆土中から少量の須恵器、土師器類が出土した(Fig.85-132)。

SD342・343

N・O8・9グリットにある中世以降の平坦面造成に伴う後背溝である。古代の遺物は混入と考えられる(Fig.85-133～135)

SD374

O11グリットにある建物SB381の外周溝である。建物の項で説明している。覆土中から須恵器類が出土している（Fig.85-136～138)。Ⅴ～Ⅶ期に相当する。

SD382・383

Q11・12グリットにある中世の水田灌漑用水路である。古代の遺物は混入と考えられる(Fig. 85-139)。

SD384

中世墳墓の区画溝である。土師器壺が出土した。古代建物407とその関連遺構を切ることから、その際の混入遺物と考えられる（Fig.85-140)。

SD448～449

N・O13グリットにある中世の水田灌漑用水路である。古代の遺物は混入と考えられる(Fig.85-141)。

SD451

N・O14グリットにあり、流路SD404に沿って流れる流路である。基盤の花崗岩を掘切り流れることや杭列が伴うことから人工的水路と見られるが、時期は古代～中世の範疇である。土師器類が出土している（Fig.85-142・143)。

SD511

調査4区の中央で検出した溝状遺構である。幅は1.5～3.0mとばらつくが、直線的に約25mを検出した。近世以降の造成により大きく破壊されるが、保存の良い場所では深さ0.5～0.6mが残る。断面は緩いV字形をなす。覆土は暗色の砂層である。また、先に記したが護岸に石垣が残る場所があり、本来全体に石組護岸であった可能性があるが、これも後世の浸食や造成で多く失われている。覆土中から須恵器、土師器類が出土した（Fig.86-144～155)。須恵器はほとんどⅣa期であるが、1点(147)のみⅥ期がある。

SD515～519・522～525・530

調査4区の建物の外周溝と棚状造成壇の後背溝である。小さな谷部の急斜面に設けられた遺構群であるが、遺構形態や埋没覆土、出土土器様相は類似している。須恵器、土師器類が出土している(Fig.86-156～163)。須恵器はⅢb～Ⅳa期である。

11） 壇状平坦面・棚状造成壇

SX202・203

J・K13～15グリットにあり、SX100の東側斜面の壇状平坦面である。須恵器・土師器類が出土し

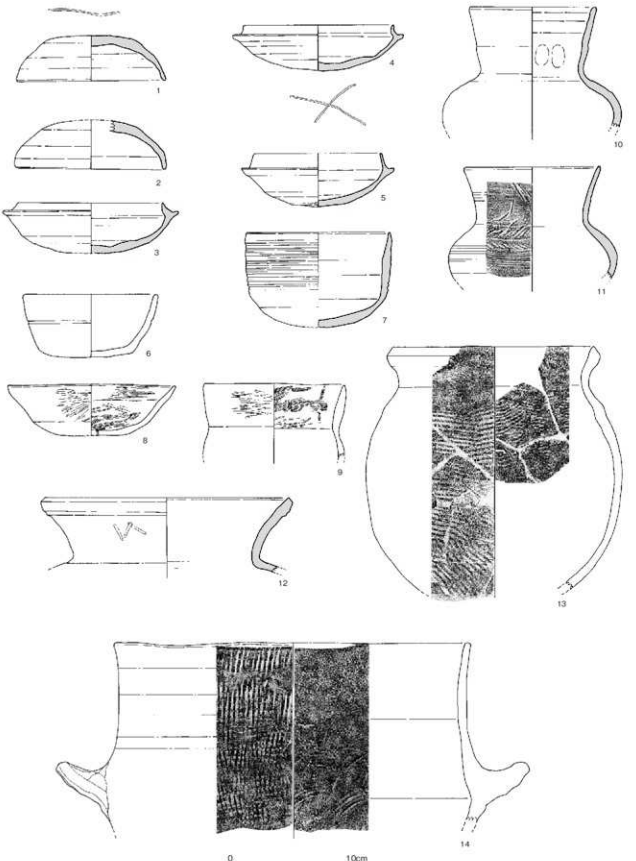


Fig.69　掘立柱建物出土遺物（1/3）

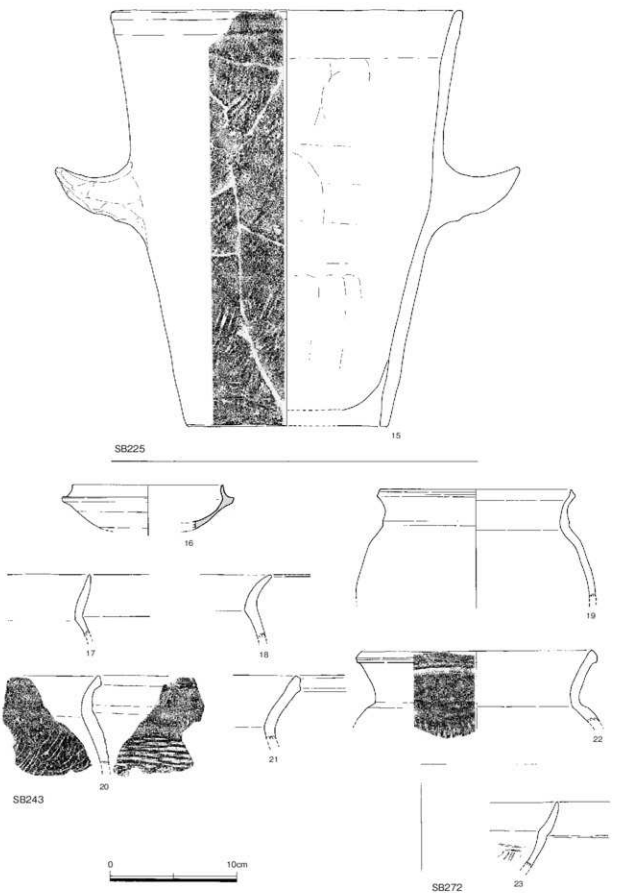


Fig.70　掘立柱建物出土遺物２（1/3）

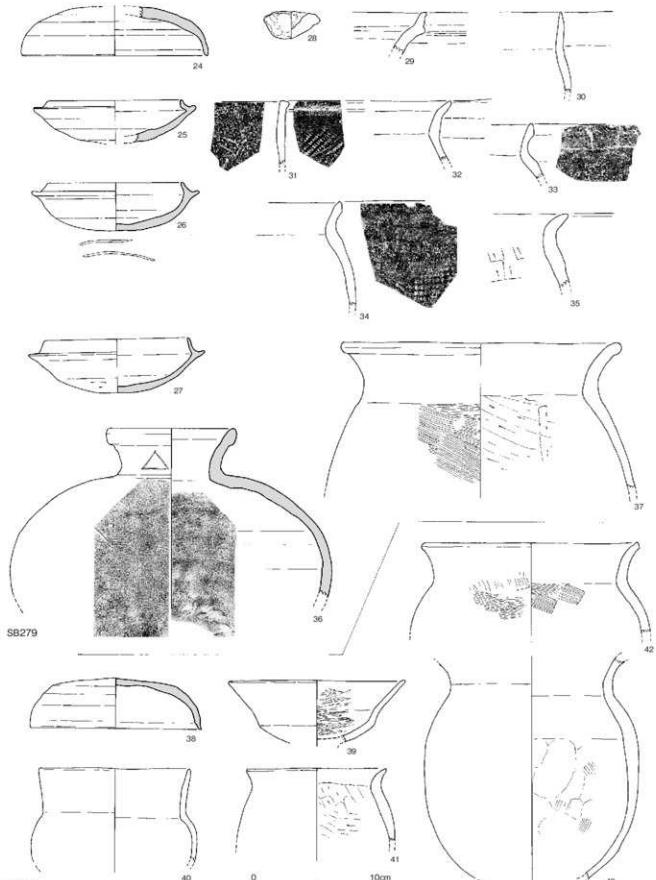


Fig.71　掘立柱建物出土遺物3（1/3）

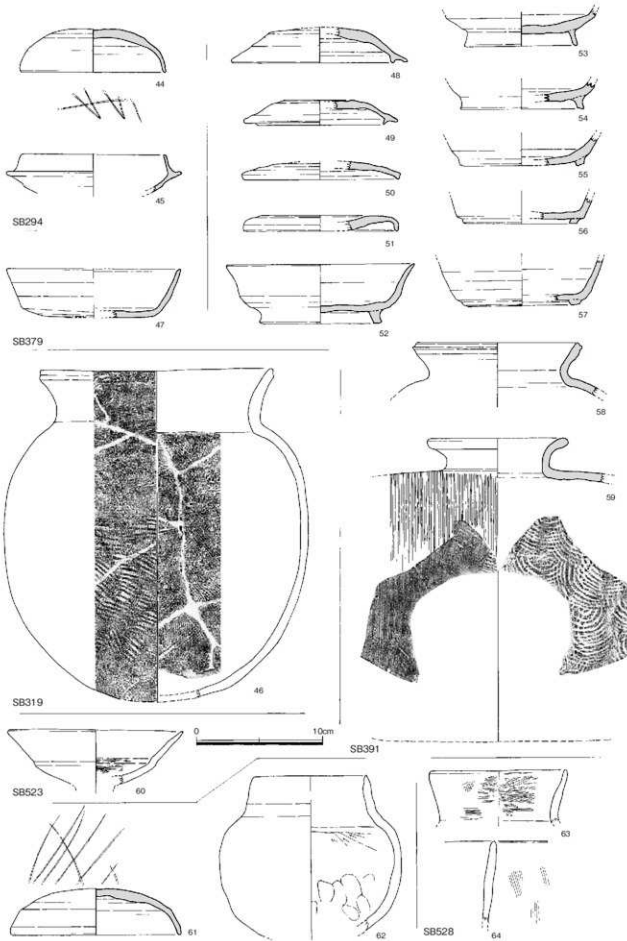


Fig.72　掘立柱建物出土遺物４（1/3）

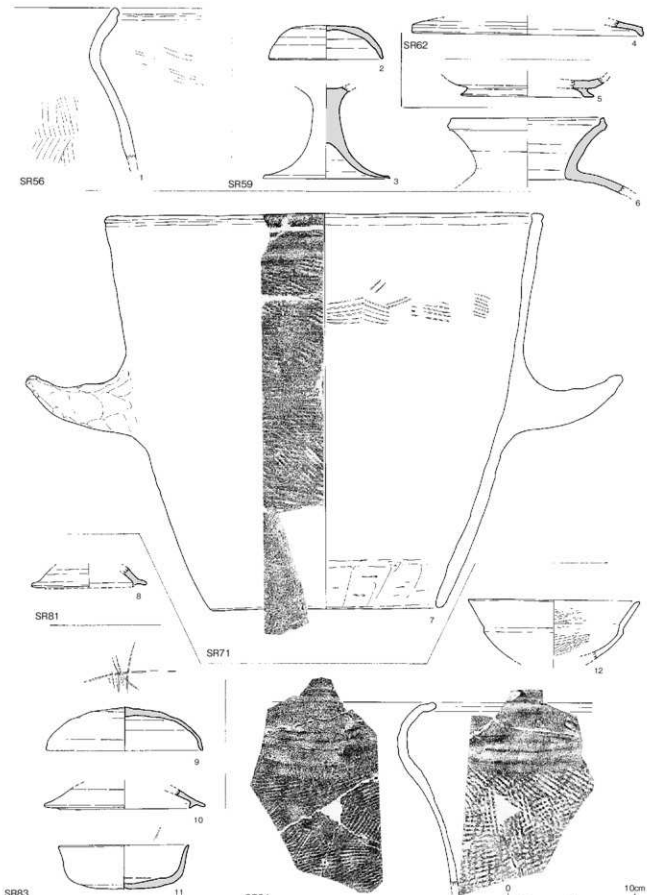


Fig.73　製鉄関連遺構出土遺物１（1/3）

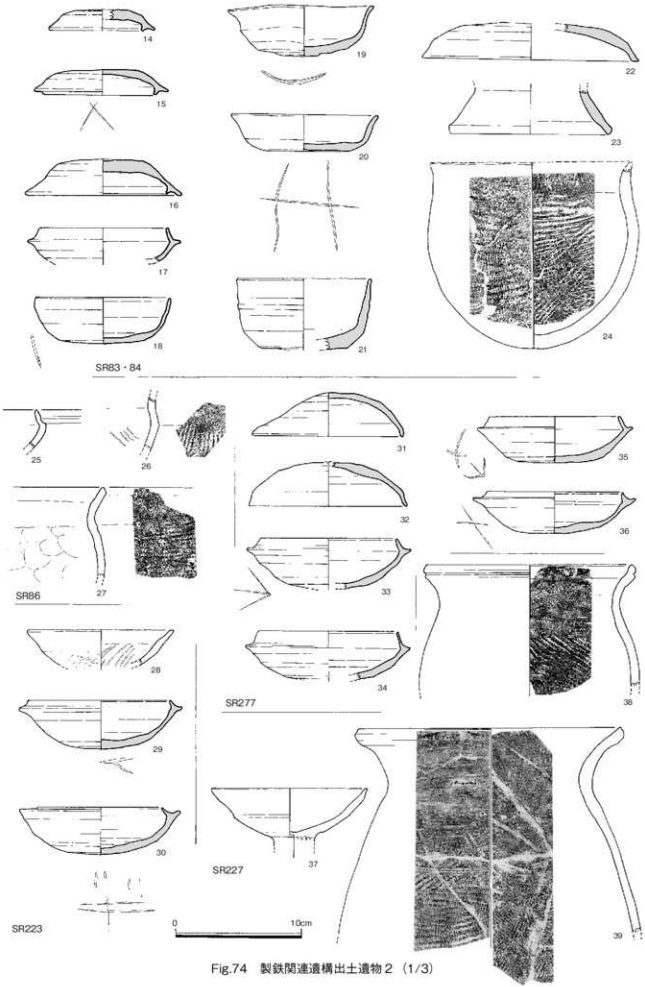


Fig.74　製鉄関連遺構出土遺物２（1/3）

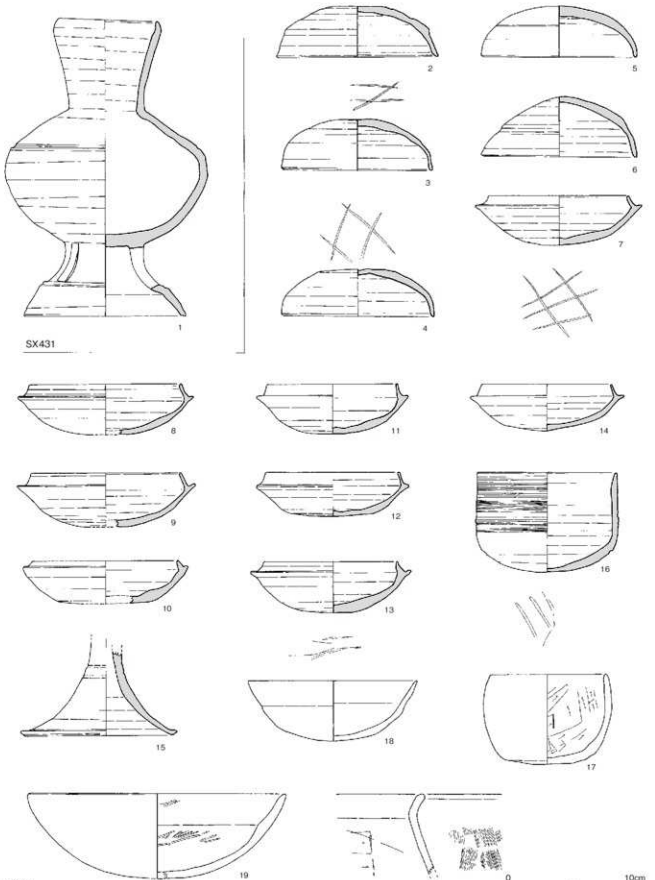


Fig.75　石組遺構出土遺物1（1/3）

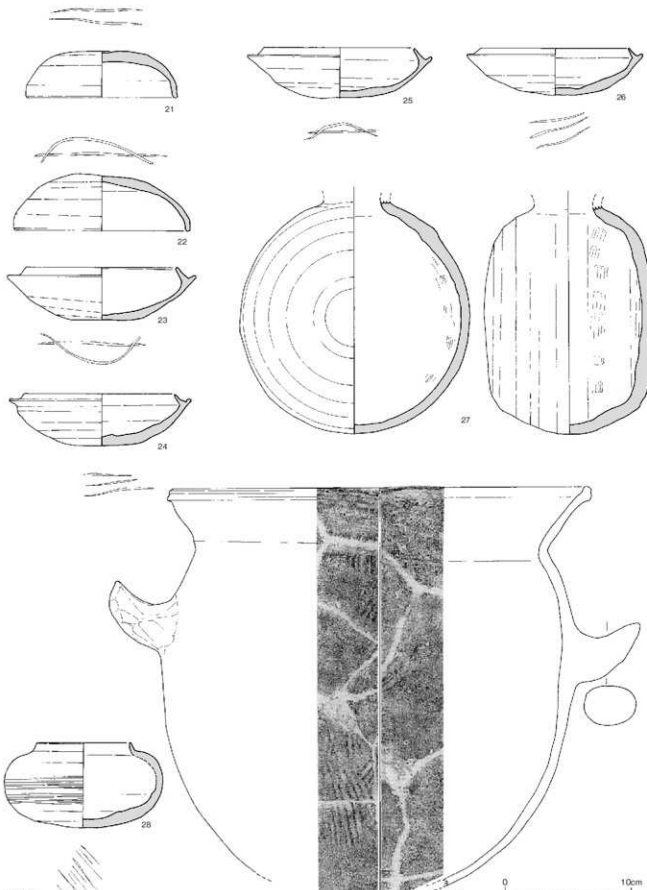


Fig.76　石組遺構出土遺物2（1/3）

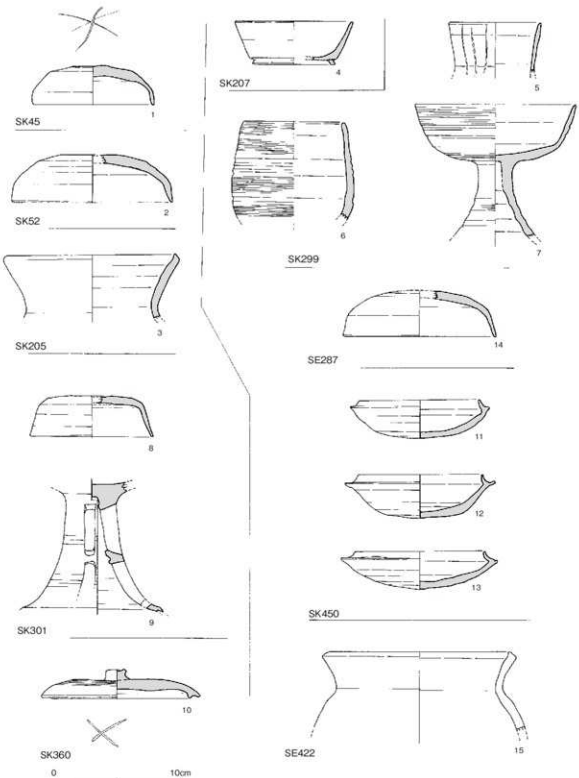


Fig.77　土廣・井戸出土遺物（1/3）

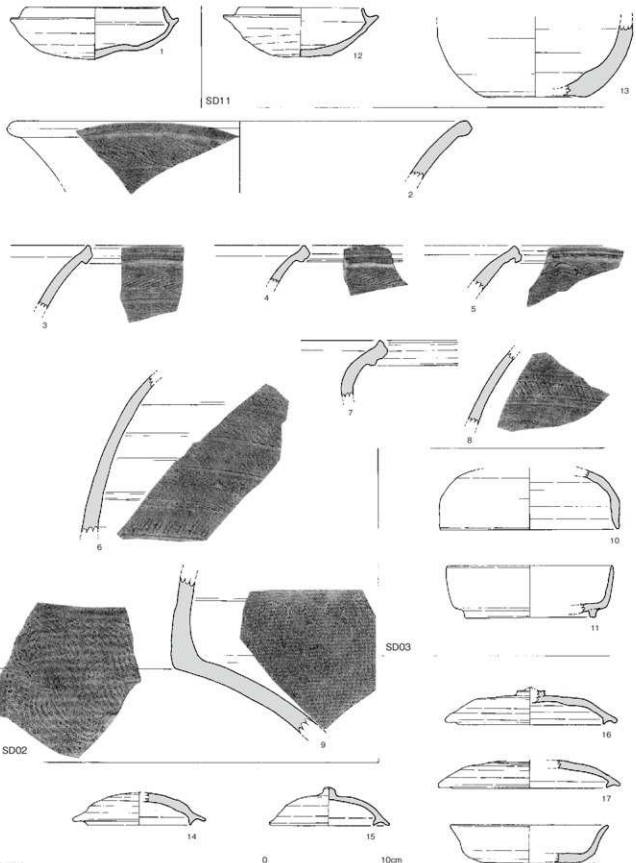
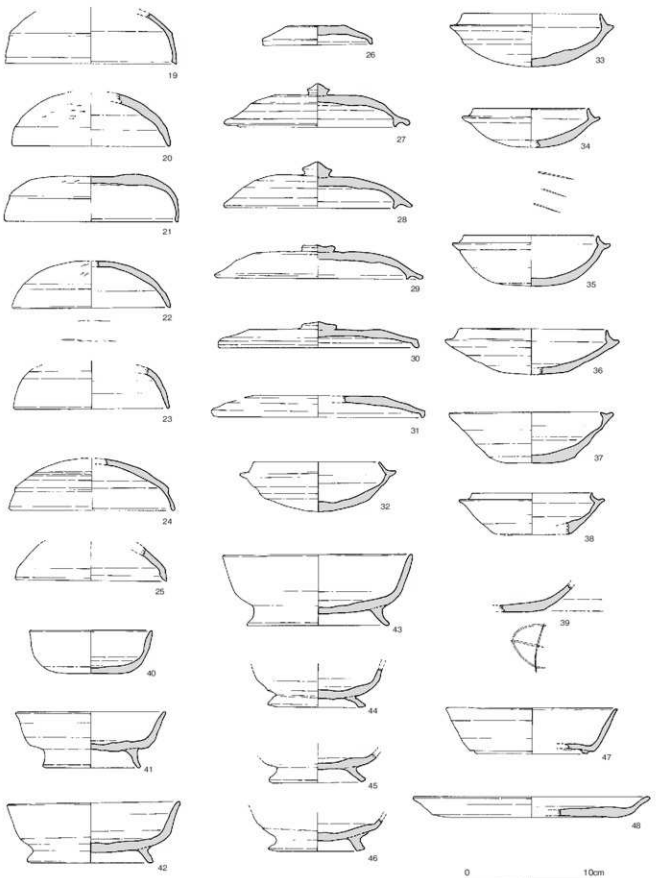


Fig.78　溝出土遺物1（1/3）



SD41

Fig.79　溝出土遺物２（1/3）

た（Fig.88-1 ～ 4）。須恵器には１のⅥ期、３のⅤ期がある。

SX209

K･L15･16グリットにあり、精錬炉SR223の作業スペースとして設けられた平坦面である。遺物量は少なく、少量の土師器が出土した（Fig.88-5,6）。このうち５は中世の坏であり、混入遺物である。

SX269

I18グリットにあり、西斜面中段の平坦面である。須恵器類が出土した（Fig.88-8）。

SX352

中世テラス１であり、古代の遺物は混入と考えられる(Fig.88-8･9)。

SX356

中世テラス２北側の上半部であり、古代の遺物は混入と考えられる(Fig.88-10)。

SX358

中世テラス２南側の下半部であり、古代の遺物は混入と考えられる(Fig.88-11 ～ 13)

SX359

L12･13グリットにあり、建物SB379の北側部分である。土師器が出土した(Fig.88-14)。

SX380

P9･10グリットにあり、東斜面下段となる。土師器、須恵器類が出土した(Fig.88-15 ～ 26)。須恵器にはⅤ～Ⅵ期があり、７世紀第３～４四半期と考えられる。

SX387

P11グリットにあり、SX404内の陸橋部の東側付け根部にあたる。地山を一部削り込んでいる。須恵器類が出土している(Fig.89-27 ～ 34)。33の坏蓋内面には墨書で「廣刀自」銘がある。須恵器はⅥ～Ⅶ期の範疇である。

SX402

P･Q9グリットにあり、西側斜面の造成による平坦面である。須恵器、土師器類が出土した(Fig.89-35 ～ 38)。須恵器はⅣｂ～Ⅴ期である。

SX508

E･F25グリットにあり、調査４区の棚状造成壇の五段目である。建物SB526の外周溝を含んでいる。須恵器類が出土した(Fig.89-39)。須恵器はⅣａ期である。

SX516

E･F24グリットにあり、調査４区の棚状造成壇の四段目である。建物SB528の外周溝を含んでいる。

Fig.80　溝出土遺物３（1/3）

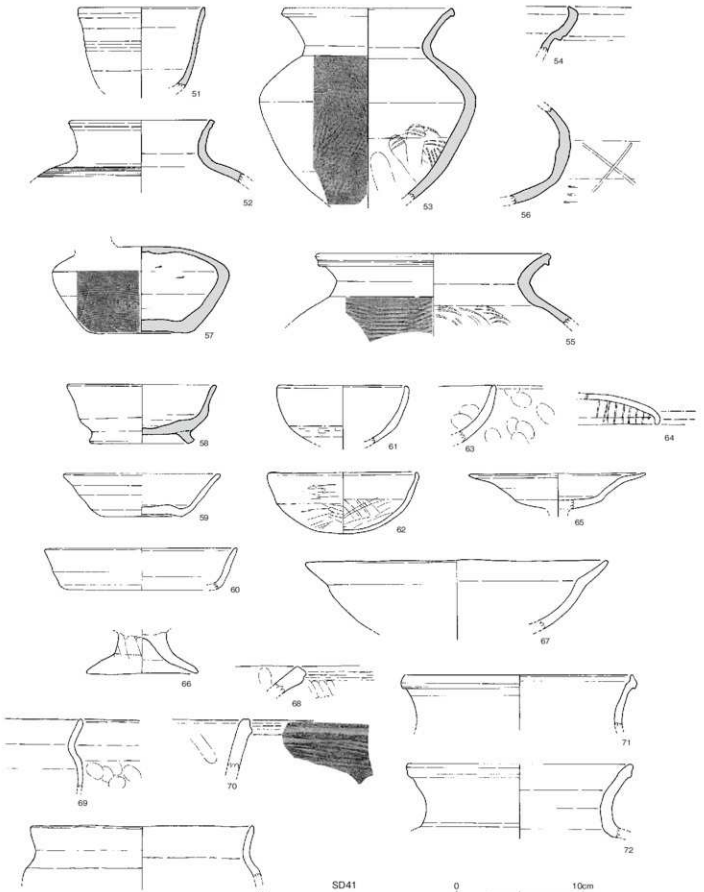


Fig.81　溝出土遺物４（1/3）

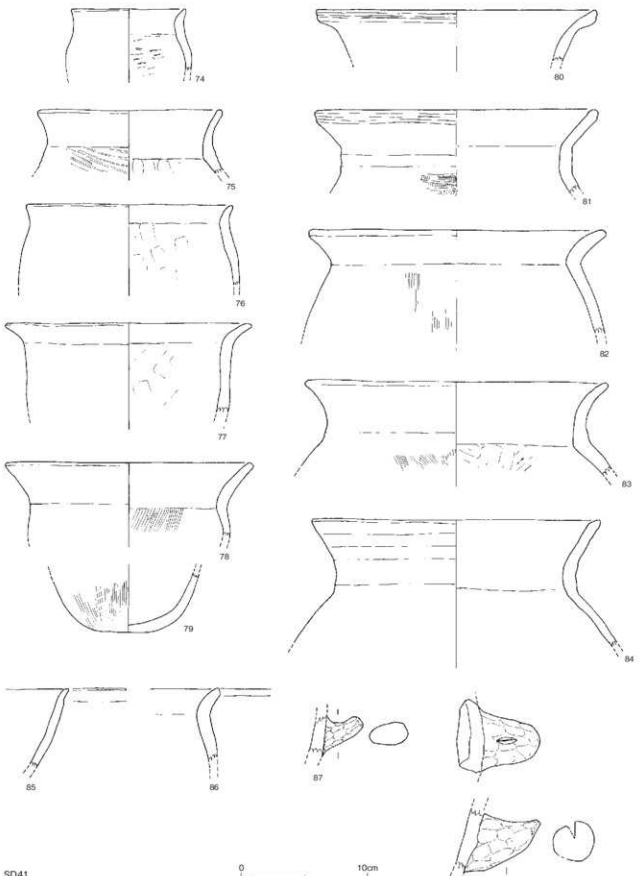


Fig.82　溝出土遺物５（1/3）

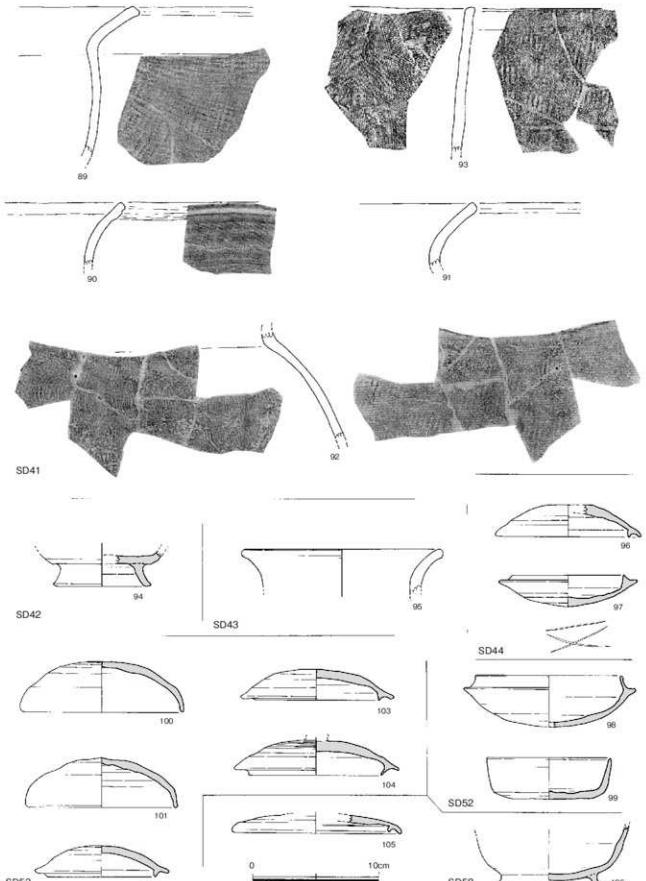


Fig.83　溝出土遺物６（1/3）

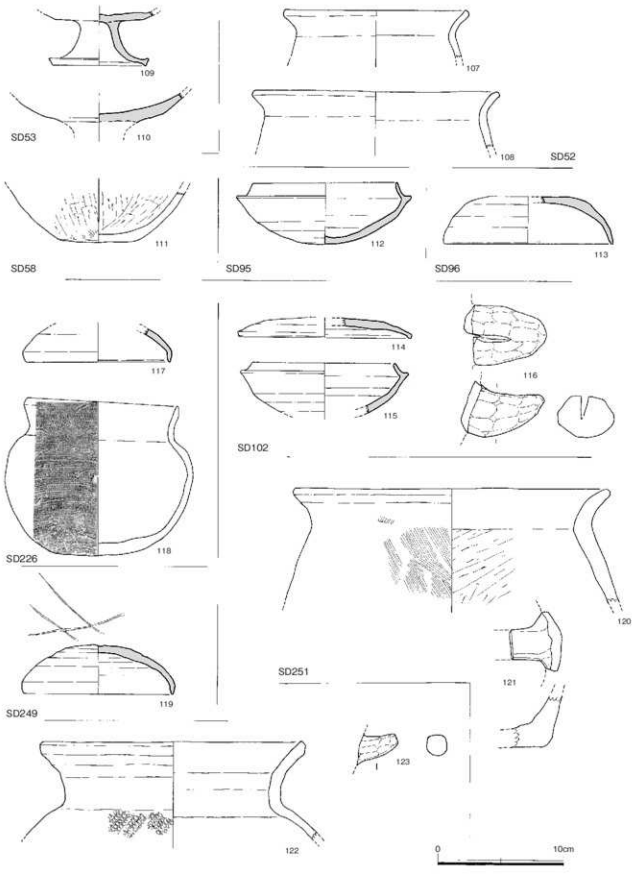


Fig.84　溝出土遺物７（1/3）

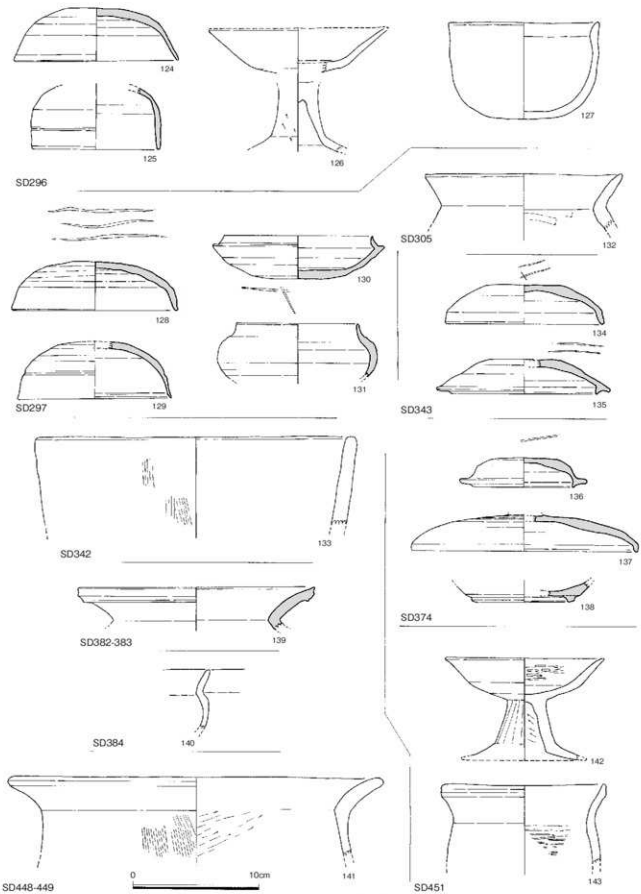


Fig.85　溝出土遺物８（1/3）

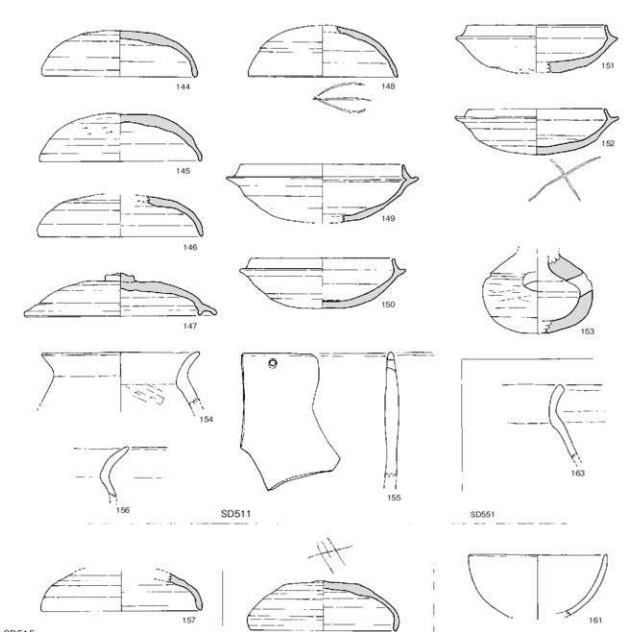
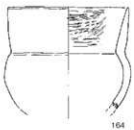


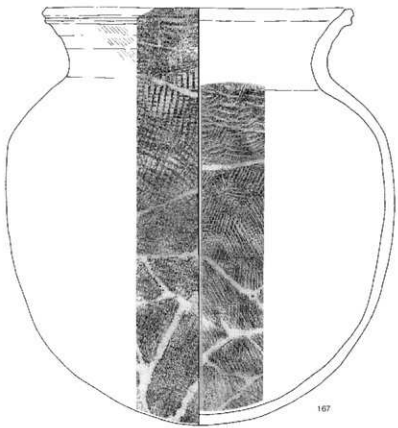
Fig.86　溝出土遺物９（1/3）

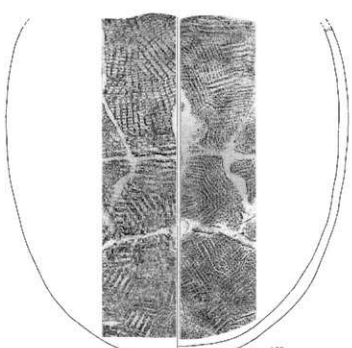
須恵器、土師器類が出土した (Fig.89-40 ～ 42)。須恵器はⅣ a 期である。

SX518

F･G23 グリットにあり、調査４区の棚状造成壇の二段目である。建物 SB178 ～ 181 の外周溝を含んでいる。須恵器、土師器類が出土した (Fig.89-43 ～ 45)。須恵器はⅣ a 期である。







SD522

0 10cm

Fig.87 溝出土遺物 10 (1/3)

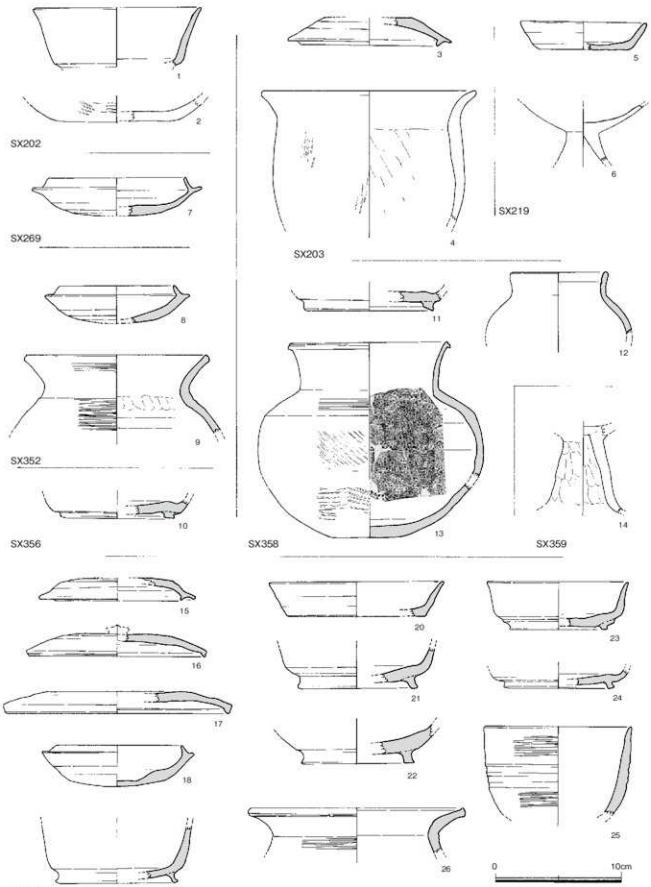


Fig.88　壇状遺構出土遺物1（1/3）

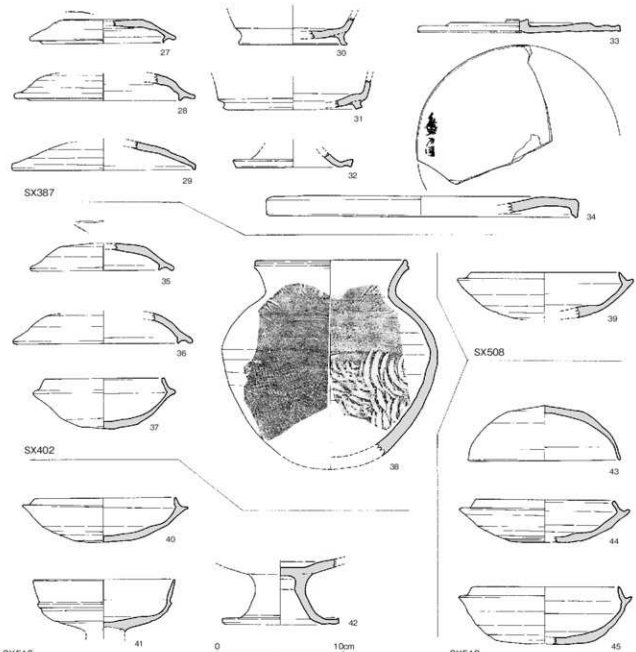


Fig.89　壇状遺構出土遺物２（1/3）

12）　埋納遺構

SX71

F16 グリットにあり、第３面の壇状平坦面上にある。暗色の埋土中に検出したものであり、遺構の掘方を明らかにできなかった。土器の出土状況からみて、土器の分布範囲に近い掘方が存在したと推定される。検出面は標高約 22.5 mである。推定される掘方は、略方位で N-55° -W、長さ 0.5 m、幅 0.25 m、深さ 0.2 mである。埋納された土器は一部を除いて二次的に動いている。土師器甕がある。

SX92

J14 グリットにあり、壇状平坦面の後背溝内に一括出土した鉄釘である。暗色の埋土中に検出した

ものであり、底面がほぼ揃っている。しかし、廃棄状態を示すか掘方が存在するのかを明らかにできなかった。鉄釘の出土状況からみて、その分布範囲に近い掘方が存在した可能性も考えられる。検出面は標高約 20.1 mである。掘方を推定するなら、長さ 0.4 m、幅 0.2 m、深さ 0.1 mほどであろうか。埋納された鉄釘は 22 本であり、錆化が少なく鍛造痕跡を認める保存状況の良好なものである（Fig.98－1～16）。

SX93

H17 グリットにあり、第 4 面の壇状平坦面下段から SD41 の斜面に検出した須恵器大甕である。礫堆の敷石上に甕の底部があり、甕胴部から口縁部は斜面、SD41 内に破片として広範囲に散乱していた。底部は礫堆中に礫を一部除去して据え置かれ、固定にやや大ぶりの角礫を周囲に設置していたと考えられる。検出面は標高約 31.6 mである。斜面の長さ 1.3 m、幅 0.6 m、落差 0.5 mの範囲に集中していた。埋納されたのは須恵器大甕（Fig.90-1）である。全体復元は困難であったが、復元では口縁径 56cm で器高 110cm 前後となると見られた。状況から見て、この大甕は設置後全体の器形が地表に露出していたと見られる。機能としては湧水点に近いことから水瓶などに利用されたと考えられる。

SX229

J16 グリットにあり、壇状平坦面下段の斜面直上にある。暗色の埋土中に検出したものであり、遺構の掘方を明らかにできなかった。土器の出土状況からみて、土器の分布範囲に近い掘方が存在したと考えられる。検出面は標高約 19.0 ～ 19.3 mである。推定される掘方は、略方位で N-05° -E、長さ 0.5m、幅 0.4 m、深さ 0.2 mである。埋納された土器は土師器甕と須恵器坏がある（Fig.91-2-3）である。2 の土師器甕は長胴で丸平底と在地甕とは異なる特徴をもつ。豊前系か東海・中部地域以東の影響を受けたものか。3 の坏身はⅦ期であり、8 世紀第 1 四半期と考えられる。

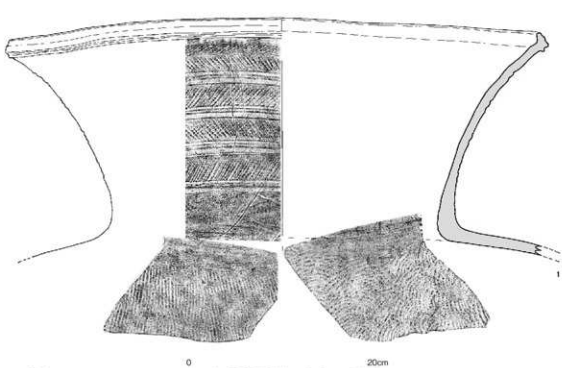


Fig.90　土器埋納遺構出土遺物 1（1/4）

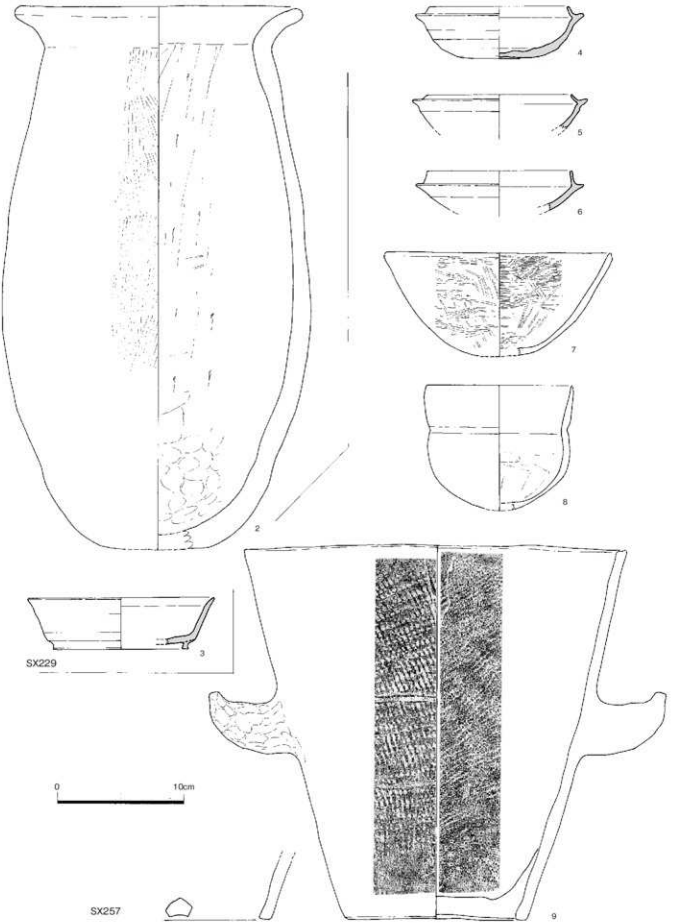


Fig.91　土器埋納遺構出土遺物２（1/3）

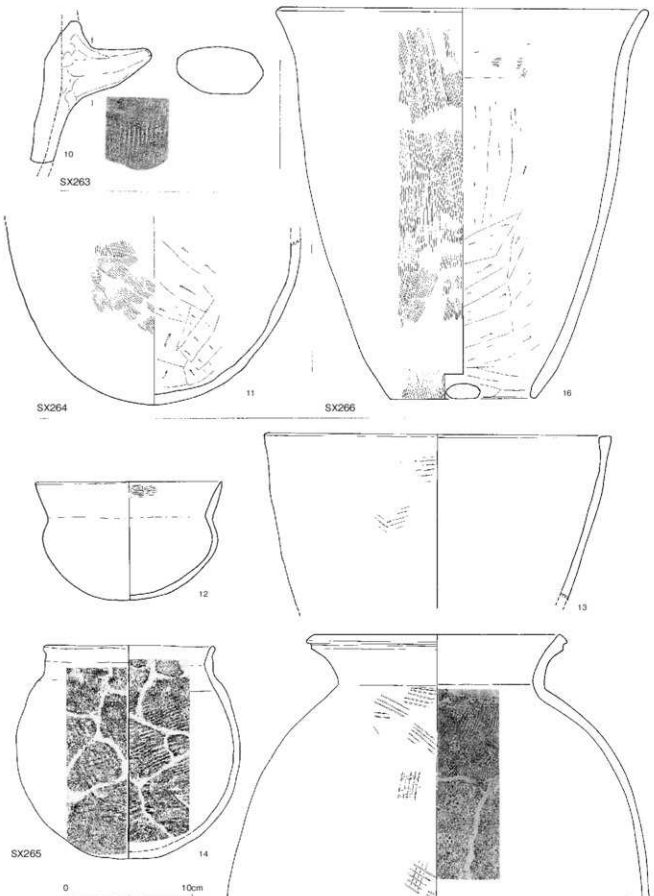


Fig.92　土器埋納遺構出土遺物３（1/3）

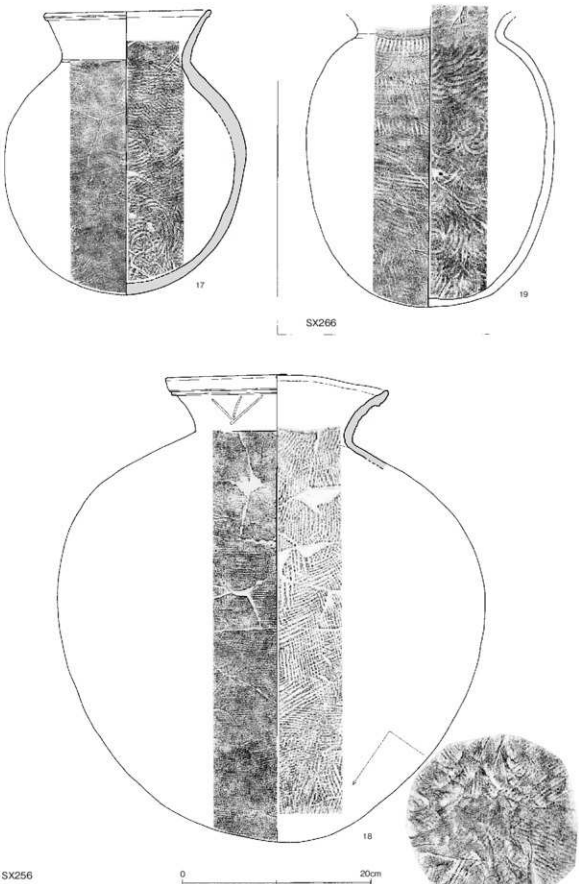


Fig.93　土器埋納遺構出土遺物 4 （1/4）

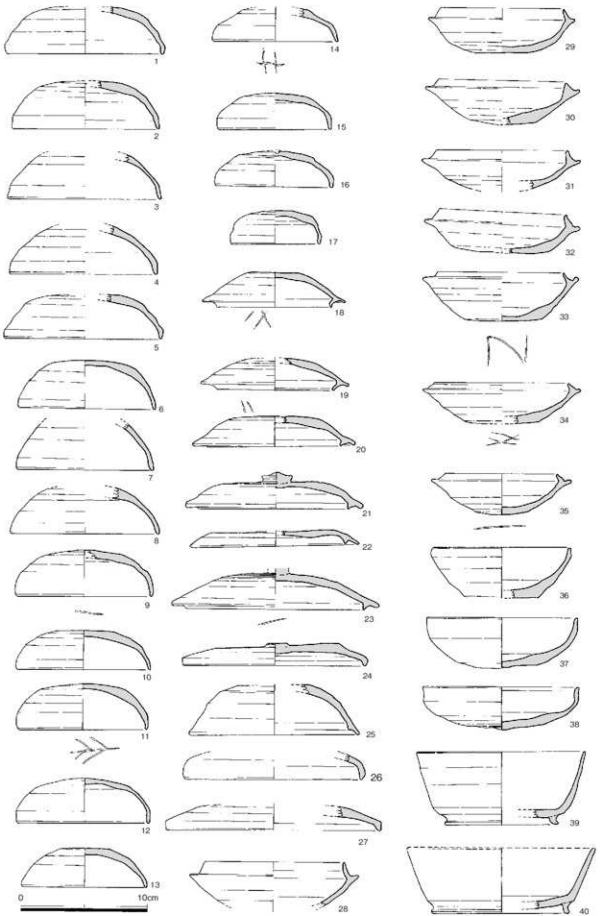


Fig.94　包含層出土遺物1（1/3）

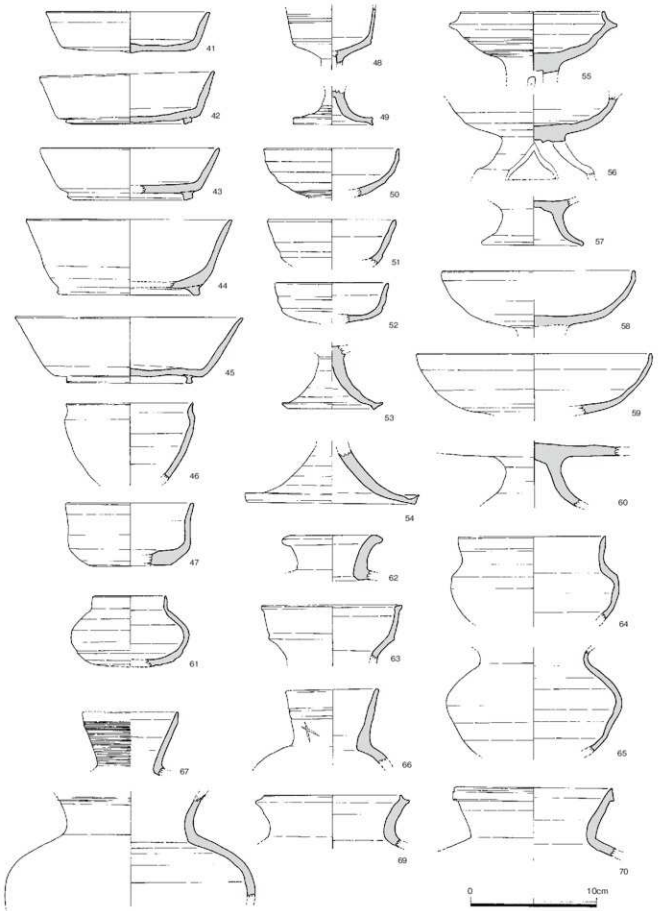


Fig.95　包含層出土遺物２（1/3）

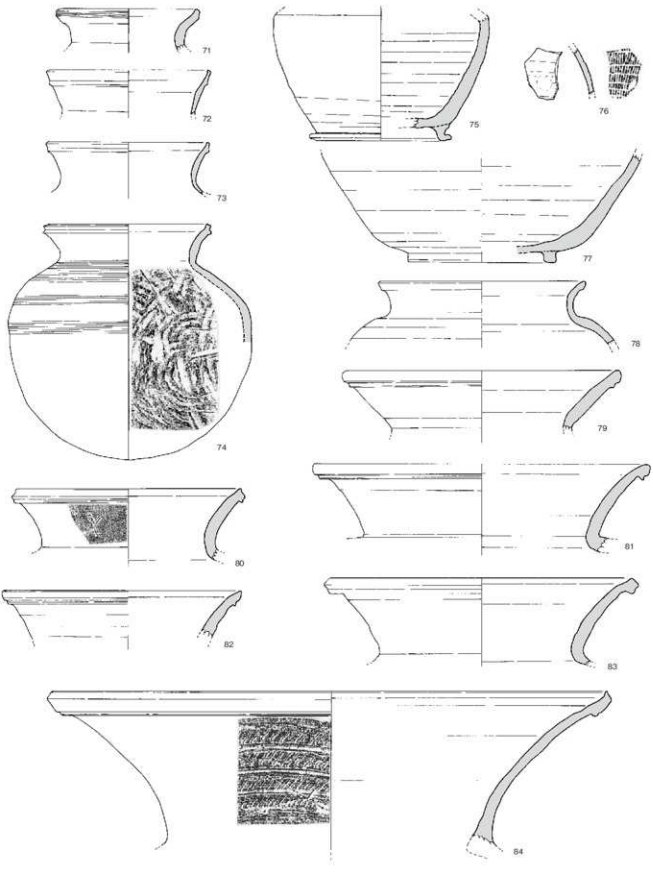


Fig.96　包含層出土遺物３（1/3）

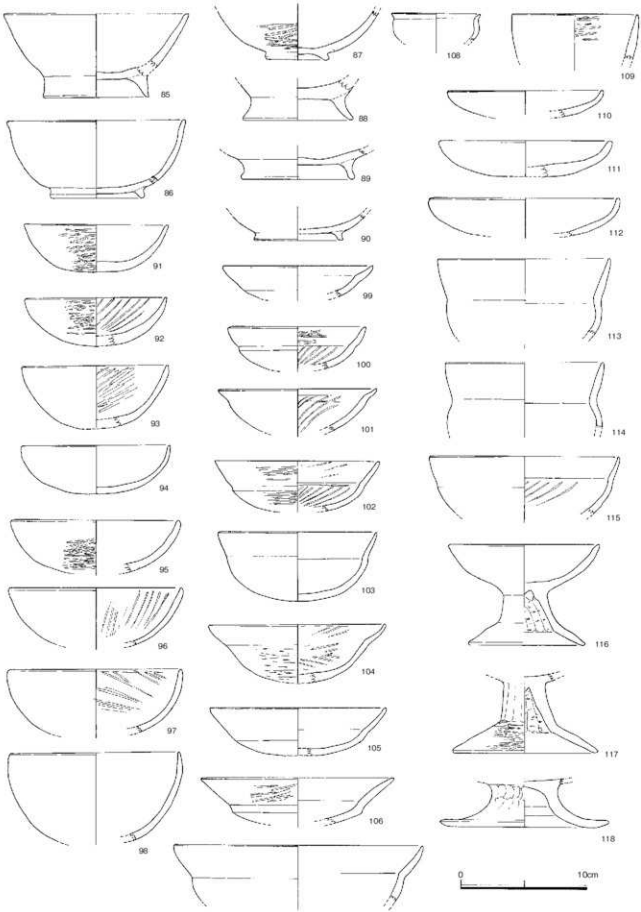


Fig.97　包含層出土遺物４（1/3）

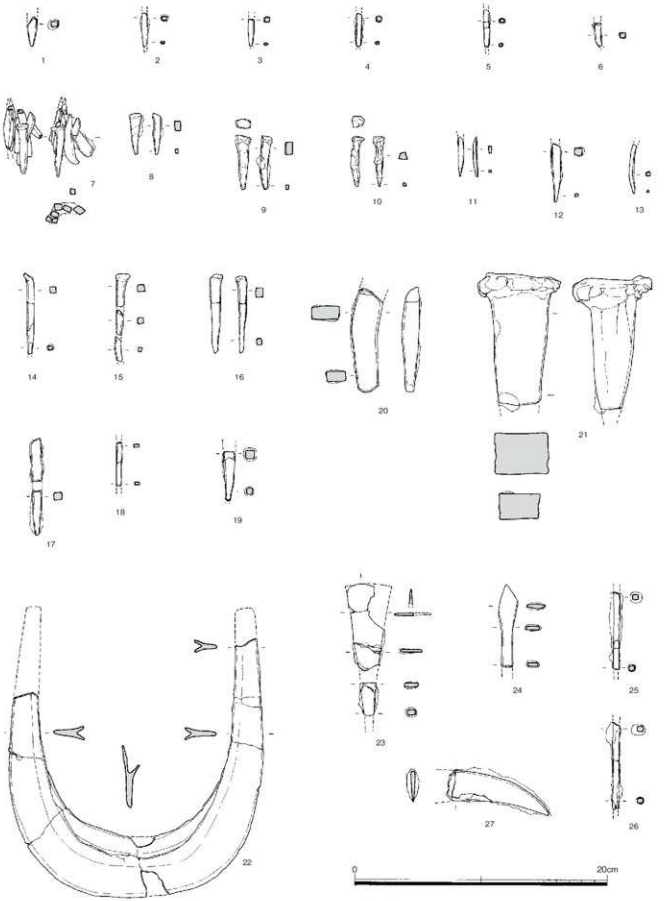

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
20cm

Fig.98 金属器 (1/2)

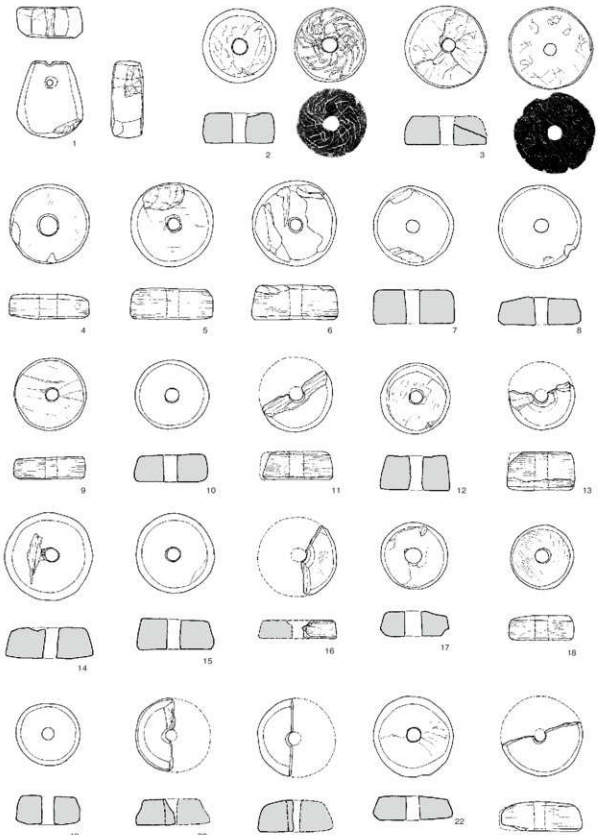


Fig.99 石製品1（1/2）

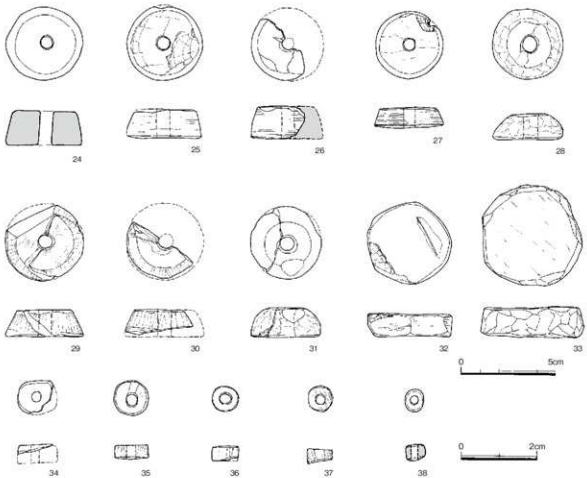


Fig.100　石製品2（1/2）

SX256

I16 グリットにあり、SX93 と同様に第 4 面の墳状平坦面上に検出した須恵器甕である。礫堆の敷石上に甕の底部を据え置き、やや大ぶりの角礫を周囲に配置し固定している。検出面は標高約 20.0m である。推定される掘方は、径約 0.5 m、深さ 0.05m である。須恵器は中型甕と小型甕であり（Fig.93-17･18）、中型が据え置かれ、割れた上半部破片と共に小型甕破片が下半部内部に入り出土した。中型甕は口縁径約 30cm、高さ約 60cm の大きさである。

SX257

H16 グリットにあり、墳状平坦面下部にある。造成埋土中に検出したものであり、遺構の掘方を明らかにできた。検出面は標高約 20.5m である。掘方は、略方位で N-05° -W、長さ 0.5m、幅 0.4m、深さ 0.2m である。埋納された土器は土師器甑で、掘方内に横向きに据え置かれ、その中に須恵器、土師器の小型器種が入れられていた（Fig.91-4 ～ 9）。須恵器に 4 ～ 6 の坏身があり、7 の碗、8 の壺、9 の甑がある。須恵器坏身はⅣ a 期であり、7 世紀第 1 四半期と考えられる。

SX264

G18 グリットにあり、墳状平坦面上にある。造成埋土中に検出したものである。掘方は、径約 0.25m、深さ 0.15m である。埋納された土器は土師器甕であり、上半部は失われている。

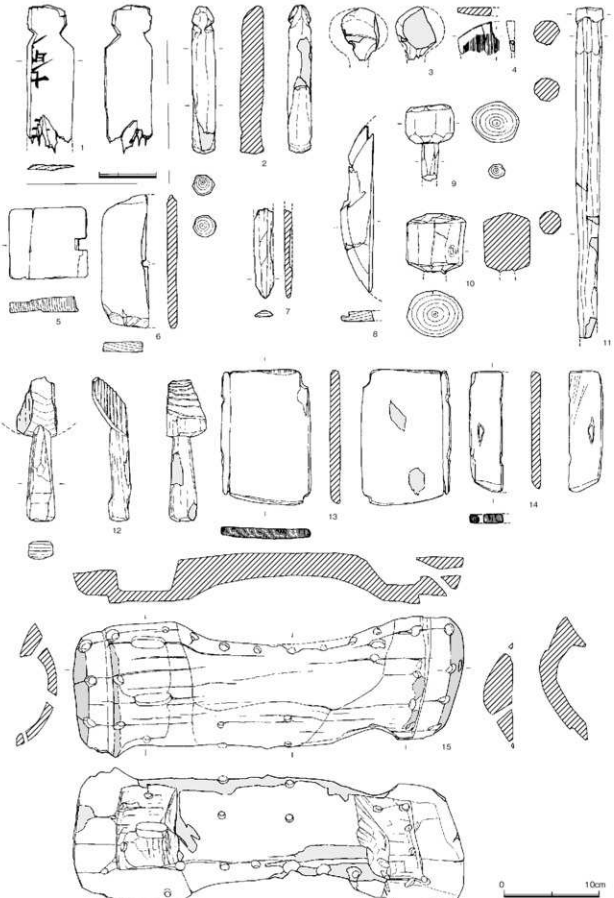


Fig.101　木製品1（1/2、1/4）

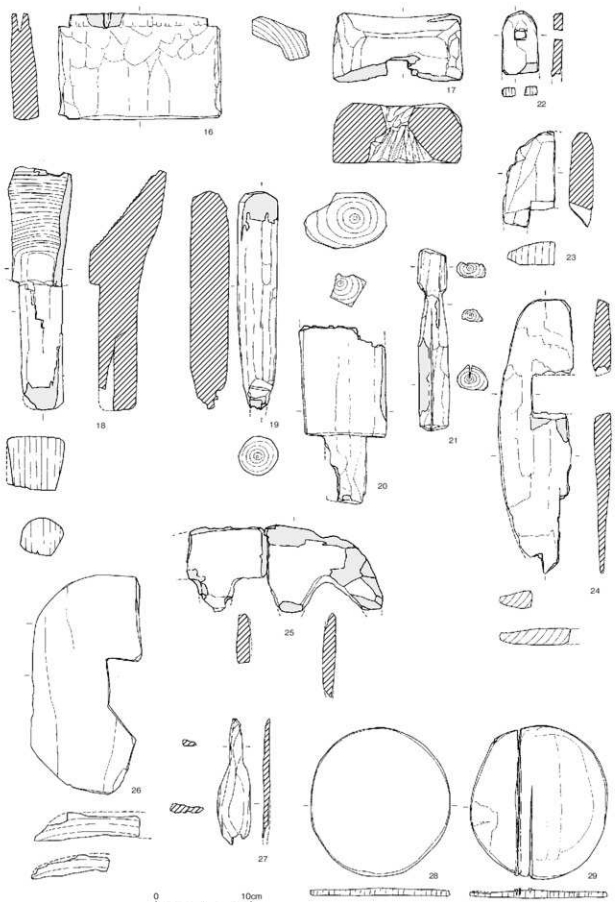


Fig.102　木製品2（1/4）

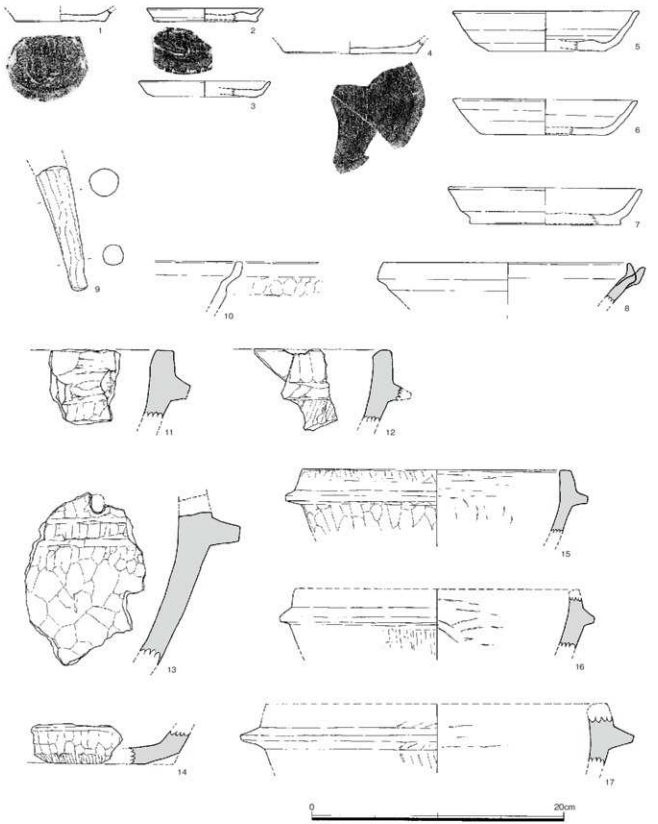


Fig.103　中世遺物１（追加資料）（1/3）

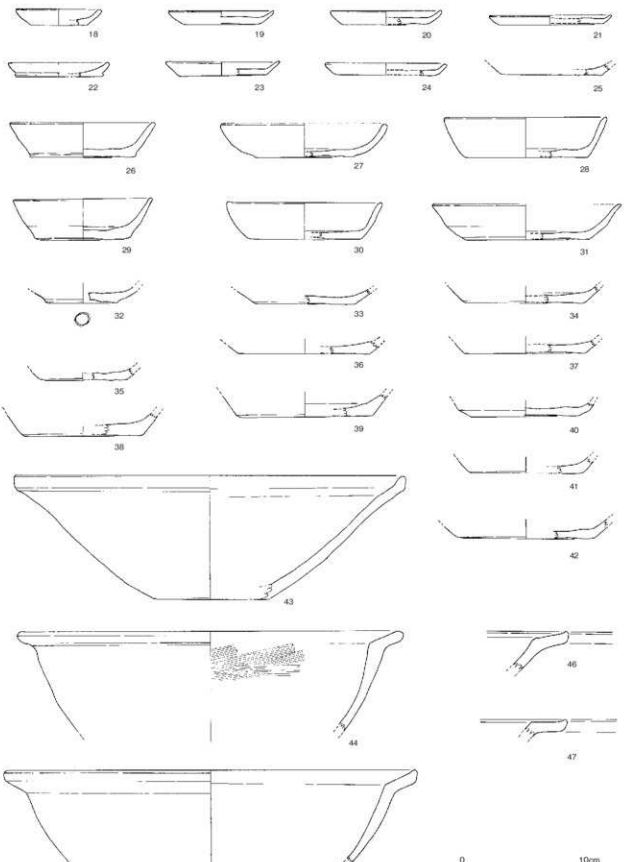


Fig.104　中世遺物２（追加資料）（1/3）

SX265

G19 グリットにあり、壇状平坦面に３個体の甕が集中している。廃棄状況か埋納かは判断できない。暗色の埋土中に検出したものであり、遺構の掘方も明らかにできなかった。土器の出土状況からみて、土器の分布範囲に近い掘方が存在した可能性も考えられる。検出面は標高約 22.5m である。推定される掘方は、長さ 0.7m、幅 0.5m、深さ 0.2m である。埋納された土器は土師器３個体と須恵器１個体である（Fig.92-12 ～ 15）である。

SX266

H17 グリットにあり、壇状平坦面上に２個体の甕が接して検出された。暗色の埋土中に検出したものであり、遺構の掘方を明らかにできなかった。土器の出土状況からみて、土器の分布範囲に近い掘方が存在したと考えられる。検出面は標高約 20.8m である。推定される掘方は、長さ 0.6m、幅 0.5m、深さ 0.25m である。埋納された土器は須恵器甕（Fig.93-19）と土師器甑（Fig.92-16）２個体である。

SX316

I16 グリットにあり、壇状平坦面上にある。暗色の埋土中に検出したものであり、遺構の掘方を明らかにできなかった。土器は破砕しているが底部は現位置を保っている。この出土状況からみて、土器の分布範囲に近い掘方が存在したと考えられる。検出面は標高約 20.6m である。推定される掘方は、長さ 0.35m、幅 0.3m、深さ 0.15m である。埋納された土器は土師器甕であり、上半部は失われている。

13） その他の遺構

SX100・404

調査１・２区の谷部にある流路である。本来自然流路であるが、古代において人為的造成が加えられ、流走方向などを変更している。同じ流路であるが、上流側の調査１区の範囲を SX100、下流側の調査２区の範囲を SX404 とした。前者が長さ約 70m、後者が長さ約 110m である。上流側では複数の枝溝がある。ＳＸ 100 は調査１区内で大きく二つの流れに分かれる。主流の中央部で湧水点を含む範囲と南西側に分かれ、調査４区に延びる旧流路部分がある。

第５面は、こうした自然流路を利用した段階であり、旧石器・縄文時代から古墳時代まで継続している。この段階には流路内や斜面に包含層や貝層などが形成されており、大規模な造成以前は廃棄場としての利用があった。

第４面は、造成などによって旧地形を悉く改変している。まず SX100 の南西側旧流路が埋め立てられる。それに代わり、谷部の湧水、雨水を集める流路として、より谷奥側に溝 SD41 が設けられている。また、中央流路の最奥部に大磐の設置や井戸南群が設けられる。さらに SX100 の壁面は直線的に造成され、壁面に葺石状の石組や石垣状の遺構が構築される。また、SX404 でも枝溝部分で井戸北群や石敷き遺構が設けられる。なお、SX100 の底面に刳り貫き式で長さ約 1m の木樋が出土している。二次的に動いていると考えられるが、本来は流路内に何らかの暗渠施設が存在したと考えられる。

第３面は、SX100 や SX404 の埋没が進んでいる段階である。SX100 には２カ所、SX404 には１カ所の陸橋状遺構が設けられる。SX100 では上流域に出来た池状遺構 SX111 に木製祭祀具が出土し、何らかの祭祀行為が行われたと考えられる。また、池状遺構に隣接した範囲で多数の鍛冶製鉄が行われる。こうしたあり方は奈良県飛鳥池遺跡に類似する。この段階での鍛冶、精錬製鉄による廃棄物は SX100 や SX404 の斜面に廃棄されている。

SX100、SX404 出土遺物は膨大であるが、ここでは須恵器、土師器類についてその一部を示した

い(Fig.94 ～ 97)。須恵器には、1 ～ 45 の坏類、46、47 の椀、48 ～ 60 の高坏類、61 ～ 78 の壺類、79 ～ 84 は甕類である。壺の中で 76 は陶質土器の胴部上半である。土師器には、85 ～ 109 の椀類、111･112 の坏、113 ～ 115 の壺、116 ～ 118 の高坏などがある。このうち 85 ～ 90 は古代後期の高台付椀である。

SX111

グリットにあり、SX100 内の陸橋 SX187 により遮断された谷奥に形成された池状遺構である。その規模は長さ約 15m、幅約 10m、深さ約 0.8 m である。形成時期は陸橋形成後であるので第 3 面段階と考えられる。遺構内からは多数の須恵器、土師器、木製品が出土した。須恵器には、土師器には、木製品は別に示す。

14）その他の遺物

1）鉄製品

文中で十分に示せなかった遺物のうち、鉄器についてここでまとめて報告する（Fig.98)。古代の鉄器については SX92 からの鉄釘以外に 3 点が出土した（Fig.98 － 17 ～ 19)。20、21 はくさび、23 ～ 26 は鉄鏃、農工具としては 22 の U 字形鋤先、27 の鎌がある。

2）石製品

古代の石製品についてここでまとめて報告する。本遺跡では古代の石製品として権と紡錘車、玉類が出土した(Fig,99･100)。1 は権である。巾着形で頭部に穿孔のある砂岩製であり、長さ 4cm、幅 3.5cm、厚さ 1.7cm である。紡錘車は 32 点あり、全て滑石製である。断面が隅丸長方形と台形のものがある。2･3 には紋様か文字様の線刻があるが判読できない。また、32･33 は研磨、穿孔以前の未製品である。(Fig.99･100)。34 ～ 38 は滑石製臼玉である。なお、石製ではないが、ガラス製小玉 (39) もある。

3）木製品

本遺跡からは古代の多くの木器が出土した（Fig.101・102)。主に SX100 と SX404 からの出土である。1 は木簡、文字は判読できない。2 は陰陽物で男性器である。3 は刀装具である。4 は横櫛である。5 ～ 7 は不明、8 は曲げ物底部、9、10、19、20 は砧、11 は杭、12 ～ 14、18 は土器製作具で、12、18 は叩き当て具､13､14 は刷毛工具である。15 は馬具で鞍骨の一部である居木である。類例は少ない。16 は下駄歯か。17、22 は建築部材で組合せのためのほぞ穴がある。21 は人形か、同様の形態は 7、20 次調査でも出土している。23 ～ 26 は農工具であり、23 はエブリ、24 ～ 26 は鍬である。27 は不明である。28 と 29 は曲げ物底部であり、これだけは中世井戸 SE321 出土品である。

15）追加資料（中世）(Fig.103・104)

前回報告した 18 次調査地点の中世資料について、未報告分についてここで示しておきたい。

ここで示す遺物の多くは SX100 と SX404 の覆土上部から出土した。特に SX100 では第 2 面の中世水田土壌と床土など、第 3 面上位の包含層から古代遺物と混在して多くの中世遺物が出土した。1 ～ 4、18 ～ 24 は土師器皿である。5 ～ 7、25 ～ 42 は土師器坏である。10、43 ～ 47 は鍋鉢であり、9 は三脚鍋の脚部である。8 は東播系片口鉢である。11 ～ 17 は石鍋である。

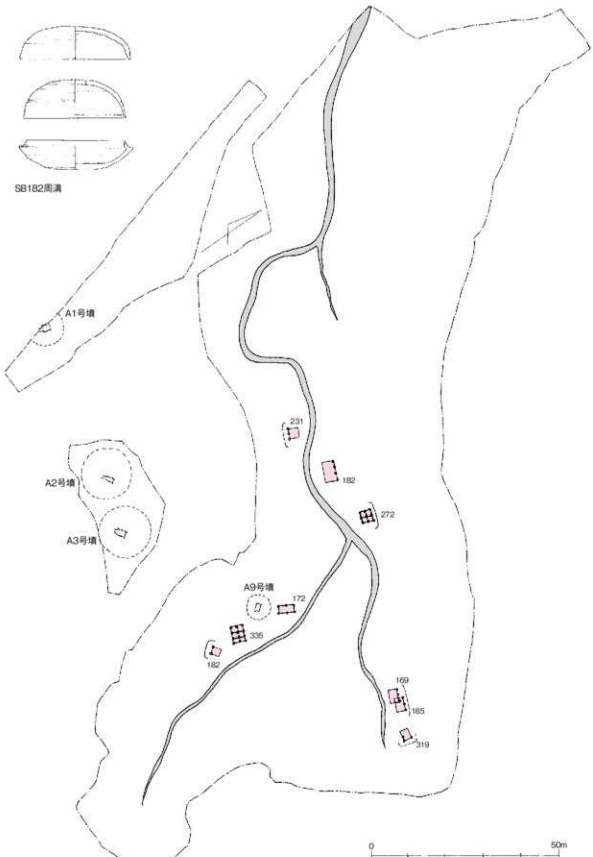


Fig.105　18 次古代遺構変遷図 1

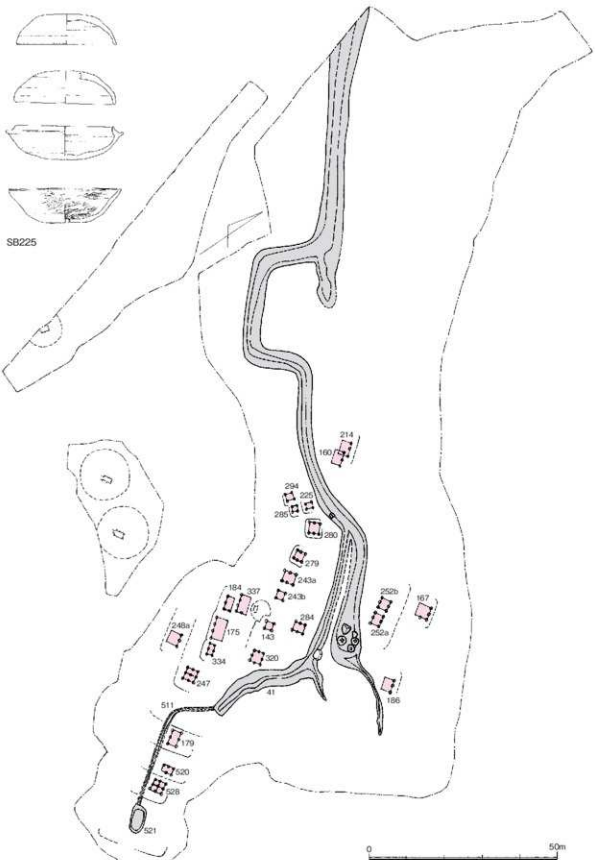


Fig.106　18 次古代遺構変遷図 2

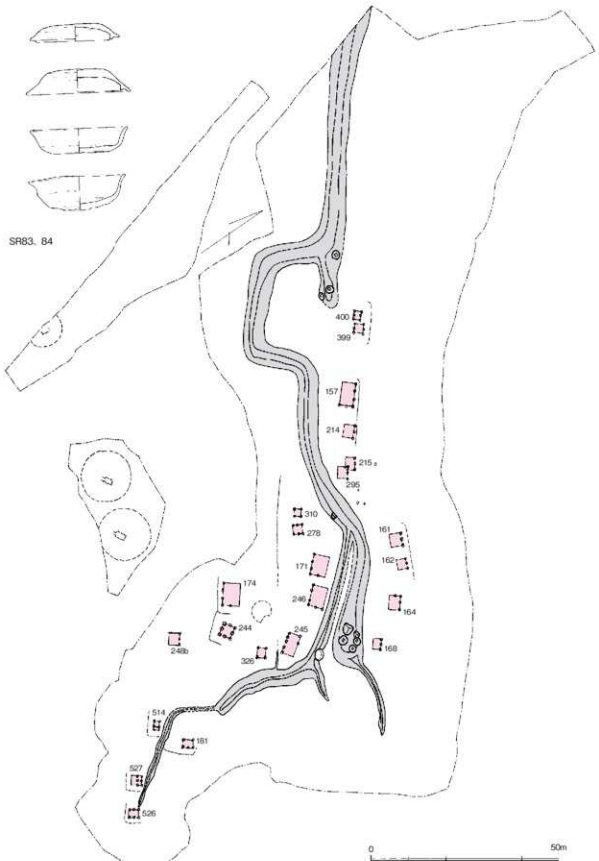


Fig.107　18 次古代遺構変遷図3

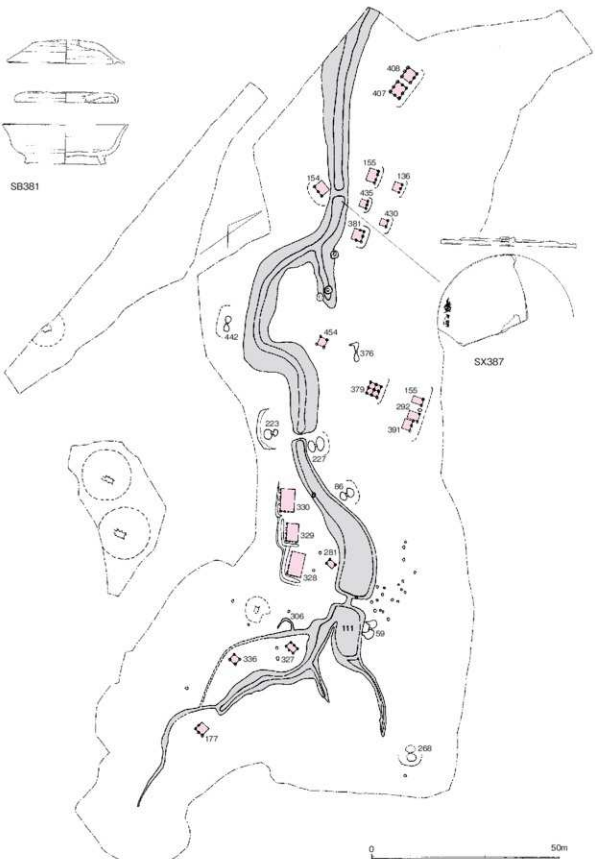


Fig.108　18 次古代遺構変遷図 4

3．まとめ

元岡・桑原遺跡群第18次調査地点（以下では「18次地点」と略する）では旧石器時代から中世に及ぶ多数の遺構、遺物が出土した。弥生時代以前と近世以降の遺構、遺物については小規模な生活痕跡である。本遺跡の重要性は、古墳時代後期から古代にかけての谷部全域を占拠する特殊な集落形成であり、その活動内容が明かとなったことである。この18次地点以外でも7、12、20、24次地点と同様に、谷部に展開するより大規模な生産遺跡や官衙的建物群が確認され、18次地点でのあり方はこの地域の遺跡群では特異な存在でないことも明らかになってきている。

第18次地点は桑原集落のある大原川流域の右岸にあり、北西に開口する幅約100m、奥行約300mの小谷である。現在、谷の開口部付近は比較的緩やかな地形であるが、中程から谷が狭まり両側斜面は急角度となり、谷奥では三方の斜面が迫っている。調査の進展を通じて判明したが、古墳時代以降は谷底の埋没が急速に進んでおり、谷奥部では最大6mを超えての埋没があった。長期に亘り斜面の浸食や土砂の流出が予測され、当初は現在よりもさらに急峻な地形であったと考えられる。二年以上の調査期間を通じ理解されたのは、夏は閉塞地形で湧水があるために湿度が高く、風が通らず極めて暑い。また冬は東～南～西の斜面が急なため日差しが届かず、北西の谷開口部が久米、桜井方面の峠に向いているために、玄界灘からの風雪が直接吹き込む。毎年この場所だけは氷雪の溶解が遅れる状況にあった。このように居住環境は極めて劣悪である。この谷に近世以降の住居が造られなかった背景とも理解できる。中世の別所僧坊も開口部の東斜面と、この谷で最も日当たりの良い場所を選び、谷奥には造営されていないことも納得される。ところが、古墳時代後期から古代にかけては、むしろ谷奥部を中心に大規模な土地の造成が行われ、多くの建物や各種の施設が配置されている。これはいかなる性格をもつ遺跡なのか、調査中から担当者だけでなく、多くの見学者からも疑問が寄せられていた。これに対する回答を即座に示すことは困難であるが、遺跡の詳細について再度検討し、調査担当者としての何らかの理解を示したい。

（1）18次地点の古墳時代～古代大規模造成事業と建物群の様相

本遺跡の遺構面は、その構成や不整合、また堆積状況から、大きく5群に区分できた。堆積土の上位から見れば、以下のようになる。

1．近世以降の農耕地、関連遺構造営による面…第1面
2．中世のテラス並びに集落、水田耕地、水路等の造成面…第2面
3．古代前期の壇、建物群、谷部の陸橋等、また製鉄関連遺構群に関わる造成面…第3面
4．古墳時代後期から古代初期の大規模な壇造成、建物、井戸群造営面…第4面
5．古墳時代後期以前の自然地形上で大きな造成を伴わない遺構群…第5面

このうち、第1，2面については前報告で示し、今回は第3．4面について報告した。

さて第4面は建物の重複があり、最大で四棟の重複が認められた。壇造成も方位を変えて二回行われている。建物方位や切り合いを考慮し、さらに大きく前半と後半の二群に区分できた。こうしたことから18次地点の古墳時代後期から古代までの遺構について第3、4面の遺構群を中心にさらに4段階に分けた（Fig.105～108）。以下ではこの各段階の遺構分布と構造を検討したい。

第1段階

第5面最新相であり、時期を決める良い資料はないが、SB182の外周溝内に須恵器Ⅲb期のもの

がある。SX100の混入遺物にもこの時期の遺物が認められることから、この段階は6世紀第3四半期を中心とする時期と考えている。第4面とした大規模造成が行われる直前の状況である。掘立柱建物9棟となどがある。その内訳は総柱建物8棟、側柱建物1棟である。その分布は、谷の南斜面の下方、すなわち谷底に近い位置にある。方位は地形に沿ってばらつきまとまることはないが、N-60～70°-Wをとるものがやや多い。また、古墳時代後期には竪穴式住居なども斜面に複数建てられている。この竪穴式住居と第5面の掘立柱建物群とが同時に存在した可能性は否定できない。竪穴式住居は次回報告する予定である。

なお、この時期は周辺の丘陵上や斜面で群集墳の築造や追葬行為が続いている。特にすぐ西側丘陵の桑原古墳群A群1～3号墳は至近距離にあり、本調査区で発見された小規模墳SO271（桑原古墳群A群9号墳）もこの古墳群に含まれるものである。つまり、建物群はこの古墳群の墓域に侵入して設けられている。なお、第5面は古墳時代後期以前を一括しており、弥生時代や縄文時代の包含層なども含まれている。しかし、この段階以前は建物などを含む本格的な集落形成はなく、生産活動の過程で一時的にこの谷部を利用した状況と考えられる。

第2段階

第4面古相であり、時期を決める資料としては、SB225外周溝や、石垣状遺構SX529などがあり、須恵器Ⅲb～Ⅳa期のものがある。SX529は第一段階との時期差は小さく、連続的な変遷も考えられる。6世紀第4四半期～7世紀第1四半期を中心とする時期と考えている。谷奥部を中心に斜面、中央流路などに大規模な造成が行われる。斜面の造成は、まず西側の旧谷部を埋め立て、斜面に3～4段の増造成面を形成している。壇の斜面部に石垣を構築する場所もある。また、旧谷部に変わる流路として溝SD511、SD41が掘られている。SD511の最上流部には石組を有する貯水遺構SX521が設けられる。SD511は直線的で両岸を石組で補強されている。中央流路SX100の上流部は基盤まで掘削され、導水路をもつ石組井戸SE286が設けられる。SE286の周囲には石組遺構や大磐3個が設置される。SD41は南斜面の直下に基盤まで掘り下げて掘削された溝であり、SD100の上流部に流下するが、直接合流せず、南側の大磐1付近で方向を変え、SD100と並行して約35m北流した付近で合流するように掘削されている。SD100は両岸に盛土により平坦面を設けたために、その斜面が土壁となる部分が多い。斜面には石垣や葺石状の構造物による補強の跡が各所に認められた。ただし、崩落部分も多く、保存状況は良くない。両側の増状平坦面には多くの建物が建てられるが、西側斜面の上部は近世の溜井、水路造営により壇全体が大きく破壊されている。この面での建物数はさらに多かったと考えられる。検出できた建物は全て掘立柱建物であり、その内訳は総柱建物23棟、側柱建物2棟である。建物は西側斜面とその上流部の調査4区の小谷部を中心とし、東斜面は棟数が少ない。側柱建物は西斜面増中段に近接して配置される。造成面並びに建物の主軸はN-35°-Wを中心とし、N-23～48°-Wに集中する。特に建物SB243A·B、173は斜面上側の柱筋がほぼ一致している。何らかの方位に関する規制があったと考えられる。このSB173建築の際に西側の古墳（A9号墳）の墳裾を破壊している。なお、建物SB225、294、295は一間一間の小型であり、西側斜面の北側に集中している。この3棟は地形に沿う配置をとり、他の建物とは異なる方位となっている。また建物には2棟間に切り合いや、建て替えが認められるものがあり、さらに小期区分されるか、第3段階へ継続したと考えられる。

第3段階

第4面新相であり、時期を決める資料としては壇状遺構SX402や鍛冶炉SR83·84などがあり、須恵器Ⅳb～Ⅴ期のものがある。この段階は7世紀第2四半期～同第3四半期を中心とする時期と考

えている。建物群やその他の遺構の基本的配置や構成は第2段階の延長にある。しかし、新たに主軸を違える壇造成が行われている。この段階には建物数が少なかった東斜面での壇造成や建物配置があり、谷開口部に近い位置へも遺構が広がっている。また、この段階には確実に鍛冶炉が認められるようになる。検出できた建物は全て掘立柱建物であり、その内訳は総柱建物18棟、側柱建物5棟である。西側斜面の建物が少なく見えるが、前段階に配置された建物の中で建て替えのあるSB279、243a、280などは、この範囲に新たな建物が配置されないことから見てもなお存続していた可能性がある。調査4区の小谷部では、より急斜面のSD511西側に3棟の建物が配置される。また側柱建物は西斜面壇中段と下段、東斜面の下段の3カ所に配置される。この段階に新たに設けられた建物の特徴として、SB157、244、245、319のように柱穴掘方の平面形が隅丸方形をとるものがある。新たに構築された造成面並びに建物の主軸はN-25～50°-Wを中心としたものが多く、特に中央谷部SX100を挟む両斜面の壇造成は軸線がほぼ並行する。これも何らかの方位に関する規制があったと考えられる。SX100上流部は埋没が進み、新たに石組井戸SE287が設置される。この井戸が掘り込まれる黒色土からは多くの木製品が出土した。その中には祭祀遺物や木簡や馬具鞍骨（居木）などがある。

第4段階

第3面であり、時期を決める資料としては建物SB329、379や壇造成SX387などがある。須恵器Ⅵ～Ⅶ期のものがある。7世紀第4四半期～8世紀第1四半期を中心とする時期と考えている。建物の配置が谷奥から谷開口部に還り、谷奥部はむしろ製鉄関連遺構が中心となり、調査4区の小谷部での建物は認められなくなる。中央谷部は埋没が進む中で再び大きく改変される。上流部では2カ所に陸橋が設けられ、上流部は陸橋に閉鎖された上流部が貯水施設となる。下流部では建物群と共に枝谷に新たに石組井戸が設けられる。検出できた建物は掘立柱建物と大壁建物であり、その内訳は総柱建物16棟、側柱建物1棟、大壁建物3棟である。西側斜面は総柱建物が集中していた下段部が埋め立てられ、新たな壇状平坦面が設けられ、外周溝をもつ大壁建物3棟が配置される。大壁建物は桁行5～7mと中型である。この建物を取り巻くように精錬炉や鍛冶炉が配置している。特にSX100の対岸の下段平坦面にはこの時期に建物がなく、30基近い鍛冶炉が集中して検出されている。この鍛冶炉群と隣接して陸橋により出現した貯水池との関係は、奈良県飛鳥池遺跡の鍛冶工房群との類似が指摘されている。斜面東側の建物は開口部付近を中心とし、ほとんど総柱建物となる。新たに構築された造成面並びに建物の主軸はN-10～30°-Wを中心としたものが多い。ただし大壁建物はN-35～55°-Wをとり、異なる主軸となる。注目される遺物としては、石製「権」や墨書土器に見られる「廣刀自」がある。

なお、この第4段階を最後に、18次地点の古代遺構は失われる。谷部覆土の上部から古代末（10世紀～11世紀）の土師器類などが少量出土したが、遺構などは確認できなかった。この谷での生産活動の痕跡は、中世の別所僧坊群と関連すると見られる小規模な水田開発まではほとんど存在しないといえる。

（2）遺跡構造に見る6～7世紀の画期と特質

18次地点の古墳時代後期から古代の遺構群について検出した第3、4面を中心に4段階に区分して遺構の変遷を概観した。その結果、6世紀後半から8世紀初頭までの間に大きく4回の画期を認めることが出来た。

まず、第1の画期としては、6世紀後半にこの谷部への建物配置が行われたことである。第1段階としたこの時期には、大規模な地形改変行為は認められない。しかし、この場所は当時葬送行為が継

続していた群集墳の墓域内であり、外部から遮断された隠蔽性の強い地形であるが、生産性が低く、居住環境が劣悪である。この場所へあえて進出した集団の背景とその目的が問われる。第2の画期は、6世紀末から7世紀初頭頃である。谷奥部を中心に河川の付け替えや、石垣斜面の増造成など大規模な造成工事を行い、多数の建物が整然と設置されたことである。ただし確認された25棟の建物の9割以上が倉庫と見られる総柱建物である。この点からも18次地点が完結した居住域（集落）としての性格をもつとは考え難い。特殊な倉庫群と僅かな管理棟で構成された場所であったと考えられる。倉庫は一間一間、一間二間などが多く、残された柱痕跡からも小規模なものと復元できる。その管理主体と目的が問われる。第3の画期は、7世紀中葉頃にある。新たな土地区画が行われ、なお倉庫主体ではあるが建物全体の2割強に居住域の可能性がある側柱建物が含まれたことである。この居住域は3～4箇所に分かれていて、倉庫の維持管理とともに複数の集団が配置された段階と考えられる。この時点で少数ではあるが、鍛冶製鉄が行われている。第4の画期は、7世紀末頃である。これまでの倉庫主体の施設形態とともに新たに製鉄関連施設群が現れたことである。倉庫群はこれまでの隠蔽性の高い谷奥部でなく、谷の開口部へ移動している。谷奥部は再び土地改変が行われ、大壁建物を中心に精錬炉、鍛冶炉が多数認められるなど、鉄生産を中心とする場所に変わっている。さて、こうした4つの画期については、同じ画期を示す遺跡が元岡遺跡群内でも複数確認されている。7次、12次、20次、24次、26次、27次、44次地点では、4つの画期の複数、もしくはその一部が存在している。こうした画期は18次地点のみのあり方ではなく、少なくとも糸島半島の広域に現われた何らかの動勢を反映していると見るべきであろう。

（3）6～7世紀の糸島半島の情勢とその背景

18次地点では、6世紀から始まる倉庫群の維持管理体制と、それに関わり土地の改変や特殊な構造物の設置など一般集落とは異なる様相を強く示した。また7世紀末には本地域の特徴でもある製鉄操業も現れている。こうした様相は地域固有の問題と共に、大きく国家的動態と関連する可能性が指摘されている。この点を調査成果と画期、問題点をふまえて別に検討したい。ただし、日本書紀に推古2(602)年2月、新羅征討将軍として久米皇子が兵二万五千を授けられ志摩郡に屯営したと記された記述をもとに、本地域の古代集落や古代製鉄との関連を説く意見も多いが、問題はその段階のみにとどまらない。6～7世紀の大和政権の対外交渉の中で、朝鮮半島との関係が最も重視された要件であったことは疑問の余地のないところである。しかし、その研究に関わる文献資料は限られ、特に『日本書紀』によるところが大きい。よく知られている欽明23（562）年条にある任那救援のための紀男麻呂宿禰の出兵記事は、その真偽や記事背景などの資料批判が必要なことはともかく、6世紀代に幾度も現れる百済などへの派兵記事の一つなのである。注目されるのはそうした6世紀代の派兵記事の多くに「筑紫」を介しての出兵が記されることで、特に欽明17（556）年春正月条に、「百済王子恵請罷。仍賜兵仗良馬甚多。亦頻賞録。衆所欽歎。於是、遣阿部臣、佐伯連、播磨直、率筑紫国舟師、衛送達國。別遣筑紫火君。」とあり、派兵に際して糸島地域の勢力や集団との深い関係を見ることが出来る。遺跡の所在する糸島半島は北部九州の北岸に突出し、良好な港湾地域である博多湾、今津湾を控え、弥生時代以降、大陸や半島への渡海の重要地域となっている。大和政権の対外交渉とそれに関わる可能性が強い本遺跡群の特質や変遷の背景については次回報告のなかで示したい。

図　版

1. 1区全景（北西から）

2. 1区全景（北東から）

1. SR59 検出状況（南から）

2. SR59 箱形炉断面（西から）

1. SR86 排滓状況（西から）

2. SR86（南から）

1. SR86 炉底断面（西から）

2. SR223 炉底部（北から）

1. SR223 炉底断面（南から）

2. SR227 検出状況（南から）

1. SR54 検出状況（西から）

2. SR405 断面（南から）

1. SR221（西から）

2. SR221 炉底半裁状況（西から）

1. 炉 SR75 断面（南から）

2. 炉 SR76 断面（南から）

3. 炉 SR82 断面（西から）

4. 炉 SR221（西から）

5. 炉 SR222（東から）

6. SR398（南から）

7. SR442（西から）

1. G～J－16～18 グリット建物群（西から）

2. 西斜面建物群（東から）

1. H・I－19・20 グリット柱穴群（北から）

2. G・H－19・20 グリット柱穴群（北から）

1. Ⅰ～K－13～15グリット遺構全景（西から）

2. 4区全景（北西から）

1. SB167（西から）

2. SB214（西から）

1. SB215（西から）

2. SB216A（東から）

1. SB217（東から）

2. SB218（北から）

1. SB225（北から）

2. SB225P-1 土層断面（南から）

1. SB231 土層（北から）

2. SB243A（南から）

1. SB243B（南から）

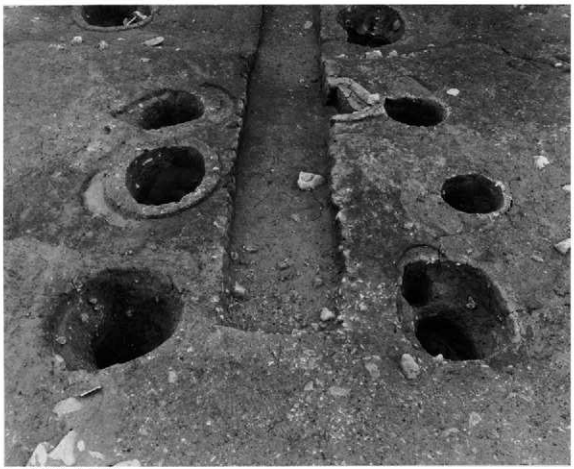
2. SB248A・B 全景（北から）

1. SB252（南東から）

2. SB252（東から）

1. SB272（西から）

2. SB272（西から）



1. SB278（南から）

2. SB278・280（南から）

1. SB279（北から）

2. SB280（南から）

1. SB280P-1（西から）

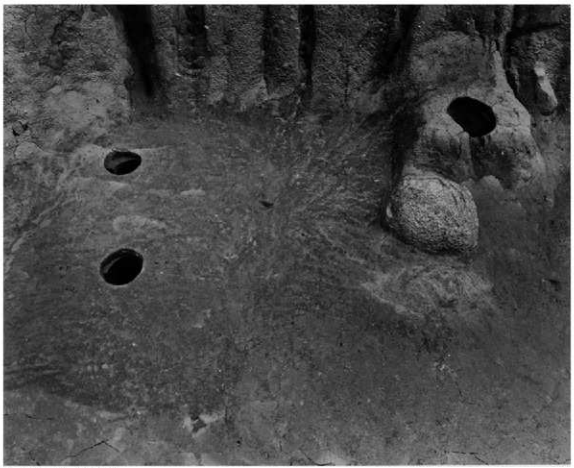
2. SB280P-5（西から）

1. SB284（南西から）

2. SB290（南から）

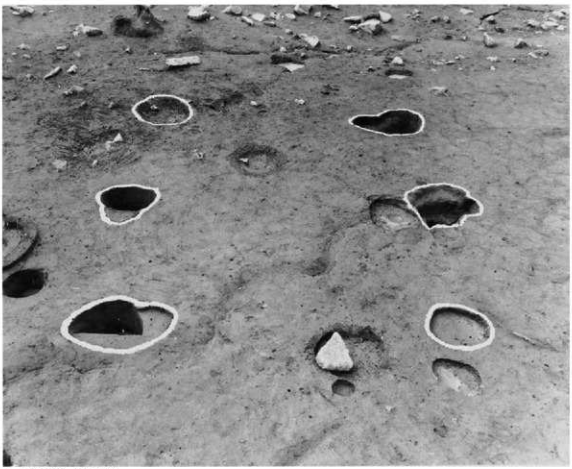
1. SB285・310（南から）

2. SB294（南から）



1. SB319（西から）

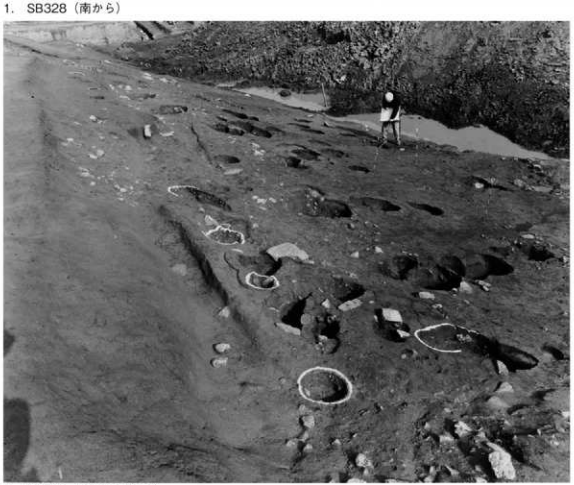
2. SB320（西から）



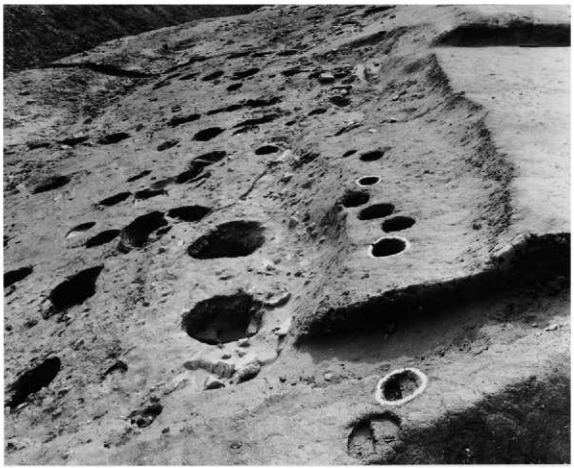
1. SB326（東から）

2. SB327（南西から）

1. SB328（南から）



2. SB329・330（南から）



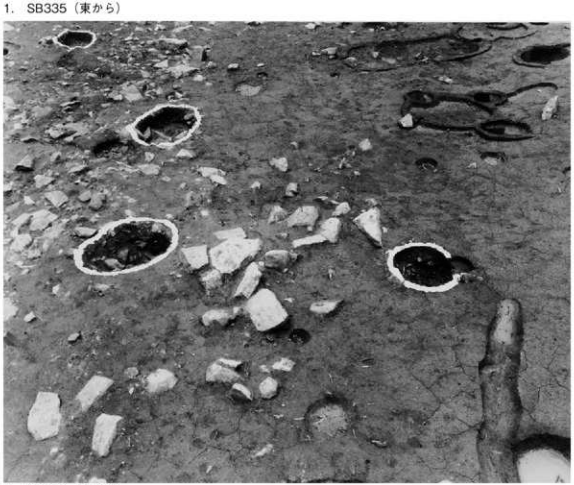
1. SB330（北から）

2. SB332（東から）

1. SB333（東から）

2. SB334（東から）

1. SB335（東から）



2. SB336（東から）

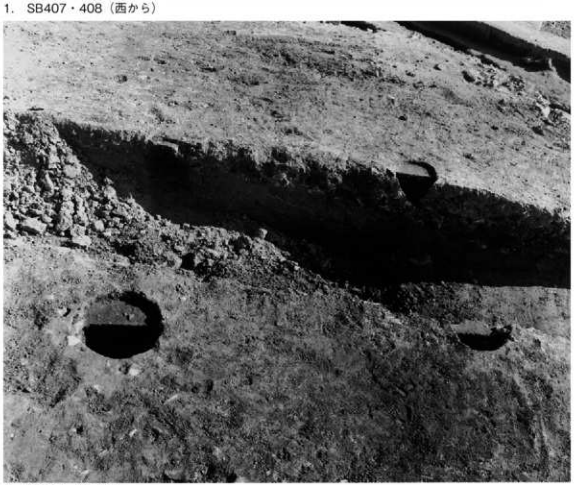
1. SB337（南から）

2. SB349 半掘状況（東から）

1. SB381（南から）

2. SB399・400（北から）

1. SB407・408（西から）



2. SB454（北から）

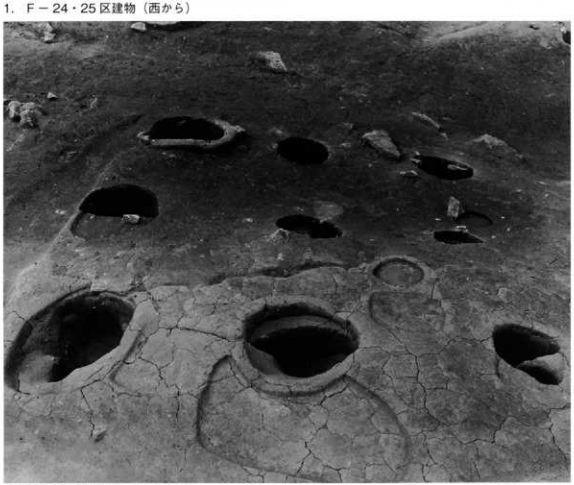
1. SB514（東から）

2. SB526（南から）

1. SB527（南東から）

2. SB527・528（東から）

1. F－24・25区建物（西から）



2. SB528（東から）

1. SX100D-1 区下部礫堆（南西から）

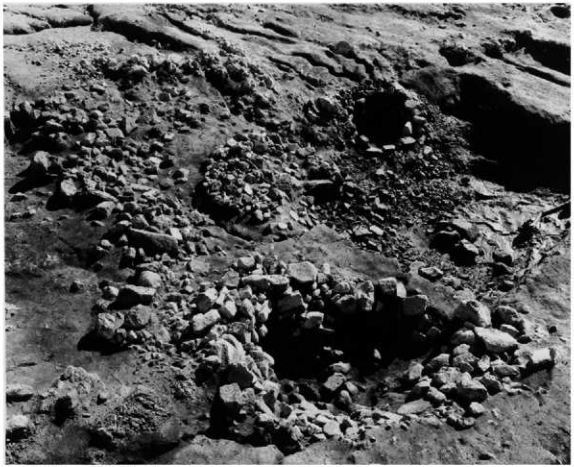
2. SX100 谷頭部（北から）

1. SE286～288（東から）

2. SE286 近景（西から）

1. SE286（南から）

2. SE287（東から）



1. SE421・422（北から）

2. SE422 調査状況（西から）

1. SE453 掘方内石組（北から）

2. SE429 完掘状況（南から）

1. SD41（北から）

2. SD41（西から）

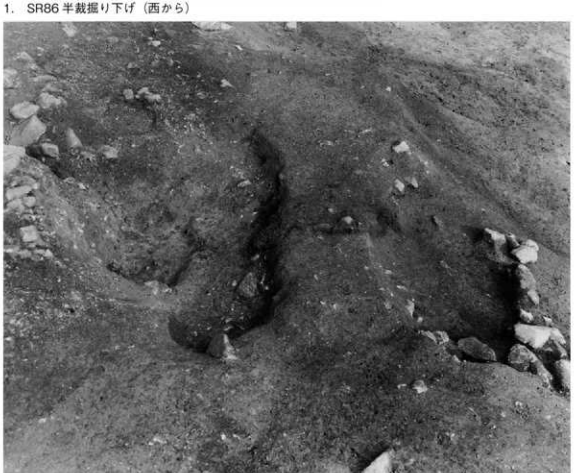
1. SD41 南側土層断面（北から）

2. SD41 1 区北壁土層（南から）

1. SR59 排滓壙調査状況（南から）

2. SR59 排滓壙断面（南から）

1. SR86 半裁掘り下げ（西から）



2. SR86（西から）

1. SX202 縦軸土層（北東から）

2. SX219 全景（北東から）

1. SR223全景（東から）

2. SR227（西から）

1. SR376 完掘状況（東から）

2. SX441（南から）

1. SK42 土層断面（西から）

2. SR45 土層（南から）

3. SK46 土層断面（北から）

4. SK47 土層断面（西から）

5. SR60・61 検出状況（西から）

6. SR62 完掘状況（南から）

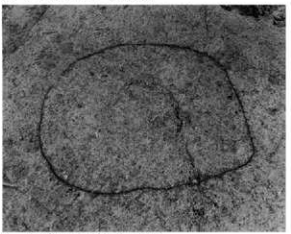
7. SR64 土層断面（北から）

8. 炉 SR65 断面（西から）

1. SR66 土層断面（北から）

2. 炉 SR67 断面（南から）

3. 炉 SR68 断面（南から）



4. SR68 土層断面（南から）

5. SR69 検出状況（南から）

6. 炉 SR70 断面（南から）

7. 炉 SR72 断面（南から）

8. 炉 SR73 断面（南から）

1. 炉 SR77 断面（東から）

2. 炉 SR78 断面（南から）

3. 炉 SR79 断面（東から）

4. 炉 SR80 断面（西から）

5. 炉 SR85 断面（西から）

6. 炉 SR87 断面（西から）

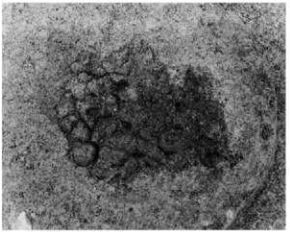
7. SR206 断面（西から）

8. SX224 断面土層（南から）

1. SR273 断面（北から）

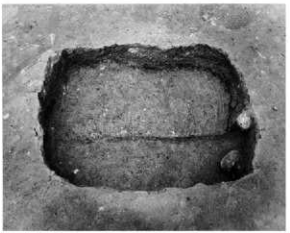
2. SR274 掘り下げ（西から）

3. SR318 断面（東から）



4. SR398（南から）

5. SR44 完掘状況（西から）



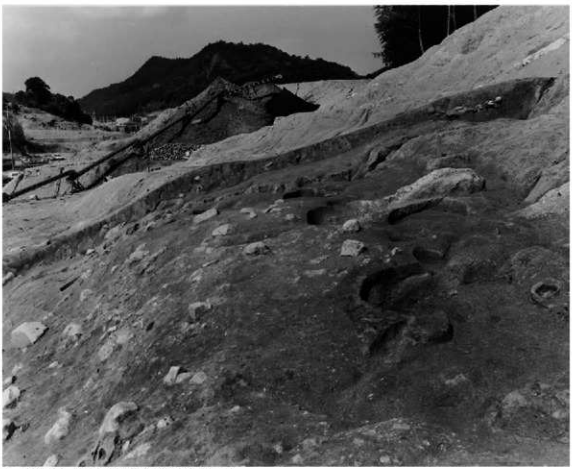
6. 焼土壙 SR45 完掘状況（南から）

7. 焼土壙 SR84 完掘状況（南から）

8. 焼土壙 SR84 断面（南から）

1. SD296 周辺建物群（南から）

2. SD296 周辺建物群（東から）



1. SX100（SB161）F区西壁（東から）

2. SX518 断面土層（東から）

1. 陸橋 SX100（北から）

2. 陸橋 SX100 内石組遺構（東から）

1. 陸橋 SX224（北から）

2. 1区第3面南側（北から）

1. SX100F-2 区礫堆検出状況（西から）

2. SX100F1・2 区礫堆検出状況（北から）

1. SX93 破砕大甕（東から）

2. SX529（西から）

1. SX107（西から）

2. SX529 検出状況（東から）

1. 埋甕 SX229（西から）

2. 埋甕 SX68 断面（南から）

3. SX100C-1 区木簡出土状況

4. SX100 居木出土状況（南から）

5. SX100出土タタキあて具（表） 6. SX100出土タタキあて具（側） 7. SX100出土ハケ工具（裏） 8. SX100出土ハケ工具2

報告書抄録

ふりがな	きゅうしゅうだいがくとうごういてんちないまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	九州大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	元岡・桑原遺跡群16　－第18次調査の報告2－
巻次	16
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第1102集
編著者名	吉留秀敏
編集機関	福岡市教育委員会
発行年月日	平成22年3月23日
郵便番号	810-8621
電話番号	092-711-4667
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1
遺跡名ふりがな	もとおかくわばらいせきぐん
遺跡名	元岡・桑原遺跡群
所在地ふりがな	にしくおおあざくわばらあざべっぷ
所在地	西区大字桑原字別府
市町村コード	40135
遺跡番号	2604
北緯	33-36-01
東経	130-13-27
調査期間	1999.10.10～2002.2.15
調査面積	16800㎡
調査原因	九州大学移転予定地造成工事
種別	官衙＋造成地＋井戸＋水路＋製鉄関連遺構
主な時代	古墳時代/古代
主な遺構	堆状造成面＋掘立柱建物＋大壁建物＋井戸＋土坑＋溝＋精錬炉＋鍛冶炉＋焼土壙＋配石遺構＋包含層
主な遺物	須恵器（墨書土器含む）＋土師器＋陶質土器＋木器（居木・木簡含む）＋鉄器＋石製品（権含む）＋鉄器
特記事項	古墳時代後期から古代初期まで、谷奥部に造営された特殊な官衙的遺構群である。古墳時代後期には、谷部の斜面に複数の堆状造成地を設け、大規模な倉庫群が幾度も建替えながら配置される。谷底部には石組井戸や配石遺構が造られる。古代初期には大壁建物と製鉄関連遺構が加わる。遺物には半島系の陶質土器、木簡や墨書土器、馬具鞍骨（居木）、石製権などがある。遺跡立地と構成遺構の特異な様相から、官衙的性格が強い特殊な施設群と考えられる。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1102集
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群16
－第18次調査の報告2－

2010年3月23日
発行　福岡市教育委員会
住所　福岡市中央区天神1－8－1
印刷　久野印刷株式会社
住所　福岡市博多区奈良屋町3－1

元岡・桑原遺跡群第18次調査　第3・4面遺構全体図（1/500）